

総社市埋蔵文化財調査年報 19

(平成 20 年度)

2010年3月

岡山県総社市教育委員会

総社市埋蔵文化財調査年報19(平成20年度) 正誤表

ページ	位置	訂正前	訂正後
図・図版 目次	第15図	(S=1/5,000)	(S=1/50,000)
図・図版 目次	第50図	(S=1/5,000)	(S=1/8,000)
図・図版 目次	第51図	(S=1/2,000)	(S=1/3,200)
図・図版 目次	第71図	(S=1/300)	(S=1/200)
9	第5表の93番	井手字 <u>庄</u> 義	井手字 <u>庄</u> 義
14	20行	であるか,	であるが,
20	第15図	(S=1/5,000)	(S=1/50,000)
22	第19図T-4	M.	M. L-2.5m
34	6行目	<u>1</u> 4世紀	14世紀
34	7行目	「文字の欠落」	T 3
34	第45図版	T <u>2</u> (南から)	T <u>4</u> (南から)
38	第50図	(S=1/5,000)	(S=1/8,000)
38	第51図	(S=1/2,000)	(S=1/3,200)
47	4行目	2009	2008
50	第71図	(S=1/300)	(S=1/200)
54	3行目	金井戸御所	金井戸字御所
54	21行目	S D <u>0</u> 4	S D 04
54	24行目	S E 0 5	S E 05
56	第86図	底位部	低位部
62	2行目	真壁遺跡群	三輪遺跡群
110	8行目	<u>3.</u> まとめ	4.まとめ

序

総社市は、岡山県南西部に位置し、市域の北に広がる吉備高原の一部を形成する丘陵地と、南に広がる肥沃な平野からなりたっています。とくに岡山県三大河川の一つである高梁川が市域の中央を北から南に流れ、豊かな水の恵みを与えています。

気候も年平均気温16.5℃前後、雨量は年間1,000mm前後と、瀬戸内海特有の温暖かつ少雨で晴天に恵まれています。

この地理的環境や自然環境によってわが郷土には、古より多くの人々の生活が営まれてきました。例えば古墳時代には岡山県下第二位の規模を誇る作山古墳が築かれたこと、奈良時代には備中国の国府が置かれ、国分僧・尼寺が建立されたことなどから総社市がこの地域の中心地として位置付けられ、それらを支えうるだけの人々が生活していたものと考えられます。その証としての遺跡は、市内のいたるところに残されています。われわれの生活もその礎の元になりたっています。

しかし、その反面、長年の人々の営みの中で破壊され消えていった遺跡も少なくありません。

過去より現在のわれわれに引き継がれてきた貴重な文化財を守り、未来へと継承していくことは、われわれ市民一人ひとりの責務であります。しかし、開発等により現状保存ができなかった遺跡については、発掘調査を実施して記録に収め、保存していくことも重要なこととなります。

ここに刊行する本書も、平成20年度に実施した発掘調査等の成果を記録として収めたものになります。われわれに引き継がれてきた郷土の歴史をひも解く遺跡への理解を深める上で一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査等に際しまして御協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げるとともに、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年3月

総社市教育委員会

教育長 乗田交三

例　　言

1. 本書は、総社市教育委員会が平成20年度に実施した埋蔵文化財の立会・試掘・確認調査および発掘調査等について、その概要もしくは報告をまとめたものである。
2. 本書の作成は、各調査の担当者が分担・執筆し、それらを文化課で校閲・校正したもので、各文末に執筆担当者名を記し、文責とする。執筆は文化課職員、谷山雅彦・平井典子・武田恭彰・前角和夫・高橋進一・松尾洋平が行い、編集は前角が行った。
3. 本書に関する写真や図面、出土遺物等については、総社市埋蔵文化財学習の館で保管している。

凡　　例

1. 本書に用いた標高は海拔高のほかに任意高があり、方位については国土座標系の座標北と磁北とがある。
2. 本書に掲載した挿図のうち、位置図等の地形図は総社市発行の都市計画図25,000分の1および2,500分の1の地形図を複製し、加筆したものである。
3. 本書の遺構ならびに遺物の実測図の縮尺率については各図面に図示または明記している。



総社市位置図

目 次

序 文
例 言
凡 例

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

平成20年度 埋蔵文化財行政の概要 1

2. 立会・試掘・確認調査の概要

1. 大文字遺跡（栢寺廃寺）の確認調査 15
2. 土採取事業に伴う確認調査 17
3. 店舗新築に伴う造成工事の立会調査 19
4. ガソリンスタンド建設に伴う試掘調査 20
5. 共同住宅建設に伴う試掘調査 21
6. 市道（宿支線3026号道）拡幅工事に伴う確認調査 23
7. 携帯基地局建設工事に伴う立会調査 25
8. 集合住宅建設に伴う確認調査 26
9. 個人住宅建設に伴う立会調査 29
10. 工場増築工事に伴う確認調査 30
11. 分譲地造成工事に伴う確認調査 32
12. 備中国分寺参道改修工事に伴う立会調査 35
13. 広告塔設置に伴う立会調査 38
14. 携帯基地局建設工事に伴う確認調査 39
15. 共同住宅建設工事に伴う確認調査 41
16. 民家雍壁工事に伴う立会調査 42

3. 発掘調査の概要

1. 平成20年度 清音駅東地区整備事業に伴う発掘調査 47
2. 駅南区画整理事業に伴う発掘調査 50
3. 国府川改修工事に伴う発掘調査（5） 54
4. 常盤幼稚園園舎増築に伴う発掘調査 62

4. 発掘調査の報告

上原遺跡発掘調査報告 65

5. 史跡整備事業の概要

2008（平成20）年度 鬼城山環境整備事業 103

6. 付載

宮路谷瓦窯の採集遺物について 105

図・図版目次

—総社市埋蔵文化財行政の概要—	
第1図	立会・確認調査位置図1 (S=1/110,000) …… 2
第2図	立会・確認調査位置図2 (S=1/60,000) …… 3
—立会・試掘・確認調査の概要—	
大文字遺跡（柏寺廃寺）の確認調査	
第3図	調査地位置図 (S=1/5,000) …… 15
第4図版	文字瓦① …… 16
第5図版	文字瓦② …… 16
土採取事業に伴う確認調査	
第6図	調査地位置図 (S=1/5,000) …… 17
第7図	トレント位置図 (S=1/2,000) …… 18
第8図版	地頭3号墳 昭和49（1974）年分布 調査時の全景（小野一臣氏撮影） …… 18
第9図版	地頭3号墳及び調査地遠景 …… 18
第10図版	トレント断面（東南から） …… 18
第11図版	トレント断面（北東から） …… 18
店舗新築に伴う造成工事の立会調査	
第12図	調査地位置図 (S=1/5,000) …… 19
第13図	トレント平・断面図 (S=1/40) …… 19
第14図版	調査状況（東から） …… 19
ガソリンスタンド建設に伴う試掘調査	
第15図	調査地位置図 (S=1/5,000) …… 20
第16図	トレント位置図と土層柱状図 (S=1/1,000, 1/40) …… 20
共同住宅建設に伴う試掘調査	
第17図	調査地位置図 (S=1/8,000) …… 21
第18図	トレント位置図 (S=1/2,000) …… 22
第19図	T-1～T-4土層断面図 (S=1/40) …… 22
第20図版	T-1土層断面図（南から） …… 22
第21図版	T-4土層断面図（南東から） …… 22
市道（宿支線3026号道）拡幅工事に伴う確認調査	
第22図	調査地位置図 (S=1/50,000) …… 23
第23図	トレント配置図 (S=1/1,000) …… 23
第24図	トレント平・断面図 (S=1/40) …… 24
第25図版	各トレント断面 …… 24
携帯基地局建設工事に伴う立会調査	
第26図	土層柱状図 (S=1/40) …… 25
第27図版	南西隅掘削状況（東から） …… 25
第28図版	土層断面（東から） …… 25
第29図	調査地位置図 (S=1/8,000) …… 25
集合住宅建設に伴う確認調査	
第30図	調査地位置図 (S=1/10,000) …… 26
第31図	トレント平・断面図 (S=1/600, 1/60) …… 27
第32図版	各トレントの構造と土層断面 …… 28
個人住宅建設に伴う立会調査	
第33図	土層断面図 (S=1/40) …… 29
第34図版	土層断面 …… 29
第35図	調査地位置図 (S=1/5,000) …… 29
工場増築工事に伴う確認調査	
第36図	調査地位置図 (S=1/5,000) …… 30
第37図	トレント土層断面図 (S=1/40) …… 31
第38図版	調査地近景 …… 31
第39図版	西トレント土層断面（西から） …… 31
第40図版	東トレント土層断面（南から） …… 31
分譲地造成工事に伴う確認調査	
第41図	調査地位置図 (S=1/5,000) …… 32
第42図	トレント配置図 (S=1/1,000) …… 33
第43図	各トレント平・断面図 (S=1/60) …… 33
第44図	出土遺物 (S=1/4・1/2) …… 33
第45図版	各トレントの構造と土層断面 …… 34
備中国分寺参道改修工事に伴う立会調査	
第46図	調査地位置図 (S=1/2,000) …… 36
第47図版	参道（東から） …… 36
第48図版	参道西側調査区南北溝（西から） …… 36
第49図	参道西側調査区土層断面図 (S=1/40) …… 37
広告塔設置に伴う立会調査	
第50図	調査地位置図 (S=1/5,000) …… 38
第51図	柱状図位置図 (S=1/2,000) …… 38
第52図	柱状図 (S=1/40) …… 38
携帯基地局建設工事に伴う確認調査	
第53図	調査地位置図 (S=1/25,000) …… 39
第54図	トレント配置図 (S=1/300) …… 39
第55図	T-1断面図 (S=1/100) …… 39
第56図	出土遺物 (S=1/4) …… 40
共同住宅建設工事に伴う確認調査	
第57図	調査地位置図 (S=1/5,000) …… 41
第58図	トレント配置図 (S=1/600) …… 41
第59図	各トレント平・断面図 (S=1/60) …… 41
民家雍壁工事に伴う立会調査	
第60図	宿寺山古墳調査区位置図 (S=1/1,000) 原図は『山手村史』本編（一部加筆） …… 43
第61図	宿寺山古墳墳丘土層断面図 (S=1/40) …… 44
第62図	宿寺山古墳調査区全体図 (S=1/200) …… 44
第63図版	調査地遠景（西から） …… 45
第64図版	墳丘盛土断面（南から） …… 45
第65図版	前方部西側斜面葺石検出状況 …… 45
—発掘調査の概要—	
平成20年度 清音駅東地区整備事業に伴う発掘調査	
第66図	調査地位置図 (S=1/1,000) …… 47
第67図	2区構造配置図 (S=1/300) …… 48

第68図	3区遺構配置図 (S=1/300)	49	第93図版	確認調査区大溝検出状態 (東から)	61
第69図版	2区屋敷溝検出状況	49		常盤幼稚園園舎増築に伴う発掘調査	
第70図版	3区屋敷溝の遺物出土状況	49	第94図	調査地位置図 (S=1/5,000)	62
駅南区画整理事業に伴う発掘調査			第95図	常盤幼稚園園舎増築予定地遺構配置図 (S=1/200)	63
第71図	区画道53号線 3区遺構配置図 (S=1/300)	50	第96図版	遺構完掘状況 (西から)	63
第72図	調査地位置図 (S=1/5,000)	50	第97図版	微高地の下がり完掘状況 (南西から)	63
第73図版	区画道49号線完掘 (西から)	51	第98図版	微高地の下がり南壁断面 (北から)	63
第74図	区画道18号 4区遺構配置図 (S=1/200)	51	第99図版	微高地の下がり内遺物出土状況 (西から)	63
第75図	区画道57号線遺構配置図 (S=1/200)	51			
第76図版	区画道57号線完掘 (北西から)	51			
第77図	常盤公園施設予定地西側調査区遺構配置図 (S=1/400)	52			
第78図	常盤公園施設予定地東側調査区遺構配置図 (S=1/200)	52			
第79図	区画道14号線・区画道19号線 2区遺構配置図 (S=1/400)	52			
第80図版	区画道19号線 2区 (西から)	53			
第81図版	区画道19号線 2区地鎮か (東から)	53			
第82図版	区画道14号線 (北東から)	53			
第83図版	区画道50号線 (東から)	53			
第84図	区画道50号線遺構配置図 (S=1/300)	53			
国府川改修工事に伴う発掘調査 (5)					
第85図	御所遺跡調査区位置図 (S=1/2,000)	55	第165図	宮路谷瓦窯位置図 (S=1/10,000)	105
第86図	御所遺跡遺構配置図 (S=1/200)	56	第166図	出土遺物 1	106
第87図	御所遺跡東西方向断面図 (S=1/40)	57	第167図	出土遺物 2	107
第88図	出土遺物 (S=1/4)	58	第168図	出土遺物 3	108
第89図	御所遺跡確認調査区大溝平面図・土層断面図 (S=1/40)	59	第169図	出土遺物 4	109
第90図	「服部郷図」作図原理 (註-1より)	60	第170図版	宮路谷瓦窯全景 (北東から)	111
第91図版	水田畦畔 (南から)	61	第171図版	東窯 (東から)	111
第92図版	水田畦畔 (北から)	61	第172図版	東窯 底部の瓦 (東から)	111
			第173図版	西窯出土遺物	111
			第174図版	調査地近景	112
			第175図版	東窯断面	112

表 目 次

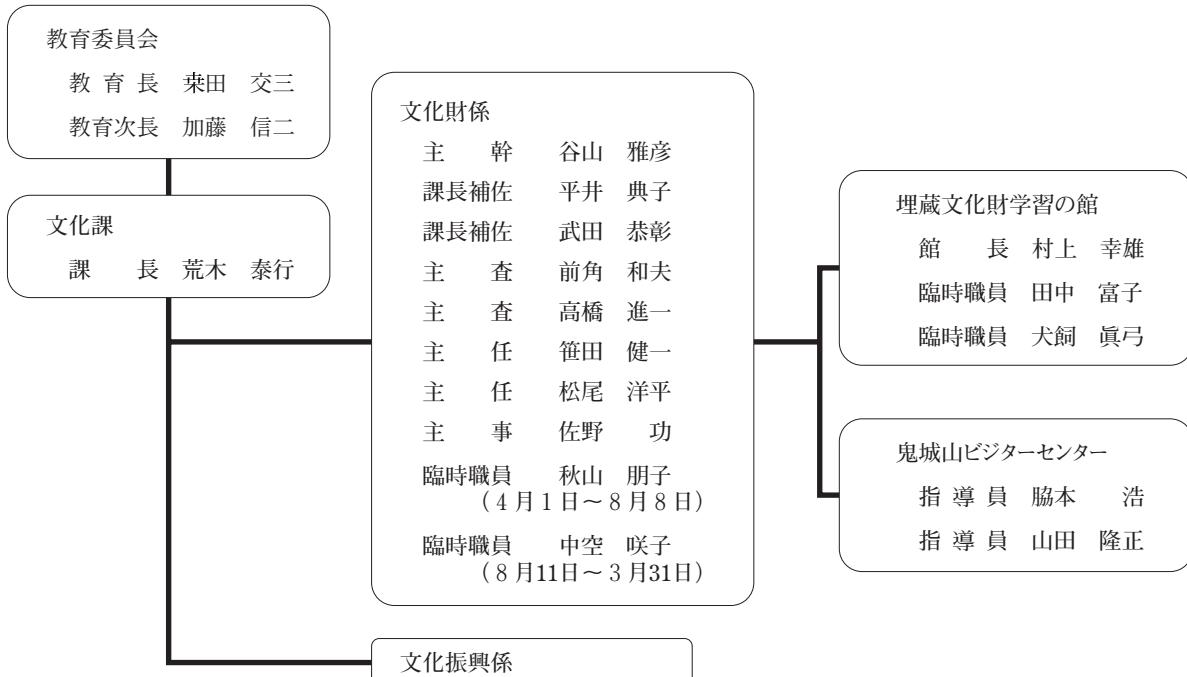
一総社市埋蔵文化財行政の概要—					
第 1 表	発掘調査一覧	1	第 6 表	学習の館入館者	12
第 2 表	平成20年度埋蔵文化財発掘の届出・通知	4	第 7 表	ビジターセンターリーフレット配布数	13
第 3 表	平成20年度埋蔵文化財試掘・確認調査票	5	第 8 表	鬼城山パンフレット配布数	13
第 4 表	建築確認申請の推移	5			
第 5 表	事前審査一覧	6			
—発掘調査の報告—					
上原遺跡発掘調査報告					
表目次 (第 9 ~11表)					66

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

平成20年度埋蔵文化財行政の概要

総社市内における埋蔵文化財に関しては、史跡整備事業をはじめ、開発行為にともなう記録保存を目的とする発掘調査、そのほかの埋蔵文化財保護行政、いずれも文化課文化財係で対応をしている。

〔組織〕



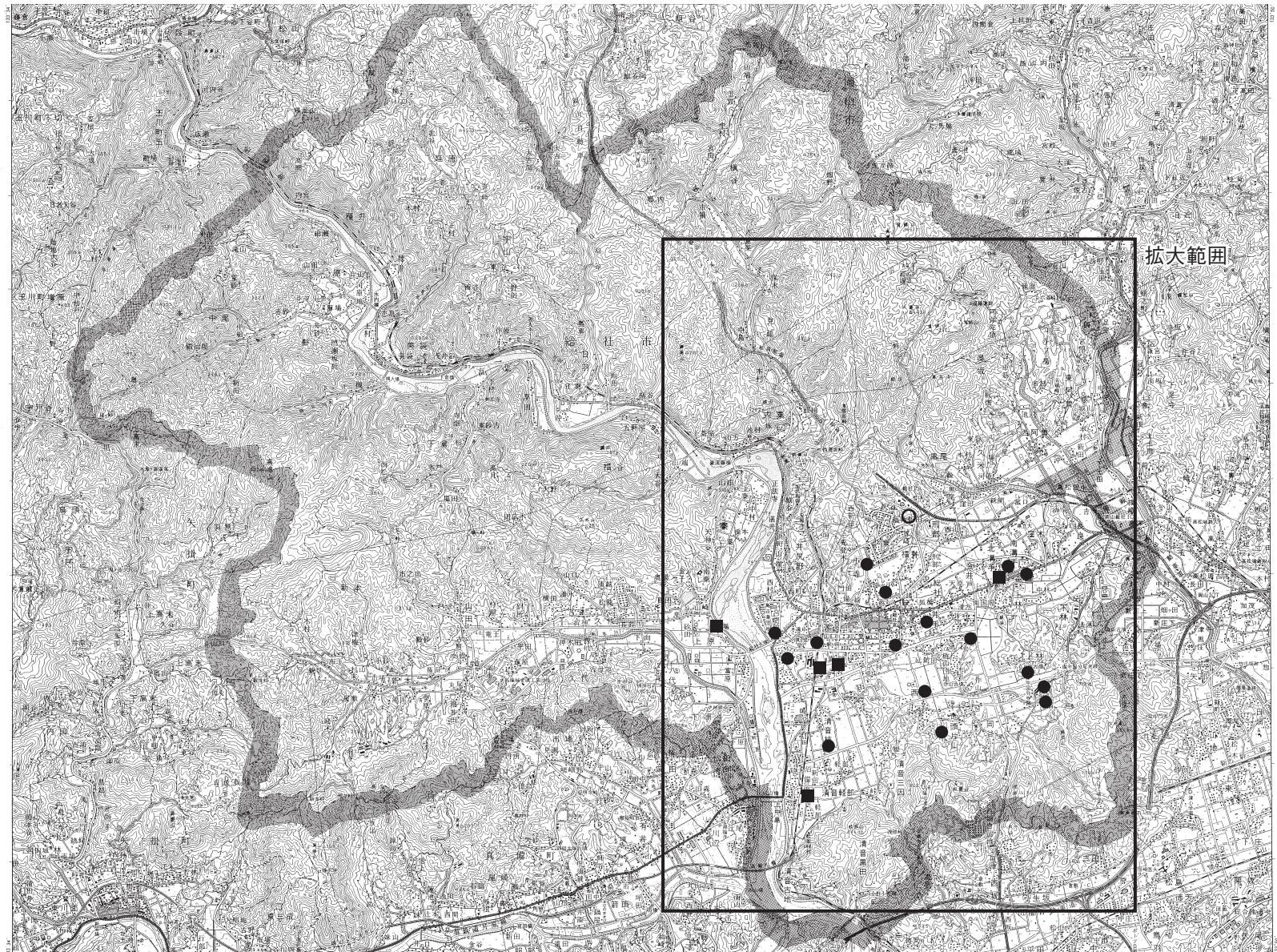
〔埋蔵文化財の調査〕

平成20年度に実施した発掘調査は6件（第1表）で、調査面積は約6,600m²、調査経費は約28,053千円である。調査件数のうち4件が公共事業関連で、残る2件が民間事業である。また、6件のうち3件が前年度からの継続事業である。

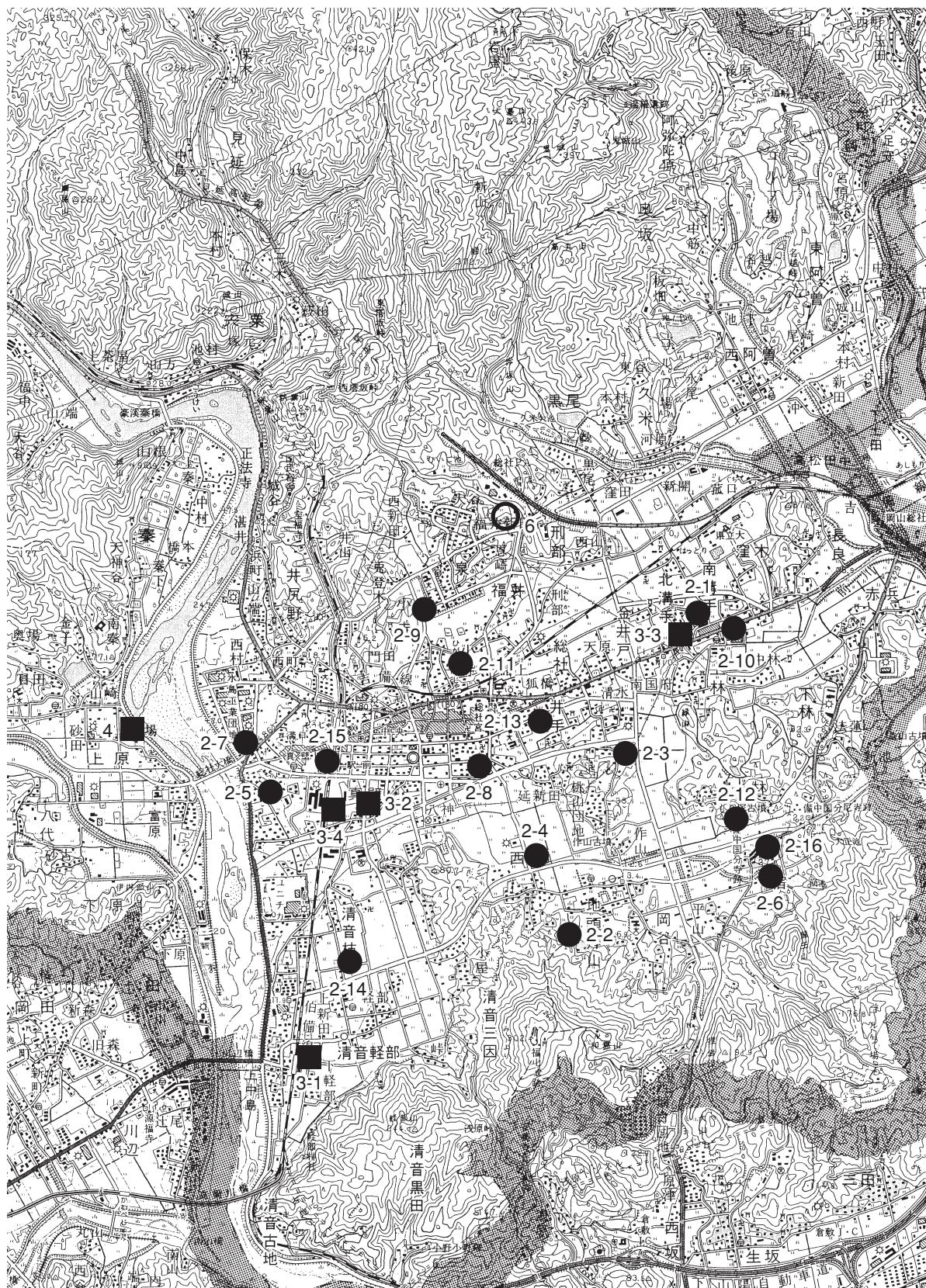
この発掘調査件数からみると、公共事業が主体となり、景気回復の兆しもまだ緩やかな傾向に留まっており、しかも民間開発である流通センター造成後の建築事業が先送り状態となっていることからみても、設備投資にみられる景気の上昇判断がいまだ本格的に始まったという状況にないものといえる。

第1表 発掘調査一覧

番号	遺跡名	所在地	調査契機	調査期間	担当者
1	御所遺跡	金井戸	公・河川改修	5月10日～7月31日	武田
2	上原遺跡	上原	民・携帯電話鉄塔	3月2日～3月19日	松尾
3	長良小田中遺跡	長良	民・流通センター造成	6月9日～1月23日	前角
4	下軽部遺跡	清音軽部1390-4ほか	公・道路整備	4月1日～6月7日	前角
5	上三本松遺跡	真壁773-1	公・幼稚園園舎建設	6月18日～7月14日	高橋
6	三輪遺跡群	三輪	公・土地区画整理	4月9日～11月6日	高橋



第1図 立会・確認調査位置図1 (S=1/110,000)



● 立会・試掘・確認調査

■ 発掘調査

○ 付載

※数字は目次と対応する

第2図 立会・確認調査位置図2（拡大図）（S=1/60,000）

同様に、埋蔵文化財発掘の届出・通知は47件（表2）である。公共が9件で、残りが民間開発であるものの、38件のうちの65%にあたる25件が個人住宅に関わるもので、残る13件が、共同住宅3、店舗5、通信設備2、工場・診療所・その他各1となっており、例年とあまり大差ないものと思われる。

第2表 平成20年度埋蔵文化財発掘の届出・通知（史跡現状変更含む、網掛け枠は報告）

番号	提出日	遺跡名	主要用途	地番	対応	調査日	状況	担当者
1	4/7	真壁遺跡	集合住宅	中央6-7-113	慎重	—	—	—
2	4/9	屋毛手遺跡	店舗	三輪717	慎重	—	—	—
3	4/18	大文字遺跡	道路拡幅	南溝手292-2	立会	4/9~16	栢寺の区画溝検出。瓦廃棄土坑に白鳳期の瓦が多量出土。	松尾
4	4/14	上三本松遺跡	園舎	真壁773-1	発掘		幼稚園舎増築	高橋
5	4/14	窪木宮後遺跡	道路拡幅	窪木1033-1ほか	立会	5/21	遺構・遺物なし。掘削浅い	平井
6	4/22	御所遺跡	河川改修	金井戸296-1	発掘			武田
7	4/30	地頭古墳群	土砂採取	地頭片山413	確認	6/16	遺構なし	平井
8	4/30	真壁遺跡	個人住宅	中央5-12-101	慎重	—	—	—
9	5/26	真壁遺跡	個人住宅	真壁字出之向128-2	慎重	—	—	—
10	6/11	岡久・殿堂遺跡	個人住宅	駅前一丁目字段堂	慎重	—	—	—
11	6/13	牛神遺跡	店舗	三須1827-2ほか	立会	6/16	古墳時代以降の遺構面確認	松尾
12	6/11	岡久・殿堂遺跡	個人住宅	駅前一丁目字段堂	慎重	—	—	—
13	6/11	岡久・殿堂遺跡	個人住宅	駅前一丁目字段堂61-19	慎重	—	—	—
14	7/2	宮後遺跡	個人住宅	小寺字菰田25-18	慎重	—	—	—
15	7/4	鷹尾手遺跡	個人住宅	真壁632-4	慎重	—	—	—
16	7/9	真壁遺跡	共同住宅	中央4-24-106	確認	9/2	弥生後期の遺構・遺物と中世の遺構確認	武田 松尾
17	7/9	散布地	道路拡幅	宿1013-3ほか	確認	7/1	中世の遺構・遺物検出。埋積谷確認	武田 松尾
18	7/11	真壁遺跡	共同住宅	中央5-10-104	慎重	—	—	—
19	7/25	窪木宮後遺跡	店舗	窪木507-1	慎重	—	—	—
20	8/8	岡久殿堂遺跡	個人住宅	駅前一丁目字岡久252-34	慎重	—	—	—
21	8/28	延東遺跡	個人住宅	井手字西延498-6ほか	立会	×	工事延期か？	—
22	9/30	早溝遺跡	集合住宅	総社三丁目字十王堂東972-1	慎重	—	—	—
23	9/30	鷹尾手遺跡	個人住宅	三輪字上川田1025-2ほか	慎重	—	—	—
24	9/26	岡久殿堂遺跡	個人住宅	駅前一丁目字岡久252-37	慎重	—	—	—
25	9/11	松井古墳群	電柱移設	上林字松井1281-3	立会	9/30	遺構・遺物なし	平井
26	9/3	西三軒屋遺跡	個人住宅	三輪字西三軒屋735ほか	立会	10/4	掘削浅く、遺構面に影響なし	平井
27	10/16	大文字遺跡	個人住宅	南溝手字上サギセ436-12	慎重	—	—	—
28	10/10	下林古墳群	道路拡幅	下林922-2ほか	慎重	—	—	—
29	10/17	下林遺跡	道路拡幅	下林44-1ほか	試掘			武田
30	11/26	大文字遺跡	工場建設	窪木900-1	立会	11/25 2/21	低位部 遺構遺物なし	平井 高橋
31	11/13	散布地	個人住宅	上林字棚田1120-3ほか	慎重	—	—	—
32	11/11	大文字遺跡	個人住宅	南溝手字上サギセ436-1	立会	次年	—	—
33	12/24	明神遺跡	個人住宅	福井字阿部前564	立会	次年	—	—
34	12/24	井手村後遺跡	店舗	井手字二反地1039-1	立会	×	工事延期	—
35	12/25	鷹尾手遺跡	店舗	真壁字御野代606-4	慎重	—	—	—
36	1/5	広峰遺跡	個人住宅	福井2109ほか	確認	1/6	中世遺構面確認	松尾
37		備中国分寺跡	道路改修	上林	立会	1/10~25		武田
38	1/30	水内金屋遺跡	個人住宅	原字西ノ田2123-1	立会	次年	—	—
39	2/4	散布地	通信設備	清音柿木字宇津輪198	確認	2/9	弥生後期・古墳前期・古代の 遺構・遺物確認	松尾
40	2/12	宿寺山古墳	雍壁工事	宿609-1ほか	立会			武田
41	2/24	上原遺跡	農道拡幅	上原字四ツクロ312-6ほか	慎重	—	—	松尾
42	2/17	上原散布地	携帯基地局	上原字稻田217	発掘	2/10 3/2~19	弥生時代・古墳時代前期の遺 構・遺物出土	松尾
43	3/11	散布地	個人住宅	久代字折上ウネ4012-1	立会	×	工事延期か？	松尾
44	3/18	真壁遺跡	宅地造成	中央6-2-112	慎重	—	—	—
45	3/25	深町遺跡	宅地造成	北溝手字深町360-3	立会	次年	—	—
46	3/3	中通遺跡	診療所増築	三輪字惣善寺1121-1ほか	慎重	—	—	—
47	3/6	上原遺跡	個人住宅	秦字宮林141-1	立会	次年	—	—

試掘確認調査票の提出は、個人住宅が主であることから、慎重工事の対応が多くなっており、わずかに9件（表3）の提出にとどまっている。

第3表 平成20年度埋蔵文化財試掘・確認調査票

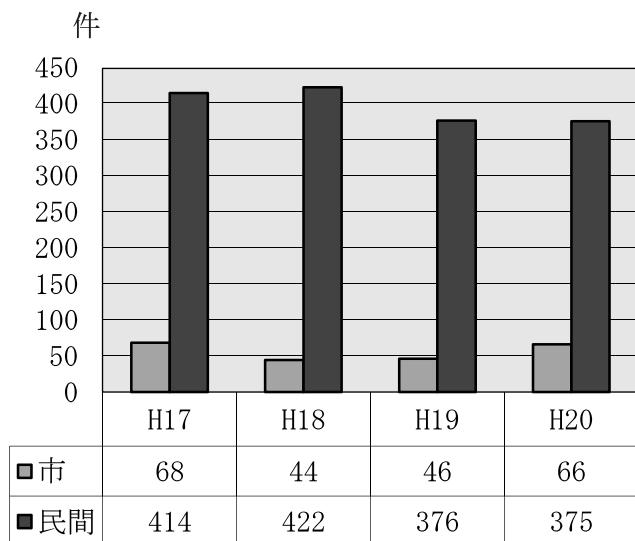
番号	提出日	遺跡名	種別	地番	事業名	調査日	担当者
1	4月22日	大文字遺跡	確認	南溝手292-2	道路拡幅	4月9～16日	松尾
2	6月20日	なし	試掘	西郡字樋ノ尻449-1ほか	ガソリンスタンド建設	6月18日	松尾
3	8月1日	散布地	確認	宿1013-3ほか	道路改良	7月1日	松尾
4	8月22日	なし	試掘	中原857-1ほか	集合住宅	6月23日	平井
5	8月25日	牛神遺跡	確認	三須字茶柄杓1078-1	店舗	6月16日	松尾
6	9月5日	真壁遺跡	確認	中央4-24-106	集合住宅	9月2日	松尾
7	1月14日	広峰遺跡	確認	福井2109ほか	分譲住宅	1月6日	松尾
8	2月17日	散布地	確認	清音楠木198	携帯電話基地局	2月9日	松尾
9	3月30日	宿寺山古墳	確認	宿609	個人住宅	3月2日～16日	武田

また、開発等にともなう事前審査は153件（表5）である。事前審査は、建築確認申請等の回覧によるもののほか、事業者による埋蔵文化財の所在確認時において実施されたものであるが、この建築確認申請は総社市への申請数であり、『総社市埋蔵文化財調査年14』でも指摘したように、民間検査機関への申請は除外されている。平成17年からの建築基準法施工関係統計調査票による統計を第4表に示す。

ちなみに平成20年度では、総社市への申請数は66件、指定確認検査機関への申請数は375件である。第4表の平成17年度以降も同様な推移である。しかし、平成14年度においては市259件・民間114件であるので、平成15・16年の段階で官民の比率が逆転し、民間検査機関への申請が主流となったことを示している。このことは市への申請のみの事前審査は偏りが生じると危惧された。

このような状況にあることから、平成20年度には、指定確認検査機関あてに、周知遺跡内における建築確認に関し、文化財保護法第93条による申請が必要である旨を申請業者に周知していただくよう文書で依頼をしたところである。しかし、その効果については検証できていない。

第4表 建築確認申請の推移



第5表 事前審査一覧（網掛け枠は報告）

番号	受付日	主要用途	地番	事業者	対応	調査日	状況	調査者	93条の対応
1	4/3	個人住宅	駅前一丁目	積和建設	93条提出要請、遺構がなくなりかける境付近				
2	4/9	個人住宅	秦3474-7	都市開発測量設計	散布地。93条提出要請、集落排水・地盤改良 未定				
3	4/15	工場	中原字翼原88-8	大阪富士工業	遺跡外。工事は進めて可（前角）	—	試掘調査済。今回の計画範囲に遺跡ないが緑地とした部分には遺跡と認定しており、注意喚起	—	—
4	4/22	共同住宅	真壁字宮ノ東 902-5	大東建託	包蔵地外なので立会要請。遺構検出されれば発掘	—	建築計画頓挫	—	
5	4/23	個人住宅	清音	B E S S 岡山	地盤改良径60cmを30~35本、試掘を依頼（平井）	×	調査できる状況になかった	—	
6	4/28	集合住宅	真壁5-12-	大東建託	真壁遺跡。布基礎GL-80cmと遺構面に達する可能性あり、浅くする可能性もあり地盤改良未定、計画決定し次第93条提出				
7	5/	共同住宅	中原字上道外 857-1,859-1	松本事務所	開発許可申請、基礎内容は大東建託より連絡が入る予定（平井）	6/23	遺構・遺物なし	平井 高橋	
8	5/1	アパート	中央18-101,102	城西設計	古墳遺跡。計画きまり次第協議と93条提出要請（松尾）	—	既存の調査地（年報1），対応なし	—	
9	5/12	携帯基地局	新本	N E C ネッツエスアイ	建設予定地3箇所。包蔵地外は事前協議、包蔵地は93条提出要請（松尾）	—	対応なし。土取場の跡地利用	—	
10	5/13	共同住宅	駅前一丁目字岡久 263	和建設	調査済	—		—	—
11	5/14	個人住宅	地頭片山22-2・5	トラバース	包蔵地外。工事時に立会要請（松尾）	×	対応なし	—	
12	5/16	個人住宅	真壁字出之向 128-2	トラバース	周知遺跡内。93条の届出要	—		—	5/26 慎重
13	5/19		上原546-2	高見	包蔵地外				
14	5/27	個人住宅	清音上中島	トラバース	包蔵地外。現況水田、工事時に立会要請（松尾）	×	対応なし	—	
15	5/26	コンビニ	三須1827-2	ローソン	周知遺跡内。93条の届出要	6/16	古墳時代以降の遺構面確認	松尾	6/13 立会
16	5/28	個人住宅	上林1286	トラバース	現況宅地、包蔵地外のため事前協議、立会要請（松尾）	×	対応なし	—	
17	5/30	ガソリン スタンド	西郡字樋ノ尻449-1	下山事務所	開発許可申請書。包蔵地外だが、試掘調査必要	6/18	湿地につき遺跡なし	松尾	
18	6/4	個人住宅	総社字金井戸1646-2	都市開発測量設計	93条提出要（谷山）			—	
19	6/5	コンビニ	三須1827-2	中本屋工務店	93条提出要請、擁壁工事立会予定（松尾）	6/16	古墳時代以降の遺構面確認	松尾	6/13 立会
20	6/9	不動産鑑定	総社1-8-25付近	不動産鑑定士	包蔵地。今回は調査不要、将来個人住宅の建設予定	—	不動産鑑定	—	
21	6/9	個人住宅	北溝手字仲田 481-2	積和建設	包蔵地外。浄化槽掘削時に立会予定（松尾）	×	対応なし	—	
22	6/10	個人住宅	美袋字花屋1811	トラバース	包蔵地外。浄化槽掘削時に立会予定				
23	6/12	個人住宅	小寺	積和建設	宮後遺跡。93条提出要請、工事未定				
24	6/17	工場	東阿曾字郷ノ下 1724-2	コアテック	試掘調査済、遺跡なし				
25	6/18	個人住宅	小寺字菰田25-18	積和建設	宮後遺跡。93条提出要請（松尾）	×	対応なし	—	7/2 慎重

26	6/18	個人住宅	上林649	都市開発測量設計	包蔵地外。建替、基礎工法によって立会。影響なければ不要（松尾）	×	対応なし	—	—
27	6/19	個人住宅	清音上1807-1	積和建設	包蔵地外。下水道敷設済み、地盤改良をしても鋼管杭が少量、調査不要（平井）	—	—	—	—
28	6/19	共同住宅	中央	大東建託	真壁遺跡。93条提出要請。試掘調査の結果協議（谷山・平井）				
29	6/20	個人住宅	総社一丁目300-1	積和建設	包蔵地外。地盤改良をするようなら連絡を要請（平井）	×		—	—
30	6/23	個人住宅	総社市真壁606-4	トラバース	真壁遺跡、93条提出要請。	×	照会のみ	—	12/25
31	6/24	個人住宅	真壁雇用促進住宅	ビオス設計	93条提出要請（谷山・平井）	×		—	ある
32	6/25	事前協議	奥坂						
33	6/26	個人住宅	小寺字菰田25-18	積水ハウス	93条提出、表層改良がかつての造成層に収まるため、慎重工事対応（松尾）	なし	慎重工事対応	—	
34	6/26	集合住宅	井尻野866-22,880-1	サポートスタッフ時栄	包蔵地外。表層改良をするようなら立会要請	×		—	
35	6/26	共同住宅	西郡	大東建託	包蔵地外。基礎掘削時立会要請（平井）	×		—	
36	7/1	市道拡幅	宿1013-3	土木課	確認調査（松尾）	7/1	中世の遺構・遺物確認。埋積谷確認。	武田 松尾	
37	7/2	個人住宅	三輪字上川田1025-2	積和建設	鷹尾手遺跡。93条提出要請。工法未定（松尾）	×	対応なし	—	9/30 慎重
38	7/2	個人住宅	駅前1丁目2-117	積和建設	遺跡地外。4階建住宅のため計画段階で協議、工事立会対応希望				
39	7/2	墓地造成	日羽1382-1		日羽東塚付近、現地を視察予定	7/4	日羽東塚より距離あり、掘削もないため問題なし	—	—
40	7/3	不動産鑑定	真壁	エステートイノウエ	不動産調査	×		—	—
41	7/3	携帯基地局	新本5040-1	千田組	建設位置、すでに土取で旧状損壊、対応なし（松尾）	×		—	—
42	7/3	不動産鑑定	上原70	名渕総合鑑定所	鷹尾手遺跡。掘削する場合93条が必要（平井）	×	不動産鑑定	—	—
43	7/3	不動産鑑定	真壁617-3	名渕総合鑑定所	上原散布地。掘削する場合93条が必要（平井）	×	不動産鑑定	—	—
44	7/3	不動産鑑定	井尻野1566	名渕総合鑑定所	包蔵地外。井尻野古墳群の麓（平井）	×	不動産鑑定	—	—
45	7/4	共同住宅	中原	大東建託	包蔵地外。表層改良をするなら立会				
46	7/4	個人住宅	清音	都市開発測量設計	包蔵地外。表層改良をするなら立会				
47	7/8	共同住宅	中央5-10-104	大東建託	真壁遺跡。造成厚1mの宅地で、基礎がすべて盛土内におさまるため、調査なし（松尾）	×		—	7/11 慎重
48	7/8	個人住宅	駅前1丁目字岡久252-34	トラバース	岡久・殿堂遺跡。93条提出要請、この場所は遺構にあたる可能性大				8/8
49	7/11	個人住宅	井手字西延498-6・7	積和建設	延東遺跡。浄化槽の立会（松尾）	×	対応なし、工事延期か？	—	8/28 立会
50	7/22	個人住宅	井手字庄義1144-1	積和建設	包蔵地外。金井戸新田遺跡の西で下水道完備、深い掘削や表層改良があるなら連絡あり（平井）	×	対応なし	—	—
51	8/5	個人住宅	西阿曾1257-7	ヴァリエ	包蔵外、浄化槽掘削時に立会要請（松尾）	×	対応なし	—	—
52	8/6	個人住宅	駅前1丁目岡久252-34	トラバース	岡久殿堂遺跡内、93条提出、造成地で、ベタ基礎杭うちのため、慎重工事（松尾）	×		—	—
53	8/7	個人住宅	総社字畠間1285-2、樋尻1288-8・9	東亜測量設計コンサルタント	包蔵外。近くに散布地があるため、工事着工前に連絡要請（松尾）	×	対応なし	—	—
54	8/8	個人住宅	日羽1200	共同測量	平岩古墳群の麓。住宅建替え、浄化槽掘削時立会				

番号	受付日	主要用途	地番	事業者	対応	調査日	状況	調査者	93条の対応
55	8/20	個人住宅	三輪610-7	サポートスタッフ時栄	包蔵地外。浄化槽を掘削するなら立会要請、浄化槽掘削あり、立会（平井）	×	工事延期か 対応なし	—	—
56	8/22	個人住宅	久代字浦越池東 5768-1, 5768-2	積和建設	包蔵地外。浄化槽掘削時に立会、工事着工は9月中旬以降（平井）				
57	8/25	個人住宅	井手字西延498-6,7	積和建設	延東遺跡。93条提出、浄化槽掘削時に立会予定。	9/20		高橋	
58	8/26	個人住宅	小寺字沼出523-1	積和建設	包蔵地外。浄化槽掘削時に立会（平井）	11/13	住居址あり	高橋	—
59	8/26	共同住宅	三輪字古川一880-1	土井建設	遺跡外。立会予定				
60	8/27	携帯基地局	黒尾	エプロ	遺跡外。立会予定				
61	8/28	個人住宅	秦1055	トラバース	包蔵地外。浄化槽掘削時に立会要請（松尾）	×	対応なし	—	—
62	9/1	個人住宅	溝口1231-2	ヴァリエ	ベタ基礎で設計の詳細がわかれれば連絡あり	9/17	ベタ基礎GL-30cmのため、立会不要	—	—
63	9/2	集合住宅	中央4-24-106	大東建託	確認調査（松尾）	9/2	弥生後期・中世の遺構確認	松尾	
64	9/2	共同住宅	三輪字古川880-1	平田事務所	氾濫原と考えられるが、集水枠など水田面より40～60cm下げる地点は念のため立会（平井）	×	対応なし	—	—
65	9/8	個人住宅	中央2-3-18	サポートスタッフ時栄	包蔵地外。遺跡の照会のみ（谷山）	×	遺跡の照会	—	—
66	9/8	寮	清音上中島1813-3	城西設計	包蔵地外。遺跡の照会のみ（松尾）	×	遺跡の照会	—	—
67	9/10	個人住宅	西阿曾1237-1	サポートスタッフ時栄	包蔵地外。遺跡の照会のみ、開発進展により立会要請（松尾）	×	遺跡の照会	—	—
68	9/10	個人住宅	小寺198-7, 1282-3	トラバース	包蔵地外。遺跡の照会のみ（松尾）	×	遺跡の照会	—	—
69	9/11	個人住宅	泉1-88	トラバース	包蔵地外。既存開発地のため対応なし（松尾）	×		—	—
70	9/12	個人住宅	真壁1342-19	トラバース	包蔵地外。遺跡の照会のみ（松尾）	×	遺跡の照会	—	—
71	9/19	ゴルフ場	ふれあい広場の近く	丸川設計	包蔵地。すでに土取り、一部に山の斜面残る。古墳か？（松尾）	×	計画延期か？	—	—
72	9/22	個人住宅	上原	サポートスタッフ時栄	散布地。93条提出要請、浄化槽あり、掘削時要立会（平井）	×	対応なし	—	—
73	9/24	事務所	地頭片山	グランツ設計	包蔵地外。既に造成（1m）、ベタ基礎GL-50cm掘削するが、地下に影響なし	×	対応なし	—	—
74	9/29	個人住宅	真壁字下村1342-30	大倉	造成土内工事のため対応なし	—	—	—	—
75	10/2	個人住宅	秦	サポートスタッフ時栄	散布地。93条提出要請、それにより対応を決定				
76	10/6	個人住宅	柿木369-1	都市開発測量設計	工事立会希望（松尾）	×	対応なし	—	—
77	10/6	個人住宅	真壁字下村1342	トラバース	包蔵地外。建築計画の進展により立会希望（松尾）	×	対応なし	—	—
78	10/6	個人住宅	中央2-4-31	トラバース	包蔵地外。隣接地の調査状況が旧河道、砂層のため対応なし（松尾）	×		—	—
79	10/6	不動産鑑定	三輪字鷹尾手1045-1	岡山県管財課	包蔵地内。開発に伴い93条必要	×	不動産鑑定	—	—
80	10/8	個人住宅	金井戸	サポートスタッフ時栄	93条の提出要請、工法は未定				
81	10/8	個人住宅	清音上中島	宮建築設計	包蔵地外。工事立会希望（松尾）	×	対応なし	—	—
82	10/14	個人住宅	上林字棚田1120-3	住元建築研究所	包蔵地内。93条提出要請、建物基礎はGL-40cm下げのため工事立会（松尾）	×	対応なし	—	11/13 慎重
83	10/14	個人住宅	南溝手字上セザキ 436-12	東亜測量設計 コンサルタント	大文字遺跡。93条提出、浄化槽のみ立会予定（松尾）				10/10 慎重
84	10/14	不動産鑑定	総社3-1-10	すみしん不動産	遺跡地外。湿地のため対応なし	—	—	—	—

85	10/17	住宅団地	地頭片山	ユープランニング オフィス	包藏地外。試掘予定				—
86	10/22	携帯基地局	福井字堤之内1437-1	エプロ	包藏地外、鉄塔の建設。工事立会（松尾）			武田	—
87	10/24	個人住宅	上林1078-1	行政書士 近藤事務所	包藏地外。国分寺に近いため、建築確認申請前に事前相談を依頼（松尾）	×	対応なし	—	—
88	10/27	個人住宅	久代96-2	サポートスタッフ時栄	包藏地外。既存建物解体し、新築予定。建築計画が決定時に連絡をもらう（松尾）	×	対応なし	—	—
89	10/31	個人住宅	福井56-4	積和建設岡山	93条提出要請（松尾）				
90	11/5	個人住宅	南溝手字上サギセ 436-1	東亜測量設計 コンサルタント	大文字遺跡。ベタ基礎、MS地盤改良、柱状改良も検討しているが、遺跡に影響なし、慎重工事（松尾）	×	次年度	—	11/5 立会
91	11/7	携帯基地	上原と清音柿木	FAN	200m ² で深さ3m、93条提出要請、基礎が深いので発掘予定（松尾）				2/4・17 発掘・確認
92	11/10	個人住宅	上林字棚田1120-3	住元建築研究所	93条、工事立会予定				
93	11/11	個人住宅	井手字圧義1144-16	トラバース	遺跡地外。周辺の状況から遺跡なし（松尾）	—	—	—	—
94	11/13	個人住宅	清音上中島字東川原 156-3	トラバース	遺跡地外、計画の進展により連絡もらう。下水道設置区域（松尾）	×	対応なし	—	—
95	11/14	墓地造成	刑部219	本行事務所		×	対応なし	—	—
96	11/17	集合住宅	中央四丁目27	レオパレス21	計画は未定、確定になったら93条提出要請				
97	11/18	携帯基地局	久米	エプロ	包藏地外。面積200m ² で、深さ3m、鉄塔高20mのため、調査必要（松尾）			—	—
98	11/18	通信鉄塔	久米	エプロ	面積400m ² 、鉄塔40m、基礎不明のため事前協議（松尾）	×	延期	—	—
99	11/18	工場	窪木900-1	日新工営	93条持参、ボーリング調査の結果1.5m造成土この中で基礎を收めたいらしいが実際の造成土の厚さと遺構の状況を知るため確認調査（平井）	11/9 2/21	低位部	平井	11/26 立会
100	11/21	集合住宅	清音上中島213-1	レオパレス21			計画段階？		
101	11/21	個人住宅	岡谷343-1	大地測量	包藏地外	—	—	—	—
102	11/21		福井字神明244	東急リバブル	包藏地				
103	11/26	未定	福井	廣畠不動産 鑑定事務所	明神遺跡。93条提出要請、浄化槽を掘削するようなら立会が必要	×	対応なし	—	—
104	11/26	未定	中原	廣畠不動産 鑑定事務所	包藏地外。北側で低位部を確認しており、調査不要	—	—	—	—
105	12/2	個人住宅	黒尾70	サポートスタッフ時栄	包藏地外。浄化槽掘削時立会要請			—	—
106	12/10	個人住宅	久代字折上ウネ 4012-1	積和建設	包藏地。93条提出要請、浄化槽掘削時立会予定（松尾）	×	対応なし	—	3/11 立会
107	12/10	店舗建築	井手字早溝596-1	三谷裕建築設計室	広告塔設置時に立会（松尾）	2/5	低湿地につき遺跡なし	松尾	—
108	12/10	携帯基地局	福井		93条提出要請。深さ3m掘削、発掘対応（松尾）	2/17	遺構・遺物なし	武田	
109	12/12	携帯基地局	清音柿木字宇津輪 198	F A N	93条提出要請、7×7m深さ3m掘削のため、発掘対応（松尾）	2/9	弥生後期と古墳前期・古代の遺構・遺物確認	武田	2/4 確認
110	12/12	集合住宅	総社3丁目2-24	大東建託	計画未定、深い掘削なら再度相談に来るとのこと	×	慎重工事	—	
111	12/15	個人住宅	福井字阿部前56-4	積和建設	明神遺跡。浄化槽の立会調査	次年度		—	12/14 立会
112	12/17	店舗建築	井手	東亜測量設計 コンサルタント	現況駐車場造成地、深さ約1m掘削（松尾）	×	対応なし	—	

番号	受付日	主要用途	地番	事業者	対応	調査日	状況	調査者	93条の対応
113	12/22	個人住宅	真壁字御野代606-4	ヴァリエ	93条提出、ベタ基礎のクイ打ちのため、慎重工事対応	×		—	12/25 慎重
114	12/22	店舗	井手字二反1039-11	東亜測量設計 コンサルタント	93条提出、掘削は既存造成土中で収まる見込み。慎重工事（松尾）	×	計画延期	—	12/24 立会
115	12/22	共同住宅	清音上中島1807-2	レオパレス21	遺跡地外。区画整理地内、造成すみで更地。GL-29cm下げの布基礎、杭打ちは地盤調査の後	×	対応なし	—	—
116	12/26	住宅地造成	福井2109ほか	倉敷建設	広峰遺跡。確認調査	1/6	中世遺構確認。開発道路掘削時に遺構に抵触しないように指示。	松尾	1/5 確認
117	1/9	福祉施設	清音柿木882-1-4	中桐建築設計 事務所	現在営業中止となったスーパーの建物撤去時に試掘調査予定、4月以降（平井）	次年度		—	—
118	1/15	携帯基地局	久代字古母池756	ソルコム	ドリル・基礎掘削時に立会要請（高橋）			—	—
119	1/16	携帯基地局	上原字稻田217	F a n	散布地。確認調査	2/10 3/2 ～19	弥生時代・古墳時代の遺構・遺物確認	松尾	2/17 発掘
120	1/16	携帯基地局	下原字伊予部山694-2	ウェルエンジニアリング	面積100m ² でアンテナ、周辺機器設置、93条提出要請（松尾）	×	計画頓挫	—	—
121	1/22	宅地立て替え	窪木737-7	ミサワホーム	93条提出要請、浄化槽掘削時立会（松尾）	×	対応なし	—	—
122	1/23	個人住宅	福井字中畑107-5	積和建設	包蔵地外。浄化槽掘削時立会（松尾）	×	対応なし	—	—
123	1/28	個人住宅	原字西ノ田2123-1	積和建設	水内金屋遺跡。浄化槽の立会調査予定	次年度		—	1/30 立会
124	1/28	個人住宅	総社字セウキ1384-7	積和建設	遺跡地外。下水道区域のため調査なし（松尾）	×		—	—
125	1/28	携帯基地局	下原694-2	ナチュナル コンサルタント	93条提出、確認の後、発掘か慎重工事（松尾）	×	計画頓挫	—	—
126	2/5	広告塔設置	井手字早溝596-1	三谷豊建築設計室	遺跡地外。掘削時立会	2/5	グライ化粘土1m以上の堆積。近辺に旧河道あり。調査地は低湿地	—	—
127	2/6	個人住宅	北溝手466-1付近	×	不時の調査	2/6	用地西側は道路を挟んで約1mの段差で、用地西半分は砂質土、東半分はシルト。遺跡は東半分に所在し、西半分は斜面地となるか？	前角	—
128	2/6	擁壁改修	宿609-1ほか	風早	宿寺山古墳。石垣を解体し、L型擁壁を設置	3/10 ～15		武田	2/12 立会
129	2/9	雍壁工事	真壁902-1付近	×	不時の調査	2/9	岡ノ木遺跡。掘削は床土の下わずかで、問題なし	前角	—
130	2/9	マンション 建設	総社真壁2丁目	土井建設	工事立会時に試掘協力してもらい、遺構検出あり。発見届提出してもらう（松尾）	2/16	微高地は北西に本体。調査地は縁辺部で斜面堆積あり。中世の柱穴検出	—	—
131	2/9	住宅造成	福井字阿部前45-1	都市開発測量設計	93条提出要請、擁壁掘削時工事立会（田より-40から50cm下げ）（松尾）			—	—
132	2/9	携帯基地局	久代字古母池756		基礎2.5m四方、50cm掘削予定、工事立会（松尾）			高橋	—
133	2/12	個人住宅	岡谷1588	トラバース	93条提出要請（松尾）	×	対応なし	—	—
134	2/13	歯科医院	三輪字惣善寺1121-1	積和建設	中通遺跡。造成土内に収まる掘削	×		—	3/3 慎重

135	2/13	個人住宅	三輪140-3	積和建設	遺跡地外、旧家解体し、新築	×	対応なし	—	—
136	2/19	個人住宅	三須241	畠設計	浄化槽掘削時立会（谷山）	3/13	遺構・遺物なし	高橋	—
137	2/20	個人住宅	宿1708	畠設計	包蔵地外。造成すみ、下水道配管のため、慎重工事	×		—	—
138	2/20	個人住宅	中央1-16-25	穴吹不動産センター	杭田建設建物構築、93条提出要請、地盤改良をするなら連絡要請、確認調査（平井）	×	連絡なし	—	—
139	2/24	個人住宅	清音柿ノ木613-1	バス瀬戸内	包蔵地外。地盤改良するなら連絡あり（平井）	×	連絡なし	—	—
140	2/25	携帯基地局	久米字溝向788	中電技術 コンサルタント	遺跡地外。40mの鉄塔、面積200m ² で深さ2m掘削、事前協議と試掘予定、雑種地。	次年度		—	—
141	3/2	個人住宅	岡谷1588	サポートスタッフ時栄	赤坂古墳群に近接するも、すでに地形が大きく改変されており、消滅している（前角）	なし	工事中に土器等が出土したら連絡	—	—
142	3/2	電波塔	下原、伊予部山山頂	西日本放送	既存施設の建替。S.60年の調査範囲は内枠のみ（前角）	なし	内枠内なら問題なし	—	—
143	3/3	個人住宅	秦字宮林141-1	サポートスタッフ時栄	上原遺跡。浄化槽の立会予定	次年度		—	3/6 立会
144	3/6	個人住宅	久代字折上ウ4012-1	積和建設	散布地。浄化槽の立会予定	次年度		—	3/11 立会
145	3/6	個人住宅	北溝手字深町360-3	トラバース	深町遺跡。浄化槽の立会予定	次年度		—	3/25 立会
146	3/9	個人住宅	中央1-14-105	積和建設	遺跡外（前角）	なし	南東に308が近いので工事中に土器等が出土したら連絡	—	—
147	3/9	宅地造成	真壁	田平宅研事務所	93条提出要請 造成のみで、慎重工事（松尾）	×	×	—	—
148	3/11	個人住宅	清音柿木863-4	トラバース	包蔵地外、工事立会（松尾）	×	対応なし	—	—
149	3/13	個人住宅	真壁字荒神ヶ市665-2	積和建設	93条提出、造成内工事（松尾）	なし	慎重工事	—	—
150	3/23	個人住宅	真壁字荒神ヶ市643-1	積和建設	93条提出（松尾）	次年度		—	—
151	3/24	個人住宅	北溝手字深町360-3	エスパイエル カバヤ	93条提出、浄化槽工事立会（松尾）	次年度		—	3/24 立会
152	3/26	墓地造成	日羽125付近	大月亮	遺跡外。現地確認し、存在しそうなら試掘（前角）	×	協議なし	—	—
153	3/26	墓地造成	影1040付近	大月亮	遺跡外。現地確認し、存在しそうなら試掘（前角）	×	協議なし	—	—

[埋蔵文化財の保護・普及]

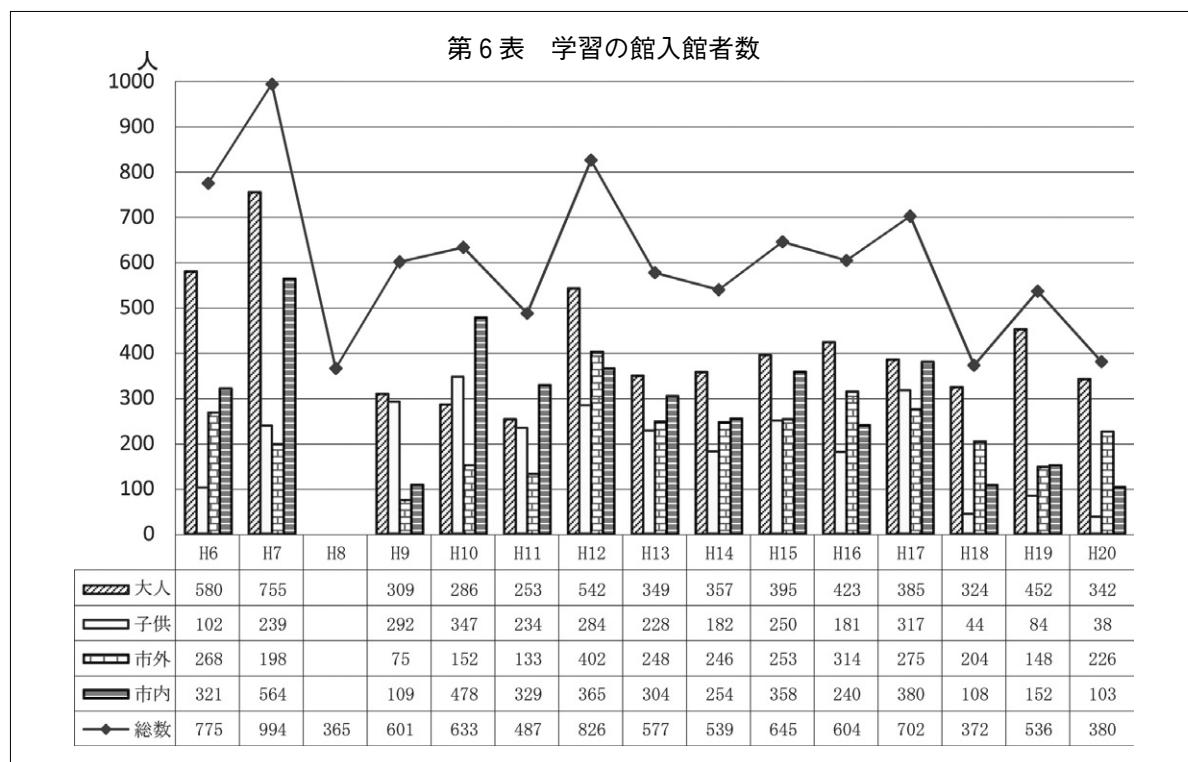
報告書の刊行は、『大文字遺跡（栢寺廃寺）』総社市埋蔵文化財発掘調査報告書20として、市道拡幅工事に伴う確認調査の結果を報告している。調査では、栢寺廃寺の寺域を区画すると考えられる溝を検出し、瓦廃棄土坑から白鳳期の古代瓦が多量に出土したほか、文字瓦が2点出土した。平成20年6月20日に記者発表を行い、同日から7月1日まで、総社市総合文化センターにてミニ展示を行った。

史跡整備を進めている鬼城山では、平成20年5月20日に第30回鬼城山整備委員会を開催し、敷石・園路、説明板、板塀などの整備事業を行った。

指定史跡の下刈り清掃は、例年どおり実施したほか、県指定史跡・江崎古墳の石室内石材崩落に伴った、石室経年変化観測業務を今年度も実施し、1年間の経過を観測した。その結果、石室内の変動はないものの、土砂の流出がわずかながら認められており、漏水とあわせて長期的な観測を今後とも行う必要性が確認できた。当面、石材の崩落する危険性が少ないとから、今後は、右側壁に接近できないような安全策をとりつつ、石室内の公開を検討していきたい。

また、総社市指定文化財・天然記念物として、美袋八幡神社のラカンマキを平成20年6月23日に指定したほか、平成21年1月18日に、宝福寺の建造物群として6件が登録文化財として登録された。また、美袋八幡神社のラカンマキの標柱を建てたほか、2本の標柱（作原の椋の古木・ケンギョウ田遺跡）を立て替えた。今後は、老朽化した標柱の立て替えとともに、より文化財に親しむことのできるよう、説明板や散策コースの提案など活用面を充実してゆく必要がある。

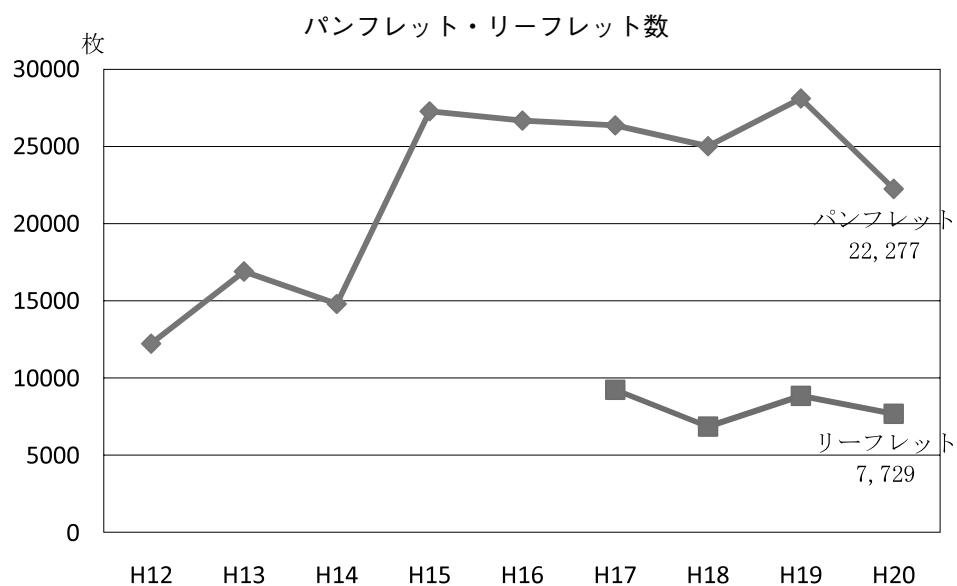
埋蔵文化財学習の館の入館者は、平成20年度380名（大人342・子供38）である。開館（平成6年8月1日）以来の入館者数でみると（第6表）、ここ数年、減少したまでの状態となっている。これは市内小学校児童によるふるさと学習に伴う校外施設見学の受け入れがなかったことや、市内からの入館者が減少していることが要因である。開館当初に実施した親子文化財教室のように、新たな事業の方策を検討し、入館者の増加につなげてゆく必要がある。



鬼城山ビジターセンターの入館者は、平成20年度7,729名であり、平成17年度の開館以来多少の増減はあるが、横ばい状況といえる（第7表）。

第7表 ビジターセンターリーフレット配布数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
平成17年度					1264	1086	1642	2146	452	760	798	1137	9285
平成18年度	992	1313	377	188	299	403	758	674	434	348	495	619	6900
平成19年度	985	1477	567	308	525	861	1149	1304	368	313	336	697	8890
平成20年度	799	874	336	388	447	566	967	1517	513	289	380	653	7729



また、史跡鬼城山への見学者は、平成20年度22,277名であり、昨年度より約6,000名ほど減少しているが、この計測データの基礎はパンフレットの配布数であることから、リピータ等で資料を必要としなかったケースも予想され、それほどどの落ち込みと判断してよいか、不明である（第8表）。

第8表 鬼城山パンフレット配布数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
平成12年度	1032	1467	685	754	580	962	1103	1869	858	253	940	1762	12265
平成13年度	932	1472	1285	902	1652	1500	1808	2440	1257	887	741	2054	16930
平成14年度	1424	1999	1319	634	1345	1079	1294	2479	645	1038	573	1000	14829
平成15年度	1000	2165	887	1067	1534	2163	2585	3220	2048	2870	2593	5166	27298
平成16年度	4050	3509	1658	1336	1436	1635	1346	4289	2540	828	1627	2445	26699
平成17年度	3423	3200	1000	700	2000	1590	4513	3361	2400	1348	1550	1300	26385
平成18年度	2500	3805	1393	600	1477	1850	2640	2254	1950	1869	2020	2680	25038
平成19年度	3100	4640	1874	1186	1872	2816	3306	3539	1160	1558	1092	1980	28123
平成20年度	2248	2607	1209	528	1792	1804	2210	3364	1598	1730	1215	1972	22277

資料等の貸出は、18件あり、多くは写真掲載の許可に伴うものであるが、展示に伴う遺物の貸出は、5件、

- ・岡山県立博物館 平成20年7月～8月
夏季展特別陳列「大地からの便り2008」に「鷹尾手遺跡・上三本松遺跡・荒神ヶ市遺跡出土資料」
- ・島根県立古代出雲歴史博物館 平成21年2月～5月
企画展「輝く出雲ブランド—古代出雲の玉作りー」に「南溝手遺跡・持坂20号墳出土資料」
- ・岡山県立吉備路郷土館平成20年4月～平成21年3月
常設展示に「こうもり塚古墳・西山古墳群・中山古墳群・服部遺跡出土資料」
- ・岡山県立博物館 平成20年4月～6月
常設展示資料に「一倉遺跡・宮山遺跡・新本横寺遺跡出土資料」
- ・大阪府立弥生文化博物館 平成21年4月～6月
春季特別展「弥生建築—卑弥呼のすまいー」に「窪木遺跡・横寺遺出土資料」

である。

講師・案内等の職員派遣は、22件である。岡山県立大学の博物館実習や市内中学生の職場体験の受け入れ、中央公民館「福寿学級」や清音小学校「めだかの学校」、岡山県立吉備路郷土館、出前講座などの公共施設・団体への講師派遣、ロータリークラブやライオンズクラブ、鬼ノ城塾など民間団体への講師派遣を行い、また、市内の文化財や史跡の案内等も行っている。

このほか、他の機関より多くの受贈図書をいただいており、寄贈本の一覧を掲載するのが本意であるか、紙帳の関係で掲載できなかったことをお詫びするとともに、ご寄贈いただいた諸機関の方々に厚くお礼申し上げます。

(前角和夫)

2. 立会・試掘・確認調査の概要

大文字遺跡（柏寺廃寺）の確認調査

遺跡名 大文字遺跡（柏寺廃寺）

所在地 南溝手292-2

調査期間 2008（平成20）年4月9日～4月16日

調査概要

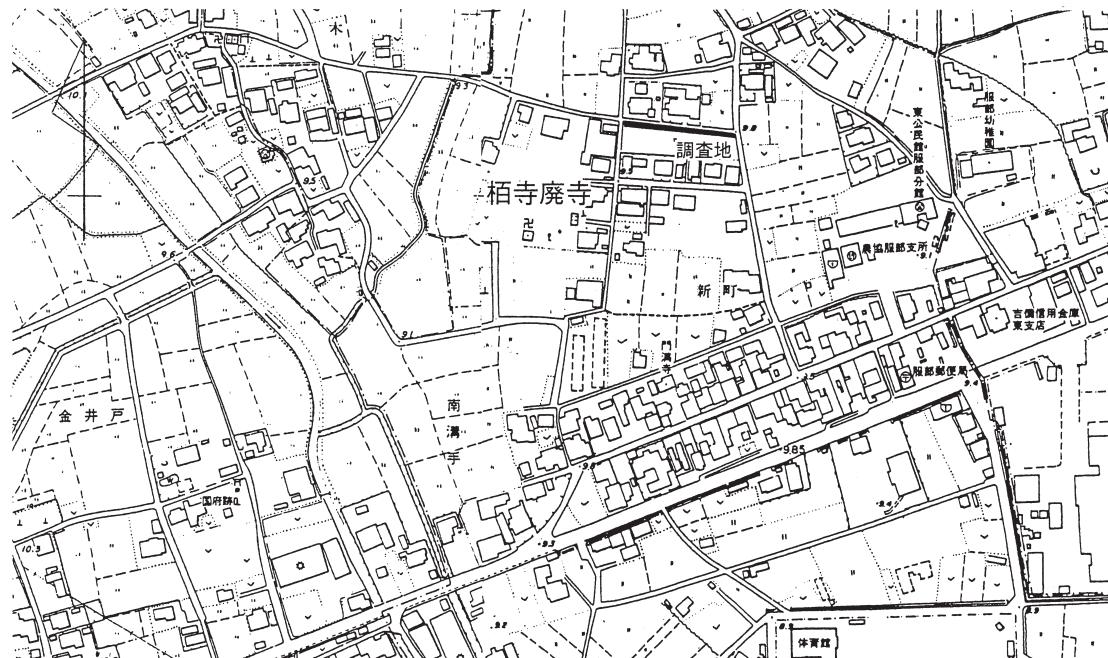
調査地は県指定史跡 柏寺廃寺の北東部に位置する。当該地では市道諸上南溝手線拡幅工事に伴い、長さ約73mの道路を幅2mから4mに拡幅し、路面舗装を施工することが予定された。既存の道路を生かしての拡幅のため、道の片側に擁壁を設置し掘削が伴うことから、工事と併行して確認調査を実施した。

柏寺廃寺の寺域は従前から東西1町、南北1町半に推定されており、今回の調査区は寺域の東限をかすめることになった。伽藍配置は唯一塔跡が判明しているのみで、諸説あるものの中門、塔、金堂、講堂が南北に並ぶ四天王寺式が推測されている。

調査の結果、調査区の西側（寺域の北東部に相当）で低位部を2ヵ所検出し、7世紀末葉から8世紀前葉の遺物が出土した。低位部は8世紀中葉までには人為的に埋められていることが判明し、埋没後には土壌状炭窯が3基造られていた。おそらく周辺には寺院造営の付属工房が営まれたと推測される。

調査区の西側からは寺域東側の区画溝を検出した。溝の規模は幅2.5m前後、深さ60cmを測り、溝底からは一枚作りの平瓦（8世紀中葉以降）と共に、他にも赤色顔料の付着した須恵器皿、鉄滓、鉄釘など寺院に関係する遺物が出土した。

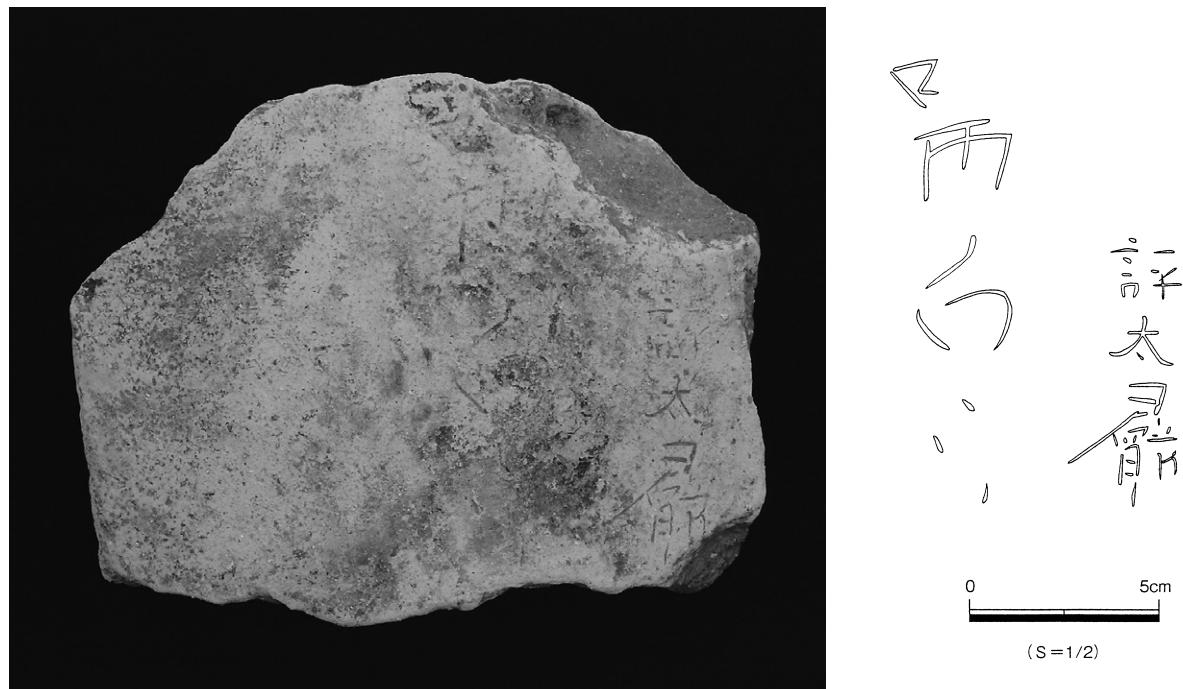
区画溝のすぐ西側に隣接して瓦廃棄土壌を検出し、内部から7世紀後半の古代瓦が多量に出土した。瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦と共に文字瓦が2点含まれ貴重な発見となった。文字瓦は「評」銘をもち、県内最古であること、造瓦工房において焼成前に刻書されていること、文章として表記されていることなどが特徴である。狩野久氏によれば、文字瓦①が雨乞いを評の水神に祈願する祭祀の



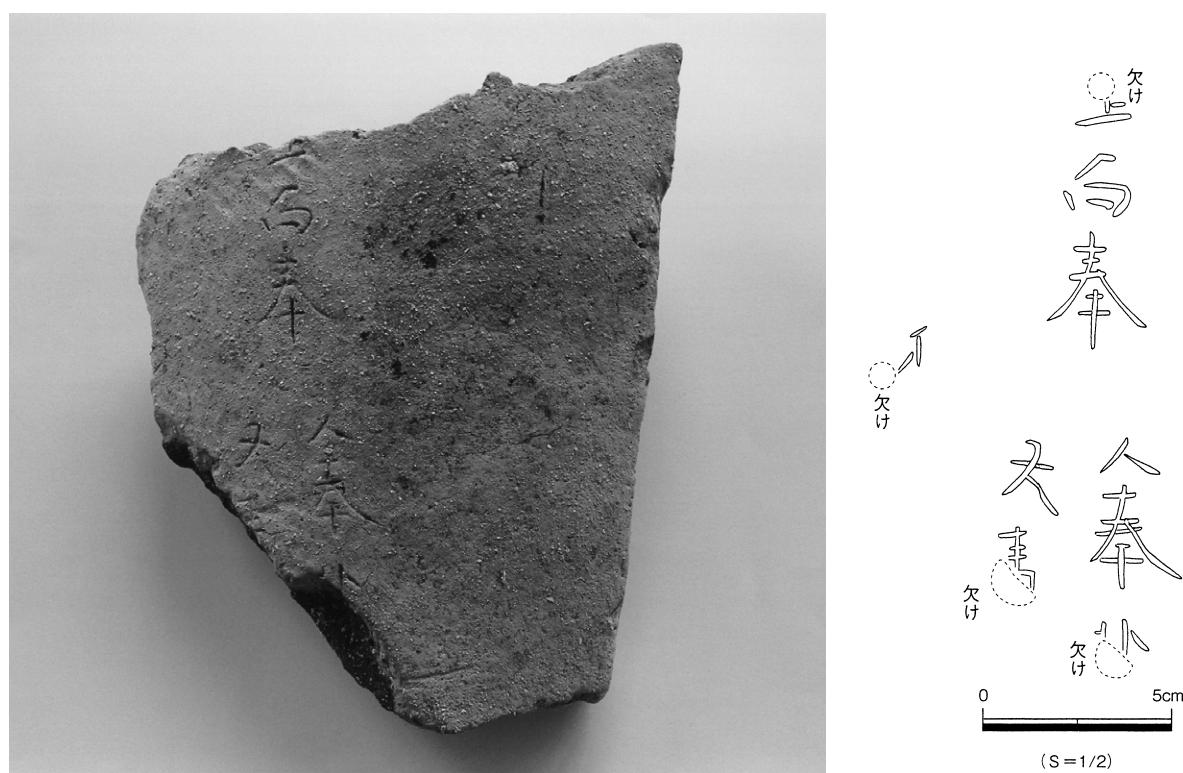
第3図 調査地位置図 (S=1/5,000)

文言とし、文字瓦②は「奉」が2回使われ、神あるいは上位者に対してものを献上する神事・祭祀に
関わる内容と考えられている。以上の内容については、平成20年度に確認調査報告書を発刊したので
参考にされたい。
(松尾 洋平)

参考 「大文字遺跡（栢寺廃寺）」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』20 総社市教育委員会 2009年3月



第4図版 文字瓦①



第5図版 文字瓦②

土採取事業に伴う確認調査

遺跡地 地頭片山413

調査期間 2008（平成20）年6月16日

調査概要

旧山手村に属する地頭古墳群周辺は、古くから果樹園として利用されており、地形は大きく改変されていた。また、これまで土採取事業も行なわれており、今回業者から土採取範囲をさらに広げたいとの連絡があった。

当該地は、遺跡地図で確認すると、古墳の印はないものの地頭古墳群で囲まれた中にあり、古墳などの遺構が存在する可能性もあったので、「埋蔵文化財発掘の届出」の提出を依頼し、現地の踏査を実施した。

土採取予定部分は葡萄等の果樹園で、大きく改変されていたが、それより上部に位置する総社市有地の最上部には、墳丘状のものが存在した。しかし、すでにその墳丘状のものも大きく削平され、墳丘状の周囲も大きく削られていた。頂部には江戸時代の墓碑があり、墓碑の存在からこの場所は開墾を免れたものと推察される。古墳であるならばからうじて民有地に周溝が残存している可能性もあり、民有地部分にトレンチを掘削し試掘調査をする必要がある旨を業者に伝え、調査を実施した。

その結果、トレンチの断面で墳丘と思しきものに最も近い箇所から、垂直に立ち上がる掘り込みが確認された。掘り込みの底部は平らで黒い有機物のラインが走り、底部から25cmほど上方にも、同様の黒いラインが水平堆積していることから果樹園に伴う穴と考えられた。さらに斜面下部のトレンチ断面では、何箇所かに搅乱が認められるが、基本的には、地山の上に花崗岩の媒乱土が認められるのみで、トレンチの両壁からは盛土や周溝らしき痕跡は認められなかった。また、遺物も一切認められなかった。

トレンチ掘削箇所以外の民有地は、墳丘よりも、さらに下がって傾斜をもっていることから、民有地内には古墳の痕跡はないと考えられ、古墳の可能性のあるマウンドはすべて市有地内にあることから、民有地の土採取に関しては慎重工事を実施してもらうこととした。

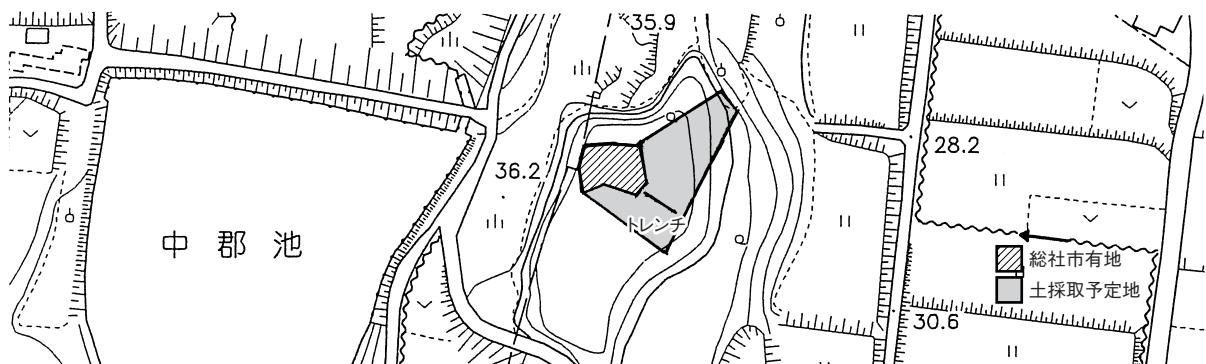


第6図 調査地位置図 (S=1/5,000)

なお、遺跡地図に記載された古墳の位置や記述についてズレが生じていたため後に判明したことであるが、頂部に所在する江戸時代の墓碑の存在及び墓碑銘を記した昭和49（1974）年の遺跡調査カードから、地頭3号墳であることが判明した。昭和28年に所有者並びに高松農学校により掘開され、人骨が出土して再度埋葬したという記述もみられる。出土遺物はなく、この地頭3号墳の性格は不明である。なお、添付された写真から、この時点では周辺は果樹園により既に開墾され、広く平坦になっていたことが認められ、現在古墳の西側に残る平坦面がこれにあたると考えられる。このことから、残存している古墳の墳丘はこの平端面のレベルから大きく下がることはないものと考えられ、市有地内ではほぼ終結するものと考えられる。

（平井典子・高橋進一）

註 昭和49（1974）年11月30日、小野一臣氏により記載された調査カードによる。



第7図 トレンチ位置図 (S=1/2,000)



第8図 地頭3号墳
昭和49（1974）年分布調査時の全景（小野一臣氏撮影）



第9図 地頭3号墳及び調査地遠景



第10図 トレンチ断面（東南から）



第11図 トレンチ断面（北東から）

店舗新築に伴う造成工事の立会調査

遺跡名 牛神遺跡

所在地 三須1827-2ほか

調査期間 2008（平成20）年6月16日

調査概要

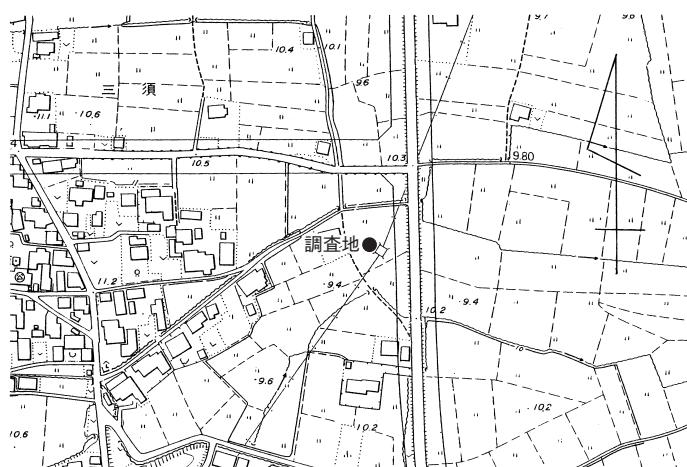
調査地は総社市街地の東部、三須地区に所在し、総社平野を南北に貫く国道429号線の沿線に位置する。現況は水田であるが、今回店舗の新築にともない、造成工事が計画されることになった。造成面積は1760m²であり、遺跡への影響を及ぼす掘削工事は擁壁の設置と、浄化槽の埋設であった。

造成地の外周に建設される擁壁は水田面より-20cm止まりのため、耕土をすき取るのみで遺跡に与える影響はなく、主に浄化槽部分について立会調査を実施することにした。

層序は2層が耕土、3・4層が近・現代に客土された造成土である。そして、7層（層厚15cm）が基盤層となり、層の上面より遺構を5基検出した。これより以下の8層（層厚10cm）は全体的に暗い色調で水田層の可能性もあり、9層（層厚15cm以上）は無遺物層になっていた。

検出した柱穴は径32~55cm、深さ11~30cmであり、埋土には須恵器小片を含むものもあった。時期は遺物がほとんど出土しなかったため不明な点が多いが、埋土中より出土した須恵器小片と、過去に調査された牛神遺跡や三須河原遺跡などの事例から勘案して、少なくとも古墳時代以降の遺構面と考えられる。

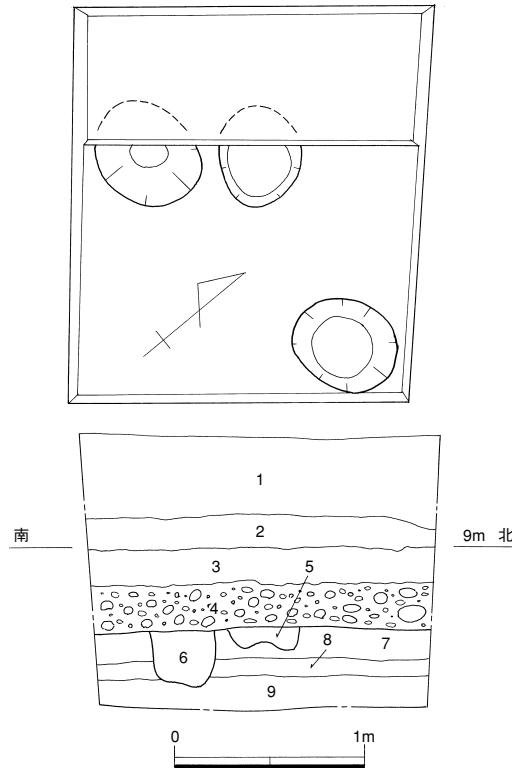
(松尾)



第12図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第14図版 調査状況（東から）



第13図 トレンチ平・断面図 (S=1/40)

- | | |
|-------------------------------|---------------------------------|
| 1. マサ土（工事造成土） | 6. 5と同じ |
| 2. 褐灰色土（5YR 5/1）耕土 | 7. にぶい褐色粘質土
(7.5YR6/3) |
| 3. にぶい橙色土（5YR 6/4）客土 | |
| 4. 褐灰色礫土（5YR 4/1） | 8. 灰褐色粘質土（7.5YR5/2） |
| 5. 灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
炭・土器粒有 | 9. にぶい黄橙色粘質土
(10YR6/3) マンガン混 |

ガソリンスタンド建設に伴う試掘調査

所在地 西郡字樋ノ尻449-1ほか

調査期間 2008（平成20）年6月18日

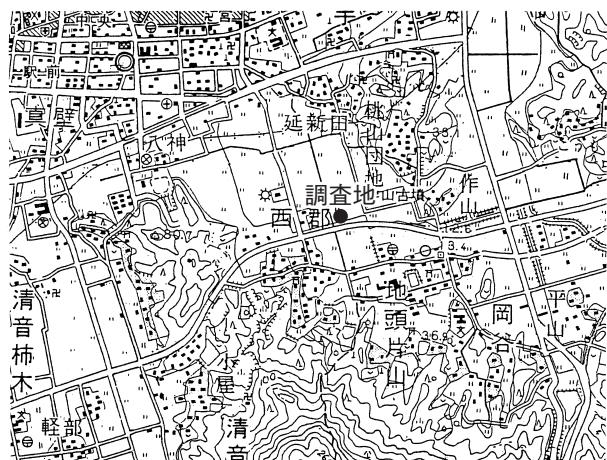
調査概要

調査地は、総社市西郡地区を横断する県道清音真金線の西郡交差点から、東へ約100m離れた水田に位置する。当地は遺跡が確認されておらず近辺の発掘データーも不足しており、埋蔵文化財については不明な点が多い地域である。今回、当地ではガソリンスタンドが建設されることになり、擁壁や貯水槽などの埋設物が設置されるため、事業者と協議の上、事前に試掘調査を実施することになった。

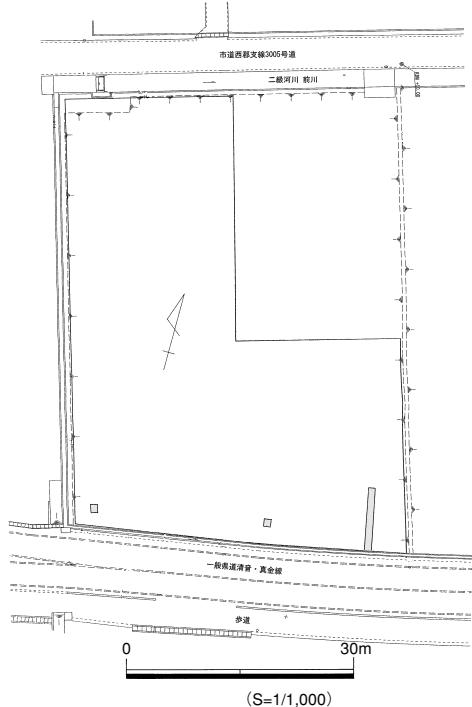
調査地周辺の地形は旧山手村側（南側）の方が、総社平野側（北側）よりも相対的に高くなるため、南側を中心にトレンチを3本設定した。

調査の結果、全ての層序に変化はなく、GL-50cm以下はグライ化の強い青灰色粘土であり、低湿地であることが判明した。もとの地形が低湿地で全体的に低位であったため、近代以降、マサ土により厚さ30cm程度がかさ上げされ、現在の水田が形成されたことになる。

今回の試掘調査では当地に遺構、遺物は検出されず、遺跡外であることがわかった。（松尾）



第15図 調査地位置図 ($S=1/5,000$)



第16図 トレンチ位置図と土層柱状図
($S=1/1,000$, 1/40)

共同住宅建設に伴う試掘調査

所在地 中原860

調査期間 2008（平成20）年6月23日

調査概要

高梁川の東岸に位置する中原に、2棟の共同住宅が建設される予定となった。

当該地は、包蔵地ではないが、南約200mの地点で実施した分譲住宅の防火水槽掘削に伴う立会調査で、遺構は確認されなかったものの、厚く堆積した砂礫層中より、磨耗していない吉備型甕の小片が採集されていることから、周辺に微高地と遺跡の存在が想定されるため試掘調査を実施した。

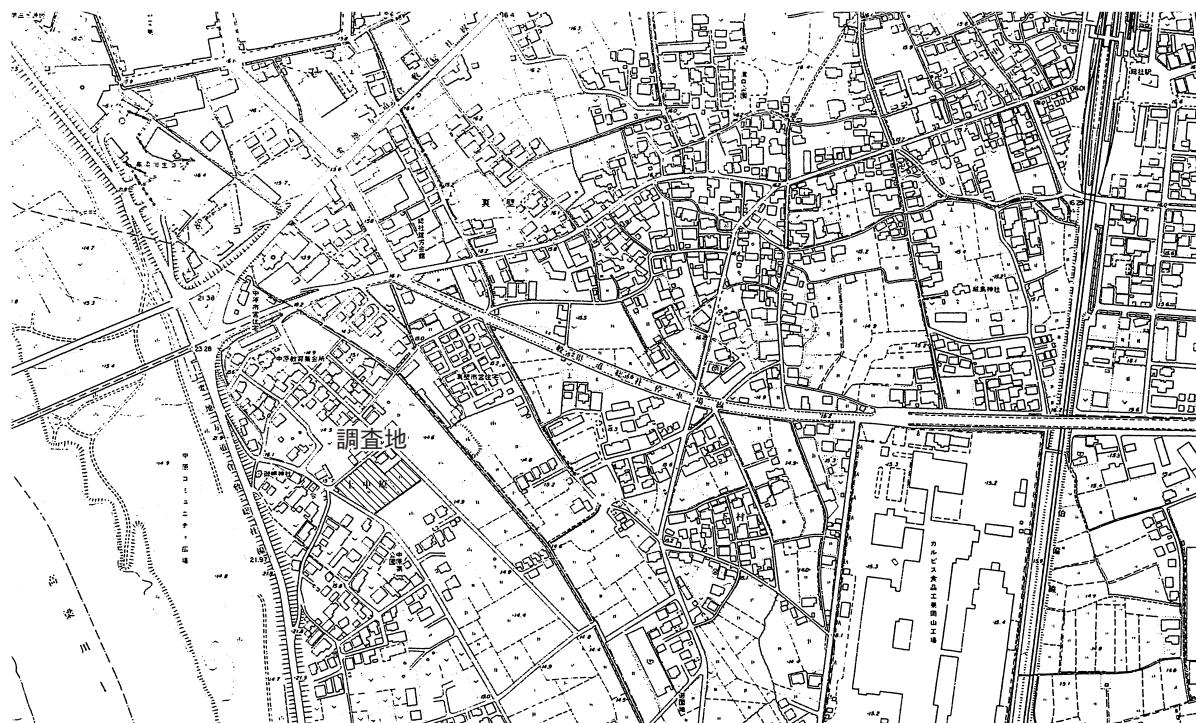
調査は、4箇所にトレーンチを設定し、人力によってスコップで掘削した。

西よりのT-1, T-2はほぼ同様の土層堆積状況で、1層が表土、2層が旧水田の耕作土、3層は灰茶色の粘質を帶びた砂質土層、4層は砂層で約10cmより下層は2cm～人頭大の礫が大量に含まれている。堆積状況から高梁川の氾濫原と考えられる。

中央北付近のT-3では、T-1, T-2とは大きく異なる土層の堆積状況が確認できた。1, 2, 3層は他のトレーンチと同様だが、その下層は砂質土と砂が互層になって堆積していた。西端には下がりが認められ、下がりの上部に粗い砂が厚く堆積していた。

南東よりのT-4は、T-3に近い堆積状況で、4層以下は、砂質土と砂の互層になり、東端には下がりが見られた。下がりの上層には粗い砂と一部礫が堆積する。

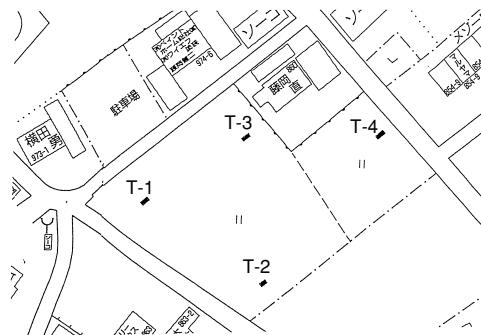
以上の状況から、西側は高梁川の氾濫原と考えられる。中央付近から東にかけては、砂質土と砂の互層が見られることから、洪水によって砂が堆積し、その後その上に植物等が繁茂した時期があつて



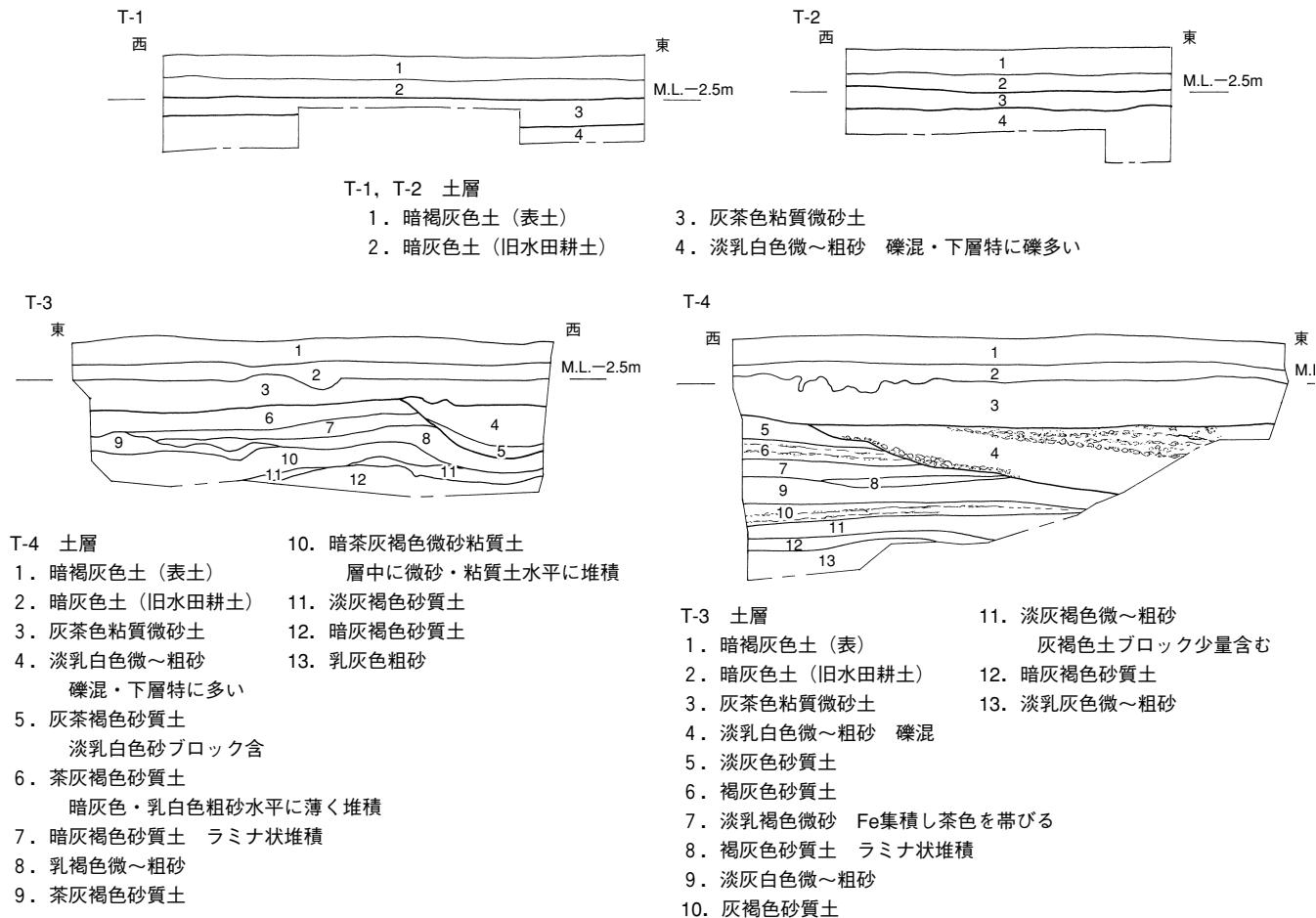
第17図 調査地位置図 (S=1/8,000)

土化し、またその上部に洪水の砂が堆積したという状況が繰り返されたことが読み取れる。この互層になった部分はT-3の西側と、T-4東側で下がっており、この両下がり間のやや高い部分が自然堤防状の高まりになっていたと考えられる。しかし、端部付近に当たるため、あまり安定はしていなかったと考えられ、遺物も皆無であった。

(平井)



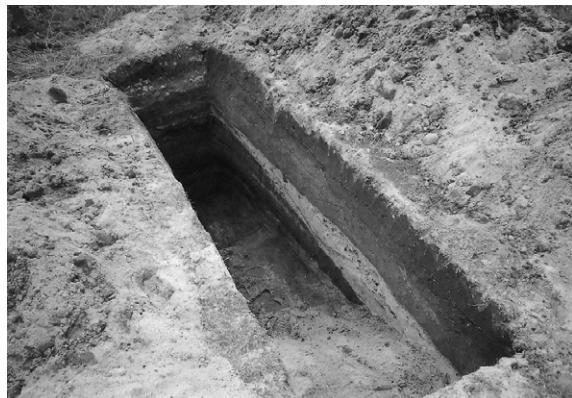
第18図 トレンチ位置図 ($S=1/2,000$)



第19図 T-1～T-4土層断面図 ($S=1/40$)



第20図版 T-1土層断面図（南から）



第21図版 T-4土層断面図（南東から）

市道（宿支線3026号道）拡幅工事に伴う確認調査

所在地 宿1013-3ほか

調査期間 2008（平成20）年7月1日

調査概要

調査地は総社市南西部の宿地区に位置し、備中国分寺から南へ700m離れた南北道路の拡幅が対象となった。龍王山東麓の谷から総社平野に向けて扇状地が形成され、扇端に位置する調査地周辺は、緩斜面を利用した段々畑と宅地の造成地になっている。

工事は現況の路面を踏襲し、道路幅2mから4mに拡幅する計画で、造成地の高所を削平する一方、低位部分についてはGL-50cmまで掘削し擁壁を設置後、造成する予定である。そのため、工事に先立ち確認調査を実施することになった。

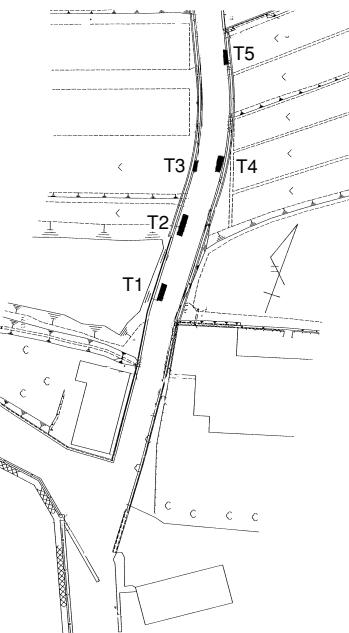
道路は湾曲し調査箇所が限定されるため、T1からT3を西側に設定し、東側にはT4とT5を設けた。T1は深さ1.4mで地山に達し、地山直上には谷の埋積土である暗灰黄色粘質土（5層）が堆積していた。4層からは古代の須恵器壺片が出土したことにより、少なくとも古代以前には道路より西側が谷地形であったことが推定される。T2、T3では、GL-60cm程度でT1の5層と同じ暗灰黄色粘質土（谷の埋積土）を確認し、地山はさらに深く埋没している。

T4は耕土直下で地山を検出し、段々畑の開墾により旧地形が削平されたものと考えられる。また、T5ではGL-50cmで、地山を確認し小溝を検出した。小溝は幅70cm、深さ16cmを測り、埋土が黄灰色系であることや、地山上から摩滅した中世瓦片が出土したことにより時期は中世と考えられる。

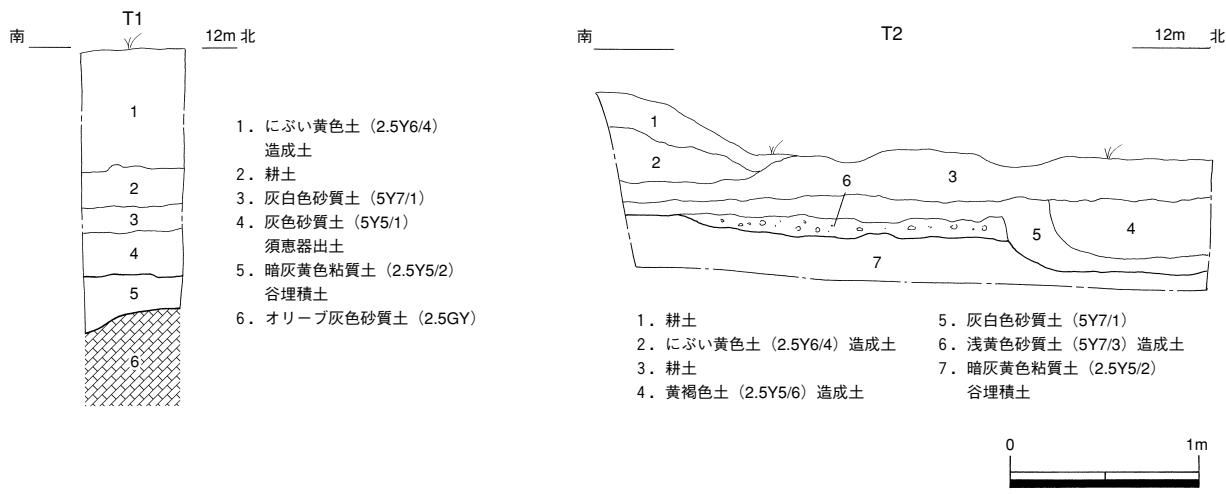
今回の調査では南北道路を境として、東側と西側の旧地形に高低差が認められた。周辺地形の高まりやT4・T5で検出した地山の高さからみて、道路より東側の段々畑が安定した扇端であり、少なくとも中世の遺構が存在する。一方の西側は全体的に地形が下降し、谷の埋積を示す暗灰黄色粘質土が厚く堆積しているため、今回調査した南北道路は概ね扇端の西側肩部に相当しよう。
(松尾)



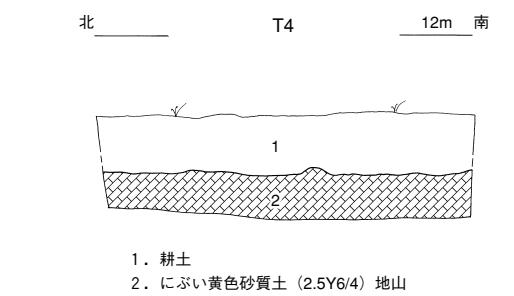
第22図 調査地位置図 (S=1/50,000)



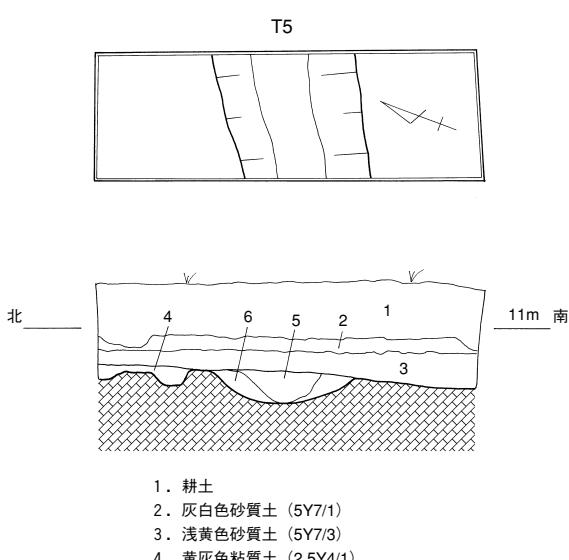
第23図 トレンチ配置図 (S=1/1,000)



第24図 トレンチ平・断面図 (S=1/40)



トレンチ西壁



トレンチ東壁



第25図版 各トレンチ断面

携帯基地局建設工事に伴う立会調査

所在地 真壁字波戸端下1609-28, 1741-5

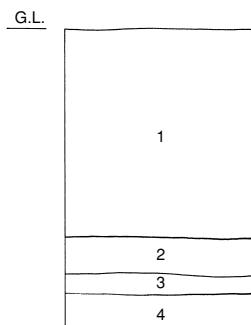
調査期間 2008（平成20）年7月10日

調査概要

高梁川東岸・真壁地内の工場密集地帯に携帯基地局の建設が予定された。

当該地は、高梁川の堤防から東へ約200mの地点に当たるため、高梁川の氾濫原と想定されたが、中州状の自然堤防が存在する可能性もあるので、掘削時に立会調査を実施することとした。

基礎掘削時、約110cmの造成土の下に、20cm程度の旧耕作土、その下層には、鉄分を多く含む茶褐色の床土が認められた。さらに下層には、礫混じりの微～粗砂層が堆積しており、当初の予想どおり高梁川の氾濫原であることが判明した。
(平井)



1. 造成土
2. 暗褐色灰色土（旧耕作土）
3. 茶褐色土（床土）
4. 淡乳褐色砂（礫混）

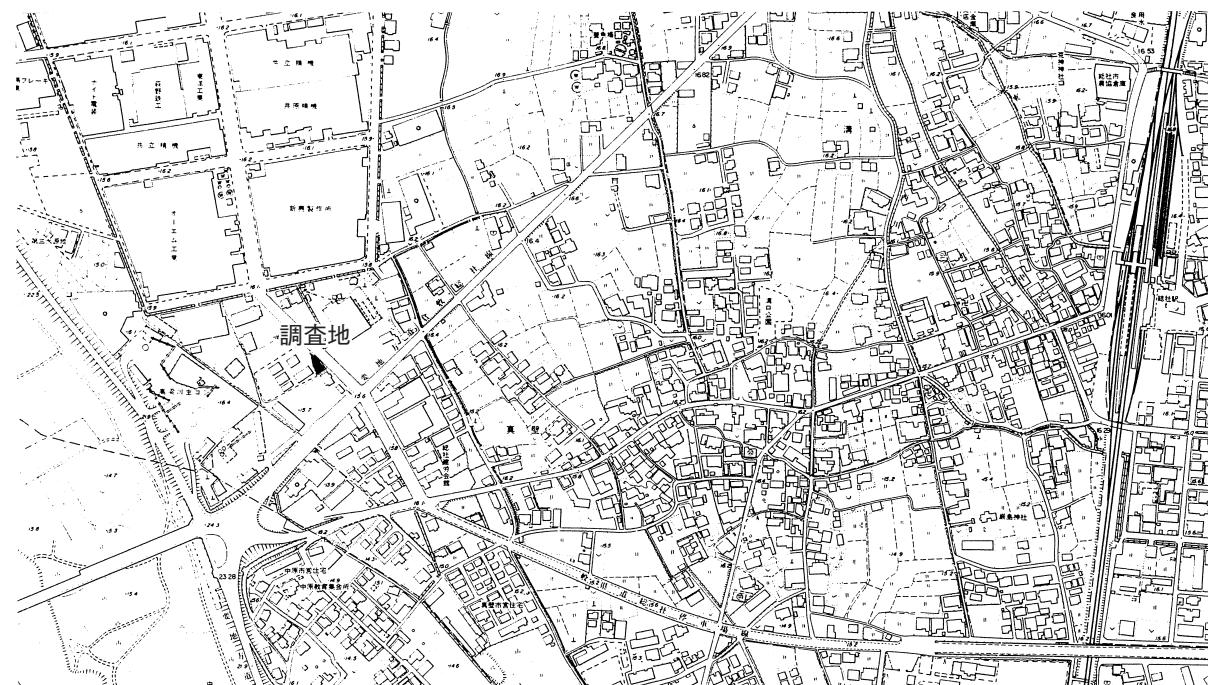
第26図 土層柱状図
(S=1/40)



第27図版 南西隅掘削
状況（東から）



第28図版 土層断面（東から）



第29図 調査地位置図 (S=1/8,000)

集合住宅建設に伴う確認調査

遺跡名 真壁遺跡

所在地 中央4-24-106

調査期間 2008（平成20）年9月2日

調査概要

調査地は総社市街地にあり、水別総社線と会議所通りが交わるポンプ場前交差点から北西へ140mの地点に位置する。

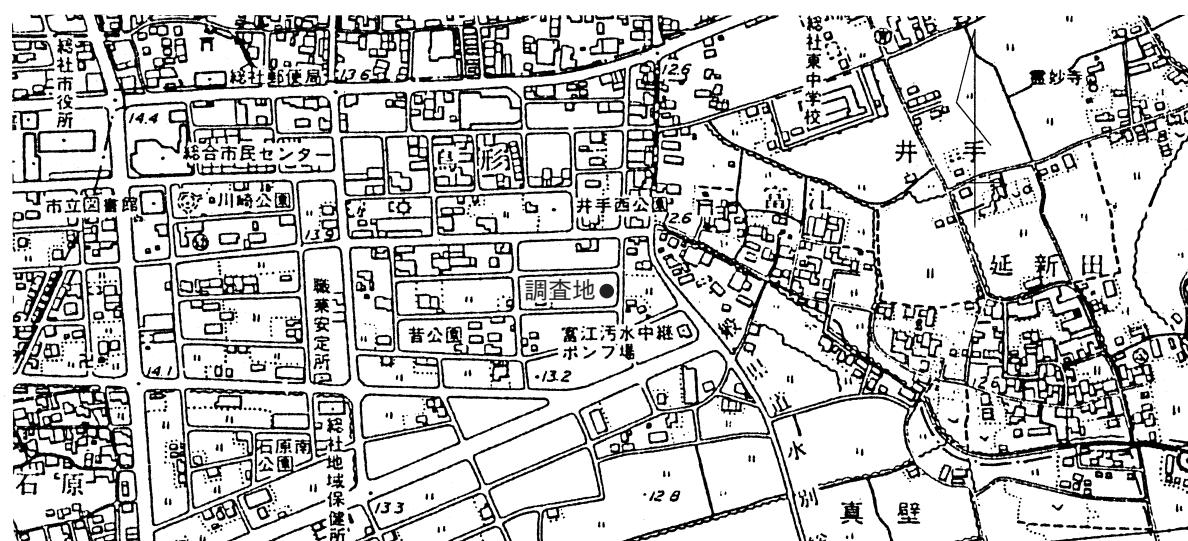
当地は中央地区土地区画整理がすでに実施されている地域であり、その一角の休耕田に集合住宅が建設されることになった。建設計画では敷地内に3棟の建物を建てるに際し、基礎の下部にGL-40cmの深さで地盤改良を実施する事と、西側の隣地境界には擁壁が設置されることになった。そのため、建設工事に先立ち確認調査を実施し、今後の対応を見定めることにした。

確認調査は敷地内に4ヵ所のトレンチを設定した。各トレンチとも基本層序は同じで、1層が耕土、2層は現代造成土、3層は水田床土、4層は基盤の暗灰黄色砂質土であった。

検出遺構は基盤層（4層）を掘り込んでT1から土壤2基、T2では柱穴1基、T3から溝1条と柱穴2基、T4からは柱穴2基を検出した。

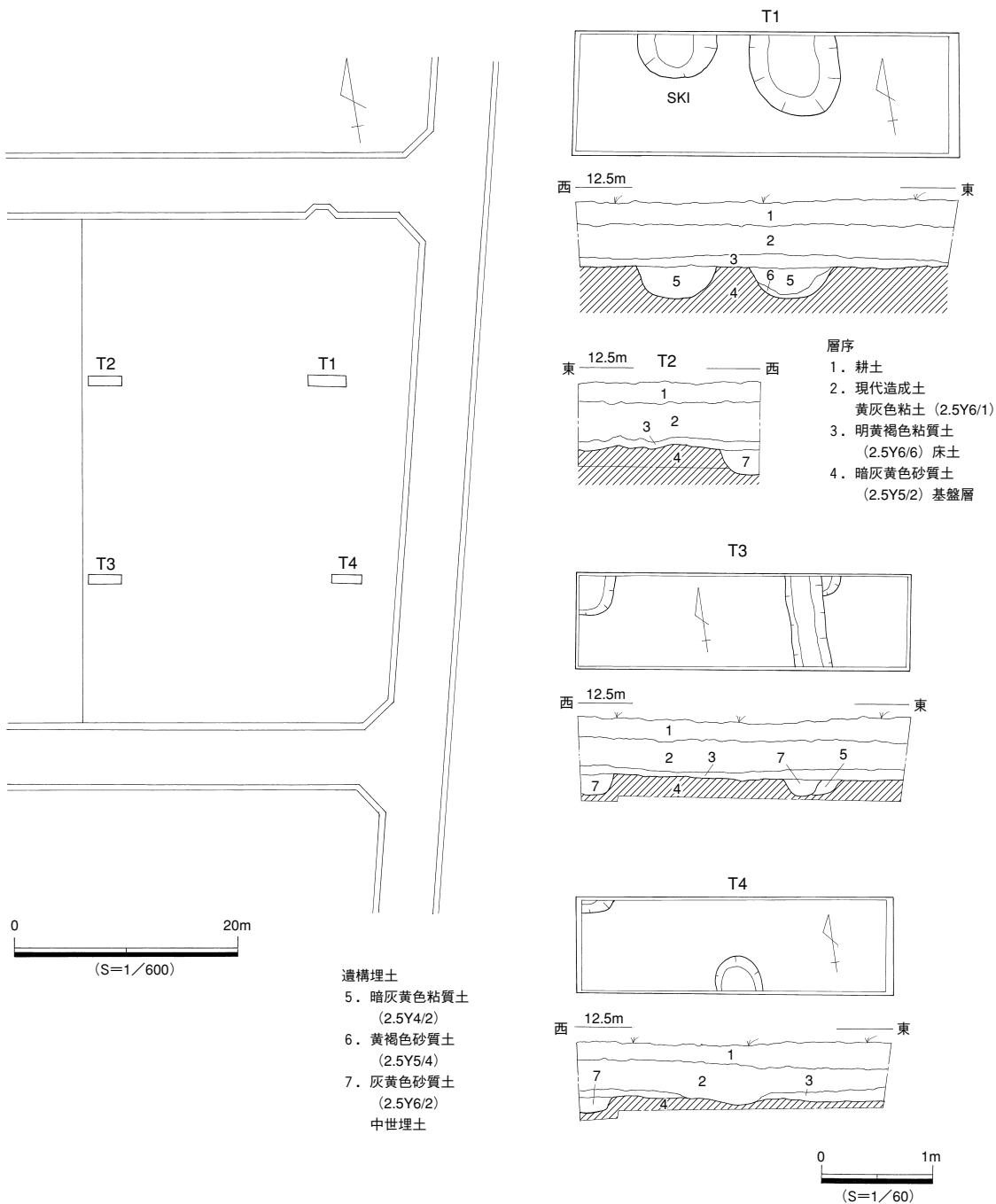
遺物は弥生土器小片、須恵器片、中世土器片がわずかに出土したが、そのほとんどがローリングを受け固化に耐えない。そのため、遺構埋土により時期を推測すれば、まず、淡い色調の7層はT2、T3、T4で検出され中世に比定される。次に、暗い色調の黄褐色粘質土（5層）はT1とT3から検出し、T1のSK1から弥生土器小片（後期）が出土したことから、少なくとも弥生時代以降の遺構と考えられる。

遺構の検出状況から4層上面には、中世と弥生時代以降の遺構が展開していると見られる。



第30図 調査地位置図 (S=1/10,000)

確認調査の結果、GL-50~60cmの深さで遺構面に達することが判明したのであるが、建物部分の地盤改良については深さが遺構面まで及ばないため遺跡への影響はない。一方の擁壁部分については、当初の工事計画では掘削が遺構面まで達してしまうため、工事業者と設計変更を協議したところ、擁壁の掘削は遺構面よりも上位で留まり、工事予定地の遺構は全て保存されることになった。（松尾）



第31図 トレンチ平・断面図 (S=1/600, 1/60)



T1
(南東から)



T1 (東から)



T3
(南東から)



T2
(北から)



T3 (東から)



T4
(南東から)

第32図版 各トレンチの遺構と土層断面

個人住宅建設に伴う立会調査

所在地 小寺 523-1

調査期間 2008（平成20）年11月13日

調査概要

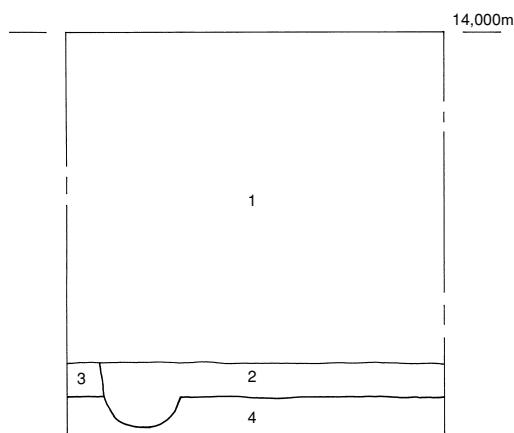
本調査は、個人住宅の浄化槽掘削に伴う立会調査として実施した。

調査地は、総社市市街地の北側に位置しており、現況は水田上に客土して造成された宅地である。

調査地の周辺では、消防庁舎のヨウ壁を築造した際に微高地上に住居址が検出されている。

調査の結果、客土の直下に（暗）灰（茶）褐色土層が堆積しており、3軒の住居址がこの層に切り込まれていたと考えられる。

（高橋）



1. 真砂土客土 3. 暗灰褐色土（住居址埋土）
2. 暗灰褐色土（住居址埋土） 4. （暗）灰（茶）褐色土



第33図 土層断面図 (S=1/40)

第34図版 土層断面



第35図 調査地位置図 (S=1/5,000)

工場増築工事に伴う確認調査

遺跡名 大文字遺跡

所在地 窪木900-1

調査期間 2008（平成20）年11月25日，2009（平成21）年2月21日

調査概要

総社市東部、大文字遺跡の包蔵地に立地する工場の敷地内に、新たに工場を増設する計画がなされた。増築する建物部分の基礎は、地表面から150cmまでを掘削し、その後径40cmの杭を77本打つこととなっており、建築面積2307.50m²に対し、杭面積は10m²弱と狭小である。事前のボーリング調査で、約150cmの厚さで造成土が認められるということであったが、保護層の確保や、造成土を越えて基礎が掘削される恐れもあることから、確認調査を実施し遺構の有無と土層の堆積状況を把握することとした。

工場が稼動していることから、トレーンチを掘削できる箇所は、植え込みを取り除いた北西よりの一画のみであった。2箇所のトレーンチを掘削した結果、ほぼ同様の堆積状況が認められた。真砂土による造成土が地表面から約140cm強の深さまで認められ、その下層には、15cm程度の水田耕作土が造成時に除去されずに残存していた。さらに下層には、近世以降の水田層と考えられる層が3層堆積しており、その下層には鉄分を多く含む床土が認められた。さらに下層の6～8層は、褐灰色土、暗褐灰色土、暗灰色粘質土の自然堆積層となる。3層以下はグライ化が進んでいる。

以上、両トレーンチ内の土層は、低位部の様相を呈しており、遺構・遺物は皆無であった。

なお、増築される建物の南部分は、運搬用通路として舗装され、現在も使用されていることから、確認調査を実施できなかったが、工場敷地の南に東西に走る道路の南側では、前川地区ほ場整備事業に伴う発掘調査で遺構が発見されている。そのため建物南部分では微高地にあたる可能性もあること



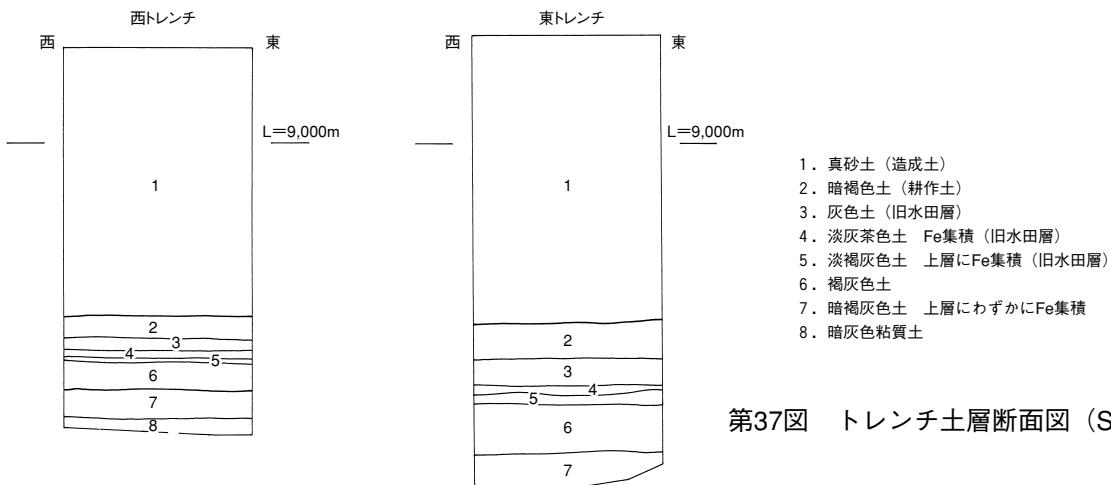
第36図 調査地位置図 (S=1/5,000)

から、基礎掘削時に立会調査を行い、基礎掘削が造成土や水田耕作土内で収まるか否か、また遺構が存在するか否かを確認することとした。

年が明け、2月21日に南部分の基礎掘削が開始されたため、立会調査を実施した。その結果、他のトレンチ同様、地表面から150cmの深さまで造成土が認められ、その下層には旧耕作土と考えられる暗灰褐色粘質土層が約20cm程度堆積していた。さらに下層には青灰色土層が認められたが、基礎部分のため、これ以上の掘削はできないことから、これより下層の状況は不明である。しかしながら、グライ化が進んでいることから、低位部にあたるものと考えられる。なお、遺物もまったく検出されなかった。

以上のことから慎重工事の対応を行った。

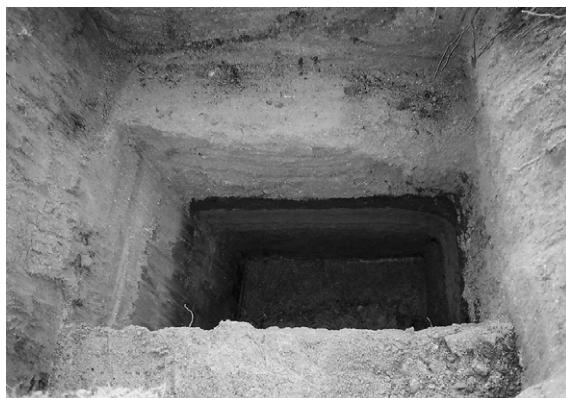
(平井)



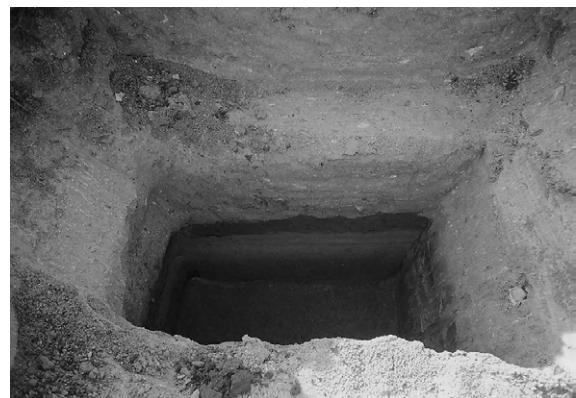
第37図 トレンチ土層断面図 (S=1/40)



第38図版 調査地近景



第39図版 西トレンチ土層断面（西から）



第40図版 東トレンチ土層断面（南から）

分譲地造成工事に伴う確認調査

遺跡名 広峰遺跡

所在地 福井2109ほか

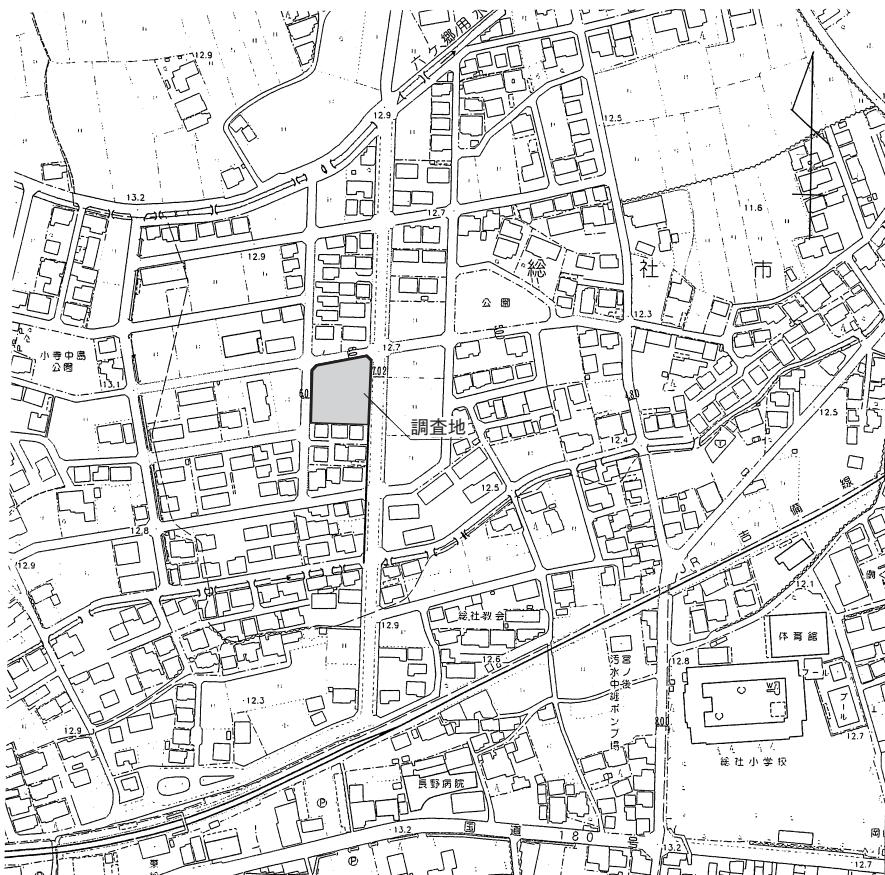
調査期間 2009（平成21）年1月6日

調査概要

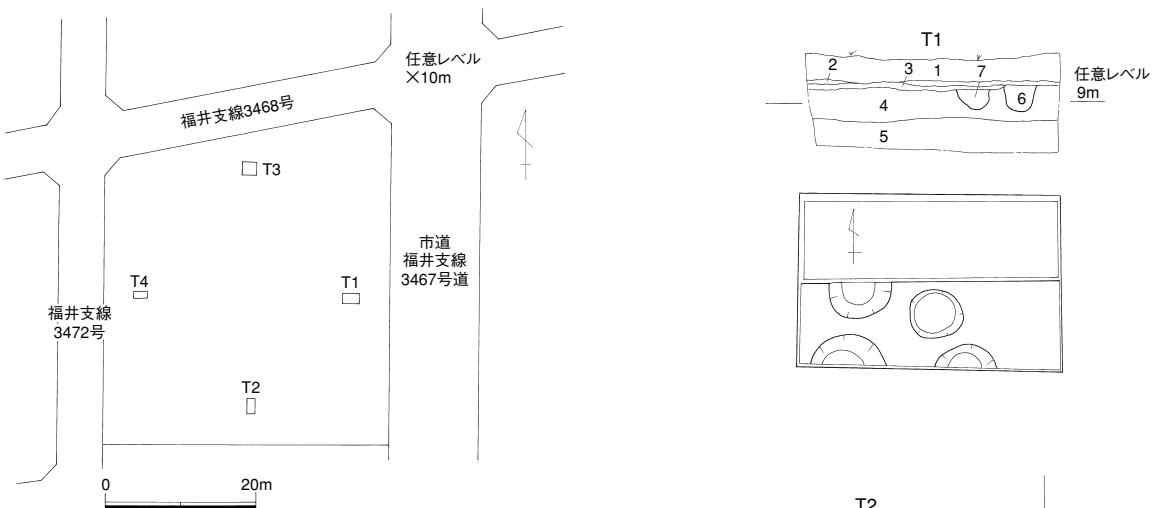
調査地はJ R総社東駅から北東へ約300m離れた小寺東区画整理地内に位置する。平成5年に実施された区画整理に伴う発掘調査では、調査地よりも北へ行くほど遺構密度が濃くなり、六ヶ郷用水近くで中世の遺構が多数検出されている。また、反対に南側へは密度が薄くなると共に地形が下がり、約70m離れた吉備線の近くは河道及び低位部に比定されている（註）。

調査地の現況は水田であるが、分譲宅地用地として今回造成が計画され、敷地内に約70cm厚の造成を行って更地となし、開発道路を2本設置する予定となった。今回は造成工事がほとんどのため、遺跡に与える影響は軽微であるが、造成後の住宅建設への対応や周辺地での調査データーが不足しているため、確認調査を実施した。

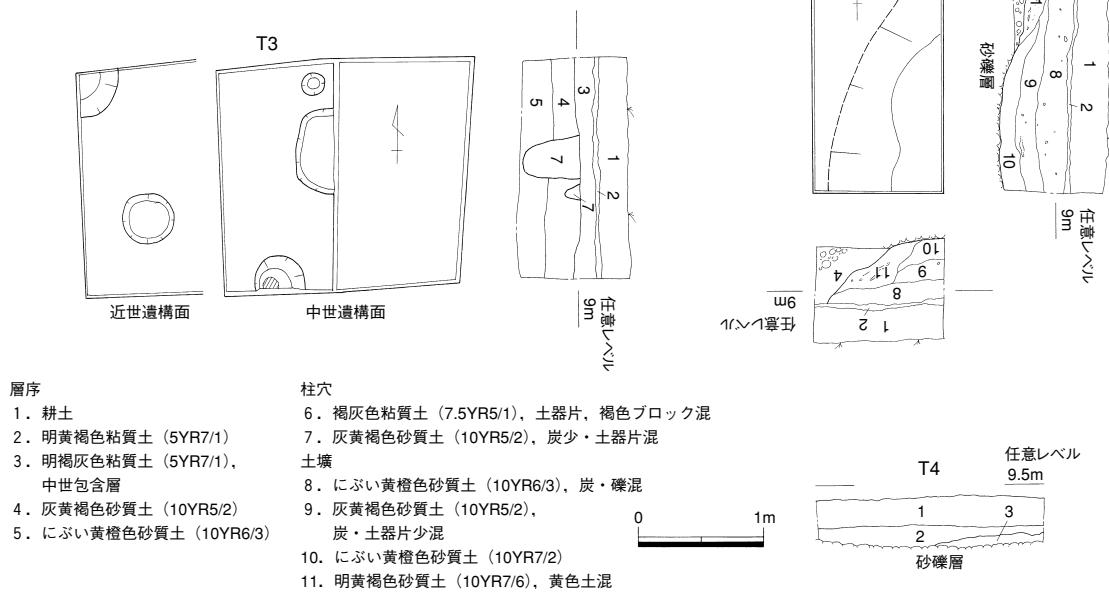
調査は敷地内にT1からT4を設定し、遺跡の状況を概観することにした。層序はT1とT3で中世包含層（3層）を確認し、包含層上面より近世以降の柱穴を確認した。4層の灰黄褐色砂質土が基盤層であり、この面より柱穴と土壌を多数検出した。5層は砂質が強い無遺物層で、これより以下は砂礫層となる。



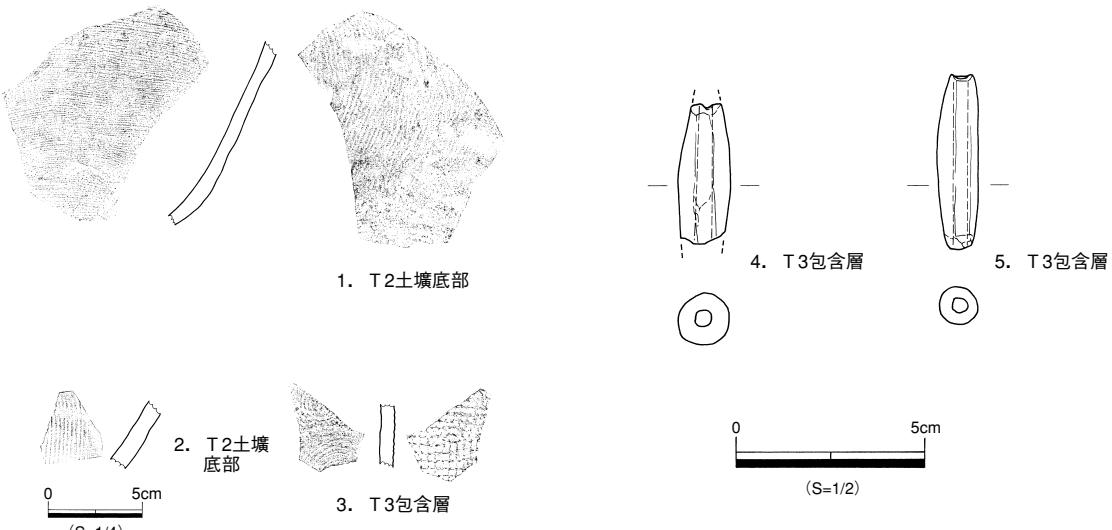
第41図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第42図 トレンチ配置図 (S=1/1,000)



第43図 各トレンチ平・断面図 (S=1/60)



第44図 出土遺物 (S=1/4・1/2)

遺構はT 1～T 3で検出し、T 1からは包含層上面より近世以降の柱穴1基と、基盤層より柱穴5基を検出し、柱穴内から早島式土器碗の小片が出土した。

T 2は土壤あるいは溝の可能性がある遺構を検出した。深さ約50cmを測り底部は砂礫層に達し、埋土から土師質鍋（1）と備前焼擂鉢（2）が出土した。（1）は鍋の底部で底部付近が丸みを帯び、調整は外面タテハケ、内面は細かいヨコハケで仕上げる。（2）の擂鉢には内面に卸し目が施されており、赤褐色を呈する。遺物の年代観から土壤は14世紀以降と考えられる。

T 3は基盤層から柱穴5基と、包含層上面より近世以降の柱穴2基を検出し、包含層から早島式土器片、亀山焼甕（3）、鍋ならびに土錘（4・5）が出土した。（3）は外面格子目タタキで、内面は同心円状圧痕が見られる。土錘（4・5）はいずれも早島式土器の胎土と類似する灰白色系で、完形の（5）は長さ3.7cm、幅1.4cm、孔径4mmを測る。

調査の結果、遺物からみて中世遺構面の年代観は13世紀以降であり、調査地の北側（T 3）と東側（T 1）は遺構の密度が濃いことから、平成5年に発掘調査された集落遺跡の中心に近いと考えられ、反対に西側（T 4）へは地形が下がると見られる。

なお、確認調査の結果に基づき道路側溝設置などに伴い、掘削が遺構面に達しないよう事業者に申し込み造成土以下で遺跡は保護されることになった。
（松尾）

註 「小寺東区画整理事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』4 総社市教育委員会 1994年11月



T 1 (西から)



T 3 (北から)



T 2 (北西から)



T 2 (南から)

第45図版 各トレンチの遺構と土層断面

備中国分寺参道改修工事に伴う立会調査

遺跡名 備中国分寺跡

所在地 上林字国分地

調査期間 2009（平成21）年1月10日～1月25日

調査概要

今回の立会調査の対象となった備中国分僧寺は、前面に東西に走る旧山陽道を見下ろす小高い丘陵に南面して位置しており、吉備路観光の象徴的存在として著名な五重の塔を始めとする現在の日照山国分寺は享保七年（1722）頃に再建されたものである。

現在の伽藍の下に埋もれる旧国分僧寺は、ほぼ天平年間に造立されたと考えられており、1971年の県教育委員会の発掘調査により築地で画された東西160m、南北178mの伽藍地の規模と、南門・中門の位置が明らかにされている。しかしながら、他の金堂・講堂・塔等の諸施設は現在の堂宇と重複するためその配置は不明であり、その後に発掘調査が実施されることもなく現在に至っている。

今回の立会調査は南門から南の遊歩道に伸びる現参道の石積みが老朽化したため、コンクリート擁壁で参道の両側を補強する工事に伴い、擁壁の基礎構造により掘削される側壁の幅1m、長さ30mについて工事と平行し断面観察を主体とする調査を行った。

調査の対象となった現参道は、旧南門の前面が約1.6mの比高差で崖状に削平され耕作地として利用されていたため、土橋状にほぼ旧来の斜面傾斜で南門に続いている。

断面観察（第49図）から、本来は緩斜面であった南門の前面が崖状に削平されて耕地化したのは17世紀以降で、その後に国分寺の再建にあたり土・瓦礫を積み上げ現在の土橋状の参道を築いたことが明らかになった。

また、耕作土上の盛土最下層からまとまって出土した瓦は、備中平野では瓦葺きの建物が城郭・陣屋・寺院等に限られ、まだ一般的ではない17世紀初頭の所産（註－1）である点から、通説である18世紀の現国分寺の再建以前に、文献には記されていない堂宇が存在した可能性も考えられる。

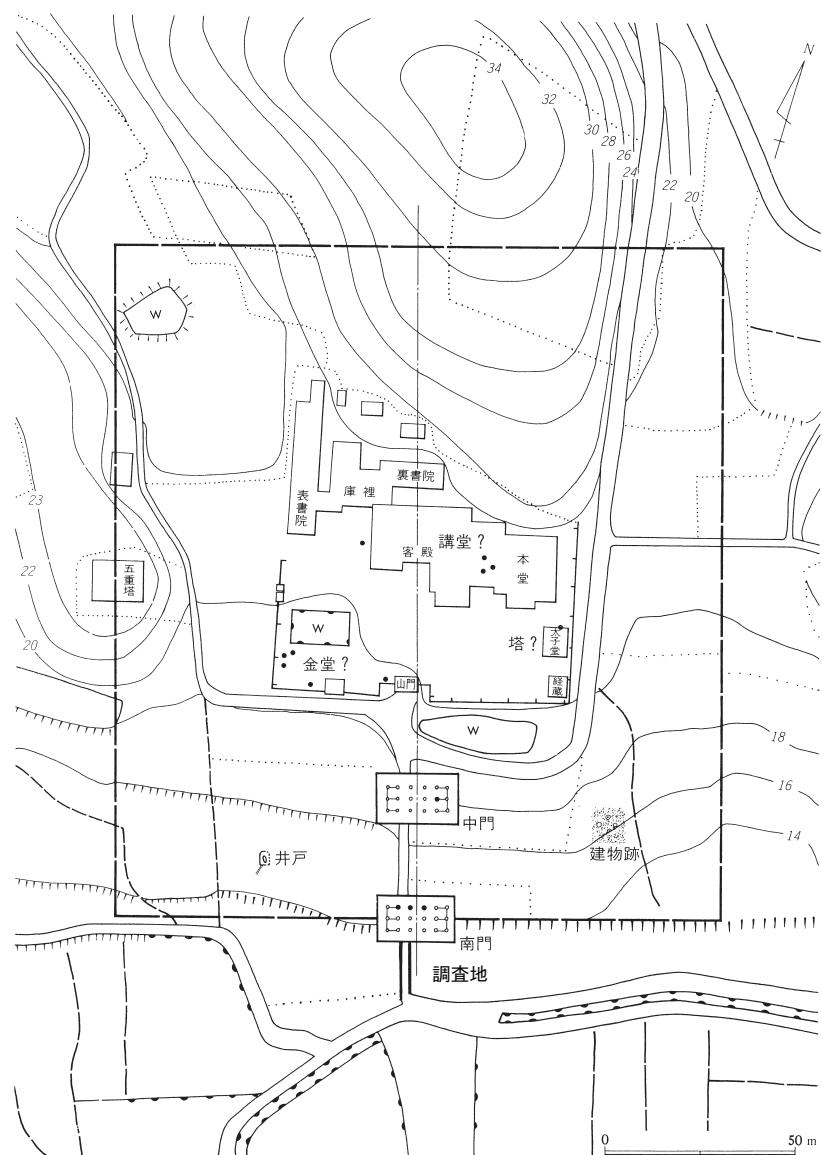
上記の近世の耕地化に際しての旧地形斜面の削平は、南門の直下から南10m付近までは造成土直下で地山の花崗岩バイラン土が露頭するまで及んでいるが、参道西側調査区の南半部分では緩斜面下端であるため削平を免れ、旧地形に堀り込まれた柱穴・溝が検出された。

調査区南端で南北方向に長さ約3mが検出された溝は大量の布目瓦で埋められており、この溝を埋めた造成土に掘られた南北に並ぶ2個の柱穴からは11世紀の土師器皿が出土した。この溝から出土した布目瓦は細かく破碎された固体が多い点から、11世紀代の整地に際して二次的に移動されたと考えられ、南門との位置関係等を考慮すると溝は当初の国分僧寺の南門に続く参道の西側側溝である可能性が高い。旧国分僧寺の変遷については、南北朝期に戦火により焼失したと伝承される以外にその実態は不明であるが、平成3年度の防火用水の工事（註－2）に伴い現在の寺域のすぐ西側でも、やはり11世紀代の南北方向の溝が確認されており、伽藍の衰亡に伴う寺域の縮小や整理がこの段階に行われた可能性が想定される。

（武田恭彰）

（註－1）岡山市教育委員会 乗岡実氏より御教示を得た。

（註－2）「国分寺防火用水建設に伴う確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』2 総社市教育委員会 1993年3月



第46図 調査地位置図 (S=1/2,000)

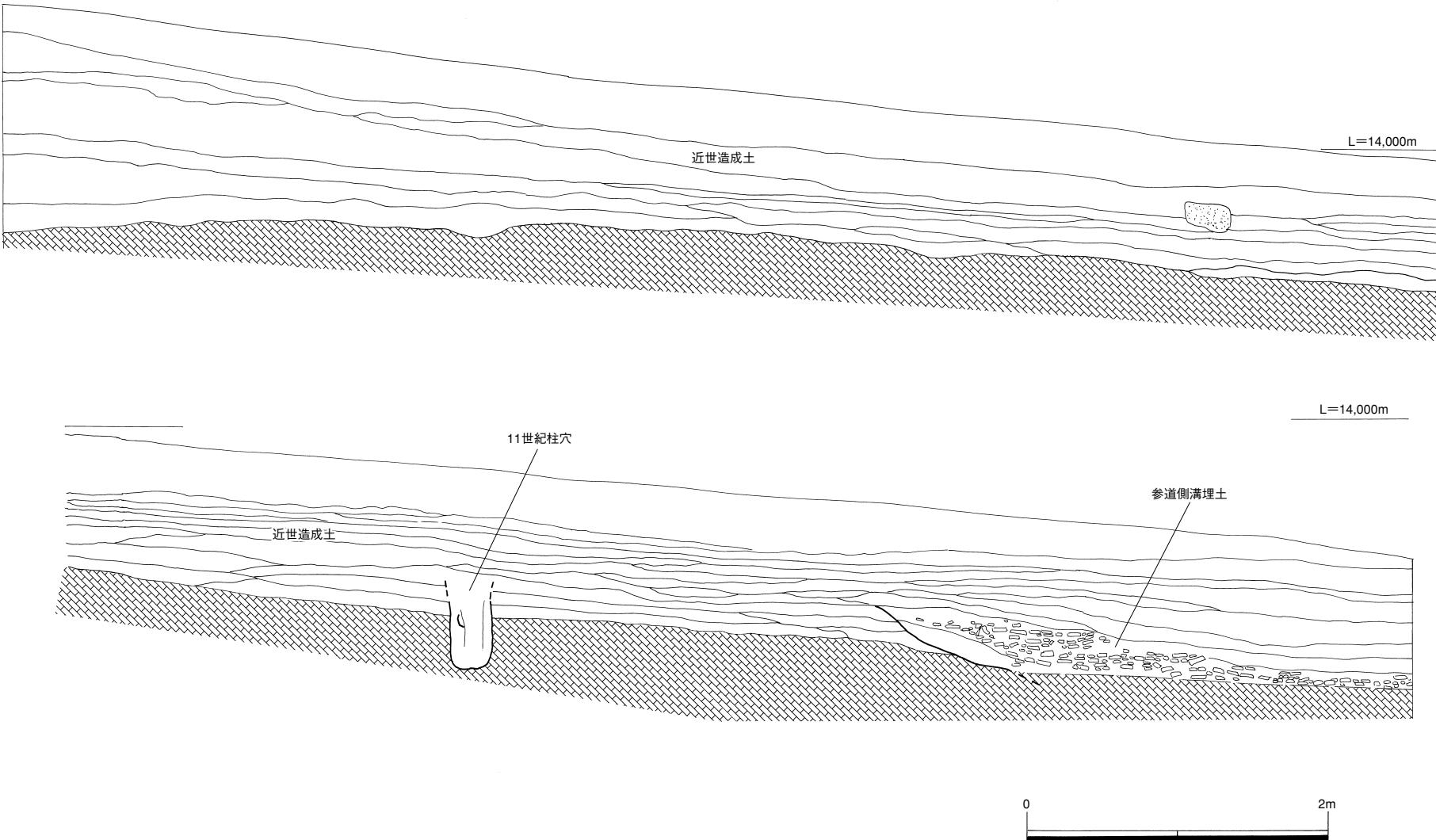


第47図版 参道（東から）



第48図版 参道西側調査区 南北溝（西から）

第49図 参道西侧調査区土層断面図 ($S=1/40$)



広告塔設置に伴う立会調査

所在地 井手字早溝596-1

調査期間 2009（平成21）年2月5日

調査概要

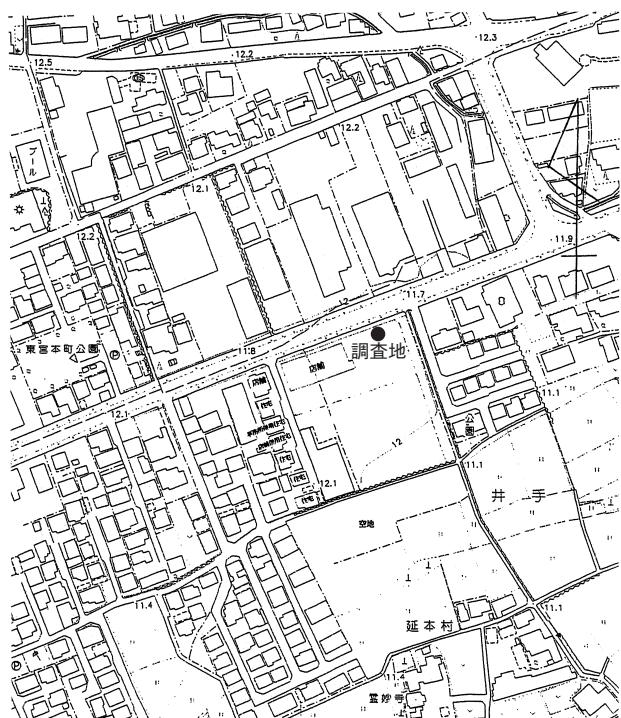
調査地は総社東中学校から東へ500m離れ、総社駅前線の南側に位置する。当地では店舗造成前にいて試掘調査がすでに実施されており、遺跡は確認されていないが、東へ約120m離れた交差点では清水角遺跡が存在するなど、微高地が複雑に形成されている。

今回の調査は広告塔の設置時に工事立会を実施したものである。広告塔の基礎は6m四方を深さ約1.8mまで掘り下がったが、土層観察によればグライ化した粘土層が厚く堆積していたため、柱状図を作成することにした。

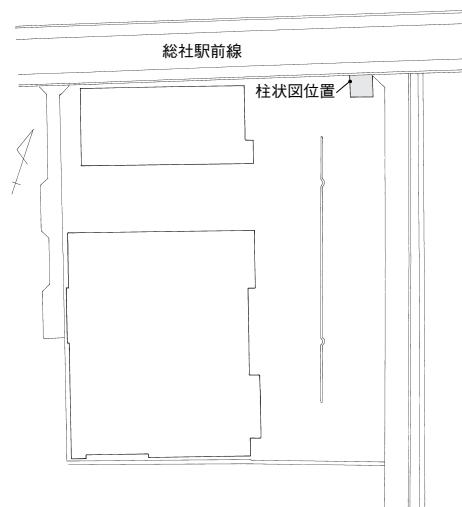
層序は1・2層が客土、3層以下が旧地形に伴う堆積である。4～7層は厚さ計1m以上の粘土で、4～6層は著しくグライ化が進行していた。5層では中世土器片が混入していたものの、遺構は認められなかった。

調査地の周辺には南西に旧河道を示す地割りがあり、当地へ延伸していたと見られ、グライ化した粘土層の堆積からみても当地は低湿地であることがわかった。

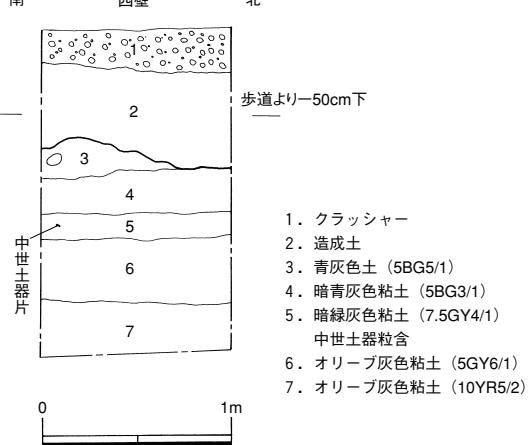
（松尾）



第50図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第51図 柱状図位置図 (S=1/2,000)



第52図 柱状図 (S=1/40)

携帯基地局建設工事に伴う確認調査

遺跡名 散布地

所在地 清音柿木字津輪198

調査期間 2009（平成21）年2月9日

調査概要

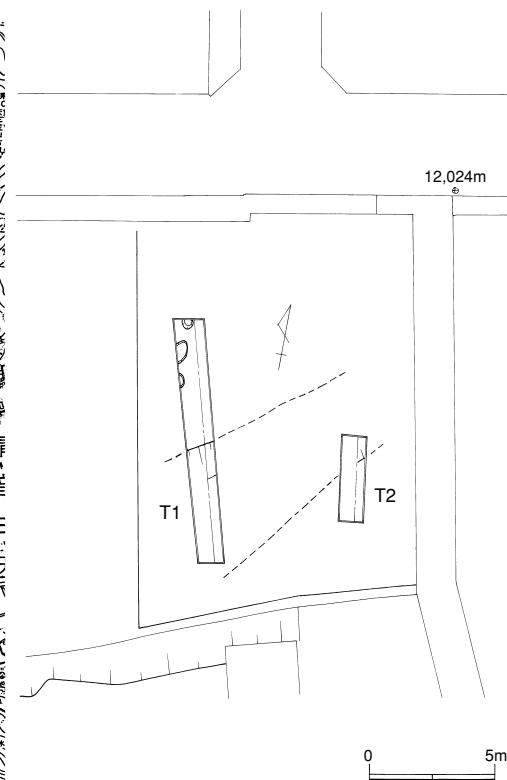
調査地は清音小学校より北東へ約25m離れた畠地で、「首切り地蔵」が所在する墓地のすぐ北側に位置する。

工事は畠地の東端を利用して携帯基地局の建設が予定され敷地内を約50cmかさ上げし、アンテナと周辺機器を設置することになった。現地は清音地区の畠地が一望に見渡せるが、古高梁川の乱流は幾筋も南流していたと考えられており、旧地形を復元するには調査データーが少ない状況にあった。そのため事前に確認調査を実施し、2本のトレンチを設定することにした。

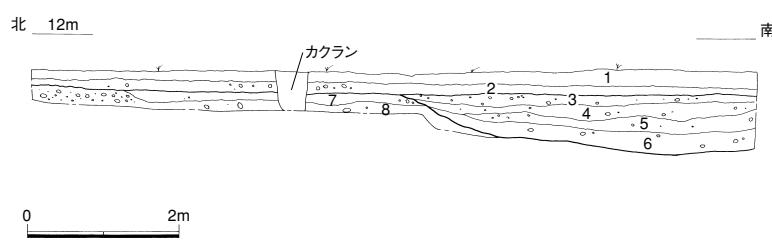
T1の層序は1層が耕土、2層は近世～近代の堆積層で弥生土器、土師器、須恵器、磁器などの小



第53図 調査地位置図 (S=1/25,000)



第54図 トレンチ配置図 (S=1/300)



1. 耕土
2. にぶい黄色砂質土 近世層
3. 灰褐色砂質土 (7.5YR4/2)
4. 灰褐色砂質土 (10YR5/2)
5. 褐灰色砂質土 (10YR5/1)
6. 褐灰色砂質土 (10YR4/1)
7. にぶい黄褐色砂質土
8. にぶい黄橙色砂 (10YR7/2)

第55図 T-1断面図 (S=1/100)

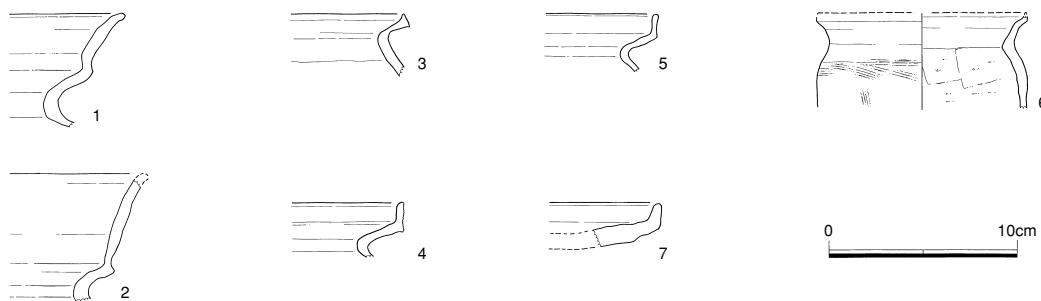
片を含み、7層の上面が遺構面となる。

平面検出ではT 1 の北半分でピットを3基検出し、内1基から平安時代の遺物が出土した。また、南半分では幅4.8m以上、深さ80cmを測る自然河道を確認し、褐色系の砂質土を主体にした埋土から以下の遺物が出土した。

図化できた遺物は弥生時代後期末葉の甕（3）と、古墳時代前期初頭の二重口縁壺（1・2），吉備型甕（4・5）があり、小形の甕（6）は口縁部がくの字に屈折し、端部をつまみ上げている。二重口縁壺（1・2）と甕（4～6）の色調は褐色系で、胎土には角閃岩を多く含み共通点が多い。

T 2 は河道の方向性を探るため東側に設定したもので河道の肩を検出した。これによって概ね北東から南西方向をとる河道であることが判明した。

確認調査の結果により、調査地を含む周辺には弥生時代後期～古墳時代前期と、古代の遺跡が展開していると見られる。
(松尾)



第56図 出土遺物 (S=1/4)

共同住宅建設工事に伴う確認調査

遺跡名 図ノ木遺跡

所在地 真壁902-5

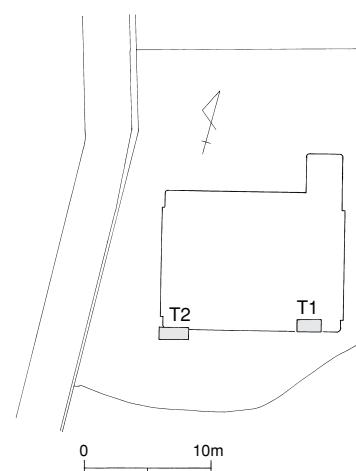
調査期間 2009（平成21）年2月16日

調査概要

調査地は総社駅から南へ約270m離れた畠地に位置する。調査地よりも東側の地形は低く北西から南東方向に流走する旧河道の地割が認められる一方で、西側は相対的に高い地形にある。当地では3階建ての共同住宅が建設中であったため、事業者の協力を得て確認調査を実施することにした。

調査は旧地形がわかるように東西の2ヵ所にトレントを設定した。T1の層序は1・2層が現在水田層、3～5層が中近世水田層で、6層の上面が遺構面であり、層中に炭・土器片を包含していた。6～8層は旧河道に向けての斜面堆積と考えられ、8層以下は砂層となっていた。T2の層序は3～5層が中近世の水田層で6層以下が斜面堆積となり、トレントの下位において微高地の肩を検出した。また、各トレントでは6層上面の中世遺構面において柱穴2基を検出したもの、遺構密度は薄い状況であった。

調査の結果、T2で微高地の肩を検出しT1では斜面堆積が確認できた。遺跡の本体は西側の巖島神社周辺に比定され、調査地は微高地東側の縁辺部にあたり、旧河道の埋積と安定化がすすむ、中世以降に遺跡が形成されたと考えられる。
(松尾)

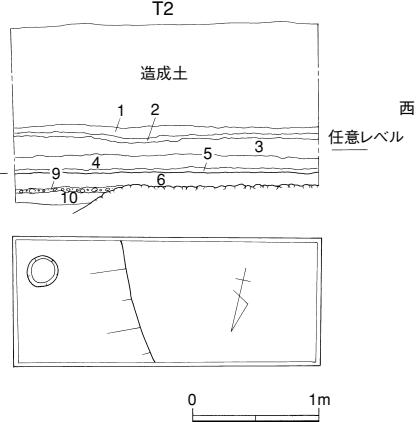


第57図 調査地位置図 (S=1/5,000)

第58図 トレント配置図 (S=1/600)

- 1. 耕土
- 2. 黄色粘土 (2.5Y7/8) 床土
- 3. 灰黄色粘質土 (2.5Y7/2) 中～近世水田
- 4. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3) 中～近世水田
- 5. 浅黄色粘土 (2.5Y7/4) 中～近世水田床土
- 6. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) 中世包含層
- 7. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2)
- 8. 黄灰色粘質土 (2.5Y5/1)
- 9. 黒褐色砂礫 (2.5Y3/1)
- 10. 灰黄色砂 (2.5Y7/2)
- 11. 黄褐色粘質土 (2.5Y5/3) 土器片混

第59図 各トレント平・断面図 (S=1/60)



民家擁壁工事に伴う立会調査

遺跡名 宿寺山古墳

所在地 宿

調査期間 2009（平成21）年3月10日～15日

調査概要

宿寺山古墳は総社市宿に所在し、備中国分寺とは旧山陽道を挟んで南に約600m、三須の作山古墳からは南東約1kmに位置している。本墳は後世の改変が進行し遺存状況は良くないが、全長114～116mと推定され、周溝を伴う大型の前方後円墳として著名であり、主軸をほぼ東西にして後円部を東、二段築成の前方部を西に置き、墳丘裾部の随所で葺石が認められる。

今回の立会調査は、前方部南側の一段目の平坦部に居を構える土地所有者が、宅地の老朽化した石垣をコンクリートの構造物擁壁に改修する工事に伴うもので、旧来の石垣を撤去するのみではなく、構造物の基礎工事に伴い法面の掘削を伴うため工事中に土層断面の観察を行った。

調査の対象地（第60図）は、想定される前方部南西隅から約10m程度墳丘内側に相当し、遺存する南辺南西隅から東へ30mと西辺2mの範囲で、重機により石垣を撤去した後に掘削予定ラインまでの垂直の法面精査を人力で行った。

この結果、調査対象地の内、東の三分の二は墳丘盛土が広い範囲で崩落し後世の宅地造成時に客土し石垣を築いているが、予想に反して前方部南辺南西隅付近の墳丘盛土と、西辺の葺石は良好に遺存していることが明らかになった。

この土層断面（第61図）で観ると、今回の調査対象地の基本的な地形は前方部南辺南西隅付近では花崗岩風化土の強固な基盤層と有機物が堆積した旧表土層の存在が確認されたが、後円部に向かって東に地形が下降していることが明らかになった。このため浅い谷状の低位部に相当する墳丘盛土は粘土化しており、墳丘を削平した現在の畑も常時湧水し湿潤な状態を示すことから、この旧地形が墳丘盛土が崩壊した主な原因となったであろうことは想像に難くない。

これに対し安定した基盤土に盛り上げた南西隅付近は旧表土を段状に削平し、細かい黄白色の粘質土と荒い真砂土を細かい単位で交互に固く締めており、ブロック状の低湿地の黒色粘土も多く含む作業単位も認められることから、周溝の掘り上げと平行して墳丘盛土を行ったと考えられる。

墳丘西辺の葺石は、竹根等の浸食により埋め込まれた盛土が風化しており直接的な関係を明確に把握できなかったが、転落して移動したのではなくほぼ原位置と考えられる状態である。

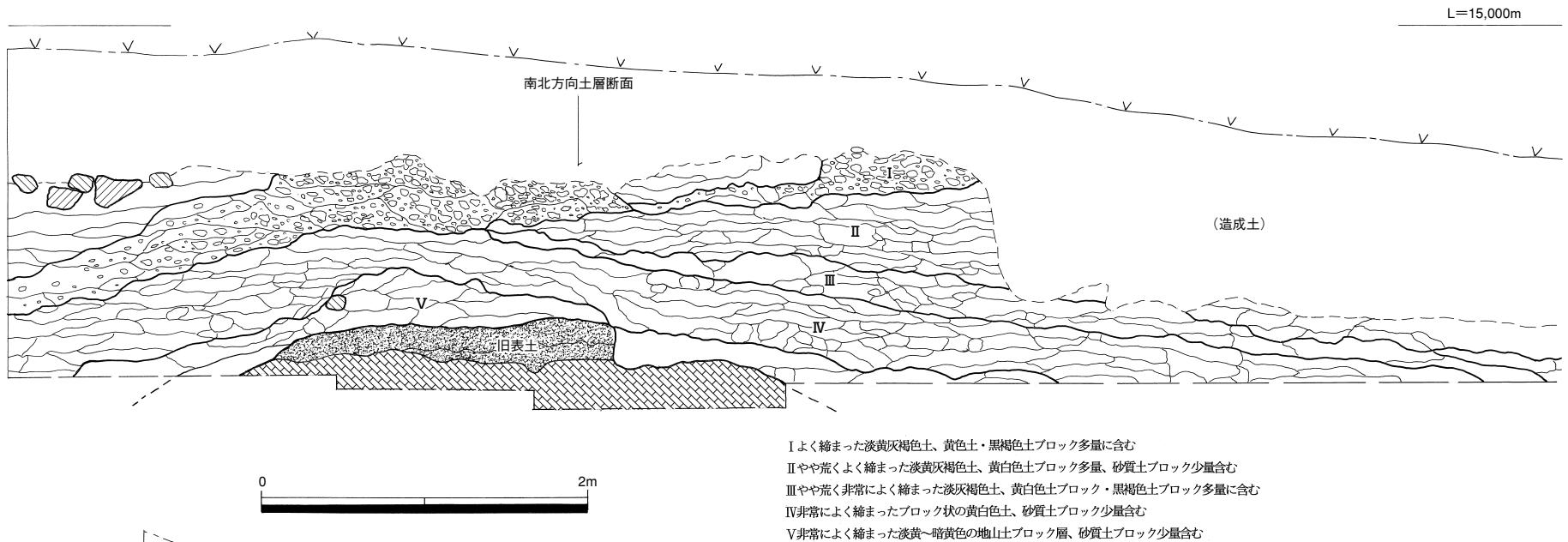
今回の調査に伴い出土した遺物は、全て崩落した造成土中からの埴輪の小片で、軟質の個体と須恵質の個体が混在して存在する傾向は従来採取された資料と同様である。

今回の調査成果は墳丘の築造工程のほんの一端である。しかし、墳丘全体で観ると後円部は低丘陵の端部に相当するためある程度旧地形を利用したと推定されるが、少なくとも前方部については旧地形を利用できない複雑に入り組んだ谷状の低位部に盛土をして築かれた可能性を示している。

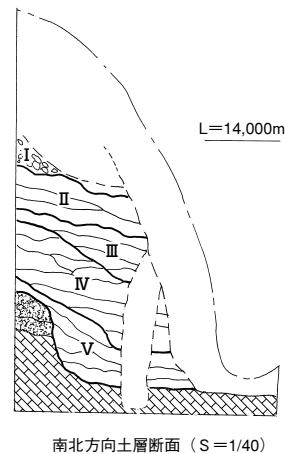
以上の点と幅30mを越える周溝や葺石の存在を併せて考えると、本墳の築造労力は非常に膨大なものであったと推定され、編年的に5世紀末葉に位置付けられる本墳の評価については単に墳丘の規模だけではなくより多角的な視点で再検討する必要があろう。(武田)



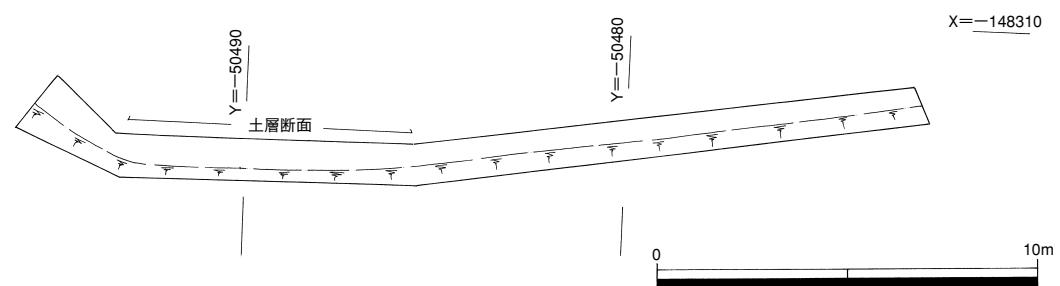
第60図 宿寺山古墳調査区位置図 (S=1/1,000)



第61図 宿寺山古墳墳丘土層断面図 (S=1/40)



第62図 宿寺山古墳調査区全体図 (S=1/200)





第63図版
調査地遠景（西から）



第64図版
墳丘盛土断面（南から）



第65図版
前方部西側斜面葺石
検出状況

3. 発掘調査の概要

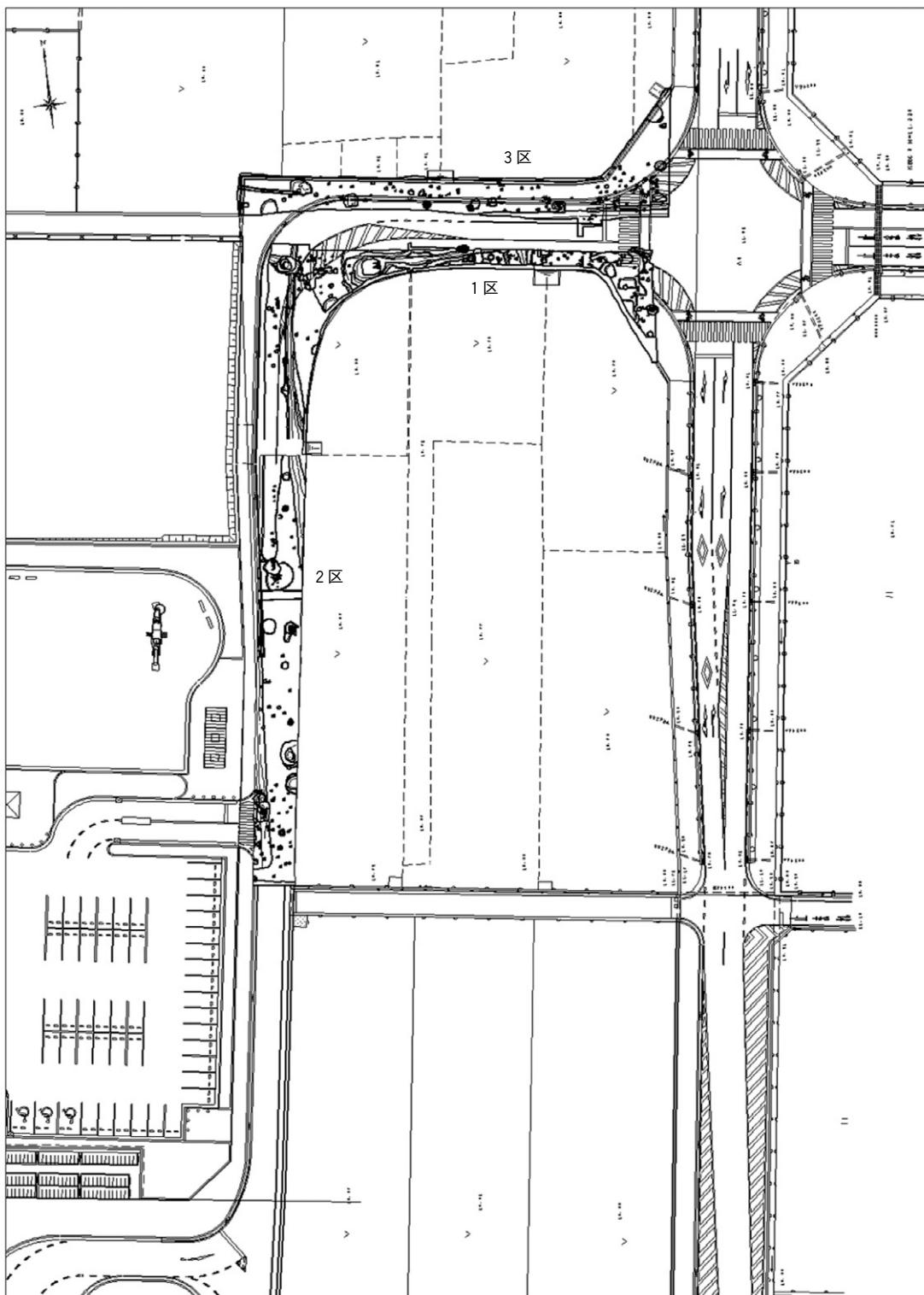
平成20年度 清音駅東地区整備事業に伴う発掘調査

遺跡名 下軽部遺跡

所在地 清音軽部1390-4ほか

調査期間 2009（平成20）年4月1日～6月7日

調査面積 910m²



第66図 調査地位置図 (S=1/1,000)

調査概要

(調査経緯)

遺跡は、下軽部遺跡として新規に発見された遺跡で、下軽部集落からの伯備線までの範囲を周知遺跡とした。遺跡の北側から東側には旧河道となる低い地形が認められ、調査地は遺跡の北端付近にあたる。

工事は、清音駅東側の広場に接続するための進入路工事で、既存道路の拡幅および新設道路である。

調査は、工事工程に合わせて、1～3区の調査区を設定し、平成19年度にはその1区を、平成20年度にはその2・3区について調査を行った。

1区の調査内容については、『総社市埋蔵文化財調査年報18』で概要報告している。2区は、1区の南側に続き、3区は、1区の北側になる。

(遺構・遺物)

検出した遺構は、溝、土坑、ピット、鍛冶炉などである。

溝は、1区で検出した、幅0.7～1.5m、深さ0.4mの規模の南北方向および東西方向の溝が、2・3区においても続していくことを確認した。さらに、2区で南北方向の、3区で東西方向の、溝を新たに検出した。この溝は、幅約2m、深さ約1mの規模で、直接その接続を調査区内では確認できていないが、同一の溝と判断した。

土坑はかなり多くの数が検出されたが、その性格のわかるものは少ない。1区で、径1m、深さ0.6mの規模で、埋土に骨片と円礫が落ち込んでいた土坑が数基、土壙墓（座棺）と考えている。また、1区で、1×2mの楕円形で中に20cm以下の円礫が多数入っていた土坑が、直線で等間隔に並んで検出され、3区においても同様な土坑が確認された。礎石据え付けための栗石を並べた土坑と思われ、礎石建物が存在したようである。

ピットも多数あるが、掘立柱建物になるものは調査区の幅がそれほどでないことから、1区でわずかに1棟が確認されたのみである。

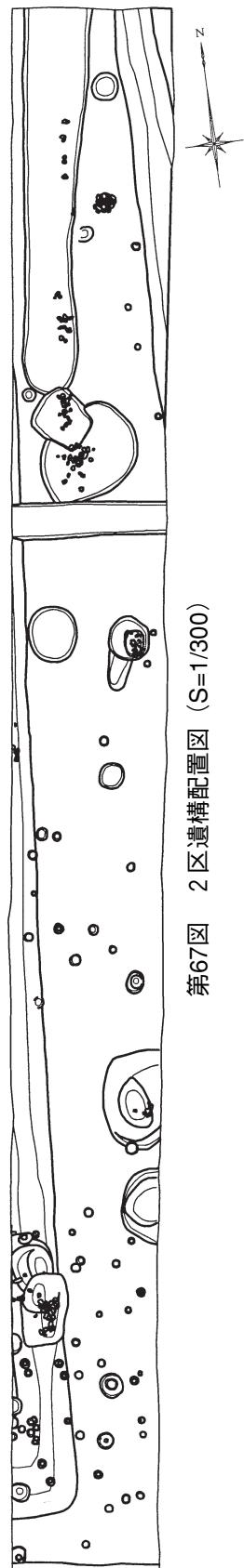
鍛冶炉は、1区の北西隅で検出された。東に延びた幅20cmほどの溝の取り付く、2～3mほどの不整形の窪みの中に、直径25cmの範囲で堅く・赤く焼けた面があり、その周りも直径30～40cmの範囲で赤色に変色した面が残されていた。この鍛冶炉は、1×3間の覆屋の中に入った。

出土した遺物は、須恵器、土師器・土師質土器、陶器、磁器などがあるが、とくに土師質土器が目立っていた。なお、遺物は未洗浄であるため、詳細は不明。

(まとめ)

検出された遺構は、それほど多いものではなかった。遺物も同様。

溝は1区の西半分に集中し、その溝は2区の北端から東南の調査区外へ流れている。この溝のほか、新たに2・3区で検出した溝があり、ほぼ東西溝と南北溝の結ばれる北西のコーナー部分が検出され、方形の屋敷溝であると判断した。屋敷溝は、2区の南端で溝が途切れ、西に張り出すようであり、ここが西の出入り



第67図 2区遺構配置図 (S=1/300)

口部分になる可能性が高い。入口が西辺の中央に設置されたと仮定すると、約100mの溝で囲まれる屋敷地が推測される。

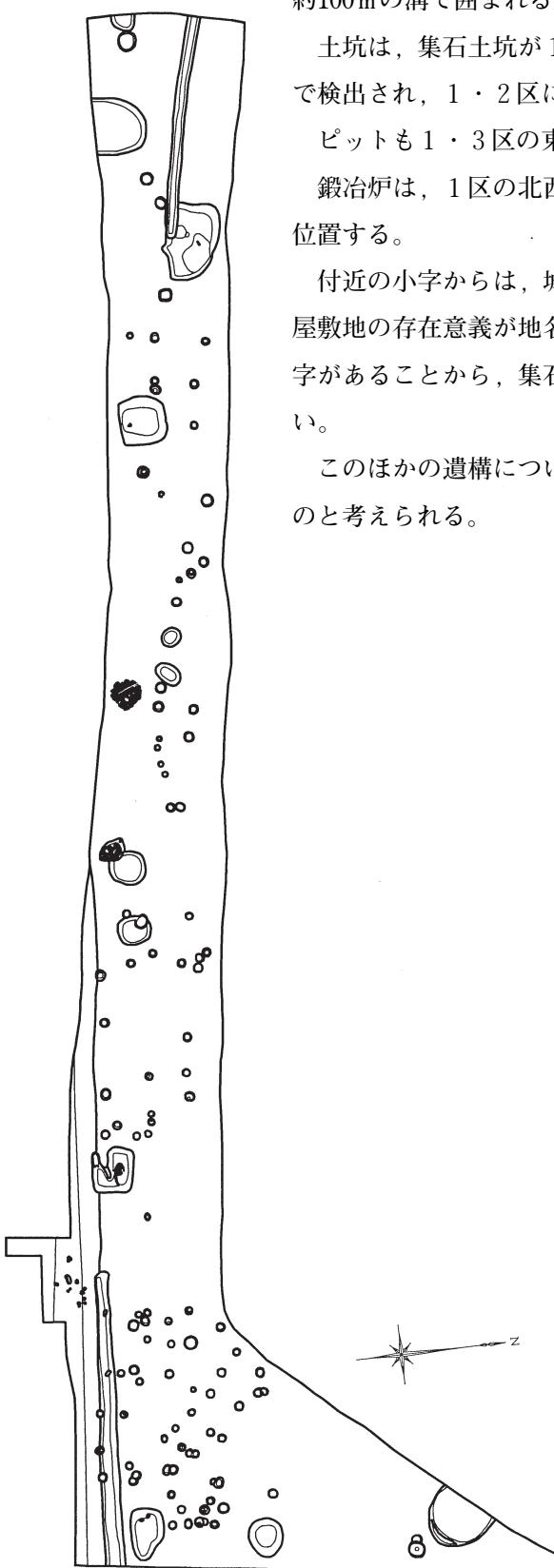
土坑は、集石土坑が1・3区の中央部分、土壙墓（座棺）は1区の北西端で検出され、1・2区に集中する傾向が認められた。

ピットも1・3区の東に集中している。

鍛冶炉は、1区の北西端で検出した。方形の屋敷溝の北西コーナー部分に位置する。

付近の小字からは、城之堀、城之内、城ノ北があり、鍛冶炉と方形区画の屋敷地の存在意義が地名から想像され、また、調査区の北側には菩提寺の小字があることから、集石土坑群が礎石建物として寺院関連となる可能性が高い。

このほかの遺構については集落というよりも耕作地としての性格が強いものと考えられる。
(前角)



第68図 3区遺構配置図 (S=1/300)



第69図版 2区屋敷溝検出状況



第70図版 3区屋敷溝の遺物出土状況

駅南区画整理事業に伴う発掘調査

遺跡名 三輪遺跡群

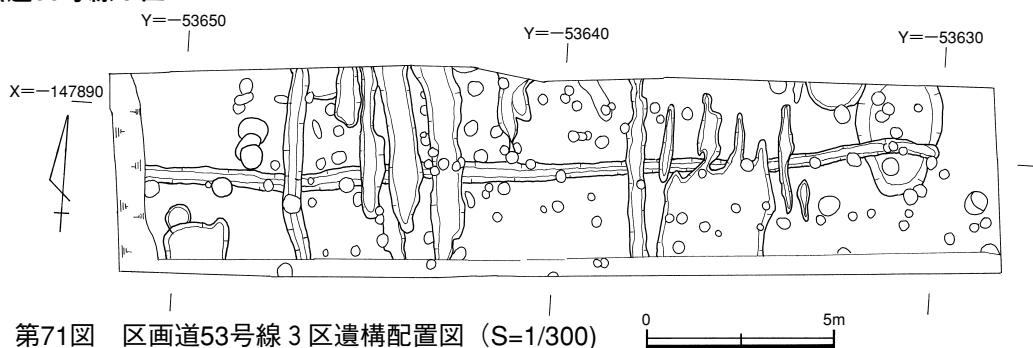
所在地 三輪地内

調査期間 2008（平成20）年4月9日～11月6日

調査概要

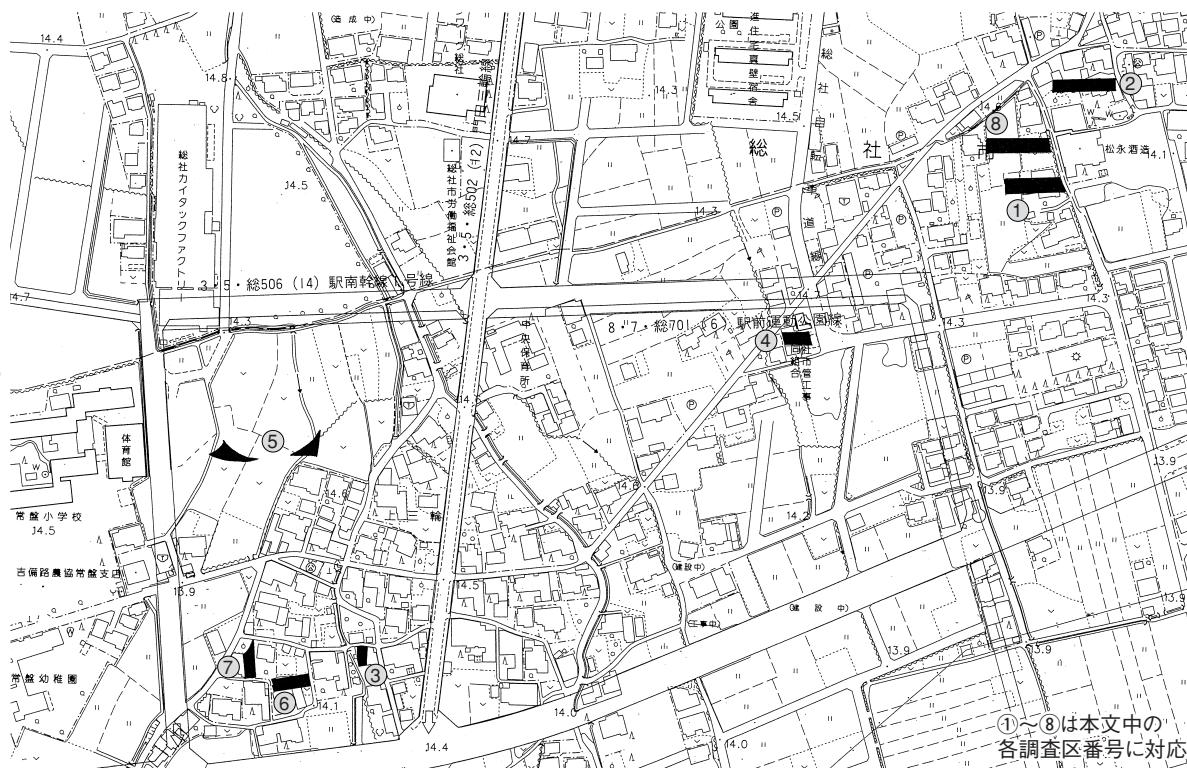
2008（平成20）年度の駅南区画整理事業に伴う発掘調査は、家屋の移転に合わせ中断を挟みながら、区画道53号線3区、区画道49号線、区画道18号線4区、区画道57号線、常盤公園施設予定地、区画道19号線2区、区画道14号線、区画道50号線の順で実施した。以下各調査区の概要を記す。

①区画道53号線3区



第71図 区画道53号線3区遺構配置図 (S=1/300)

2007年度に本調査地の西隣地を発掘しており、今回の調査でもその時の調査結果とほぼ同様であった。遺構検出面は標高14m弱と、周辺の遺跡群に比べると高く、微高地の中心付近に位置していると推定されたが、1・2区と比べるとやや低くなっている。ベース層である暗灰（茶）褐色土層の



第72図 調査地位置図 (S=1/5,000)

上には20~30cmの厚さに中・近世水田層が堆積していた。検出された主な遺構は弥生時代~中世にかけての柱穴138・溝2・土壙7であり、柱穴のなかには建物様の並びをみせるものもあったが、道路幅が狭く全容を明らかにすることができなかった。

②区画道49号線

今年度の調査区では、一番北東に位置しており、幅2m弱と狭い調査区であった。微高地上であるが、調査区西端では砂礫堆が遺構検出面で認められた。柱穴2のほかに大小の溝6が北西方向から南東方向に切り合って検出された。

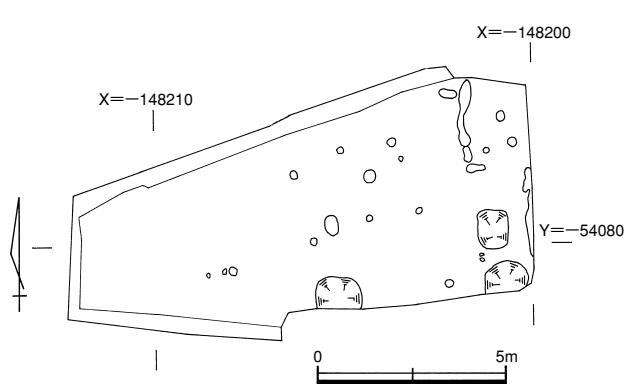
③区画道18号線4区

基盤層は淡橙灰色のやや脆弱な土層で、その上に約20cmの中・近世水田層が認められた。

遺構密度が薄く、検出されたのは柱穴12、土壙1、溝状遺構4のみで、出土した遺物も少量であるが、古代~中世にかけてのものであった。



第73図版 区画道49号線完掘（西から）



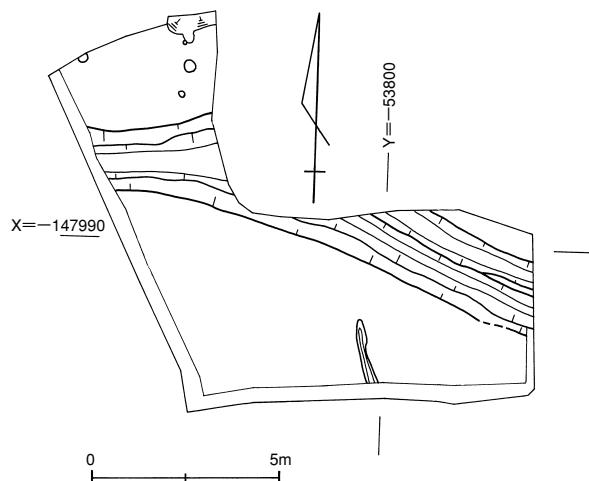
第74図 区画道18号4区遺構配置図（S=1/200）

④区画道57号線

旧耕作土層の下に15~20cm程度の中・近世水田層があり、その下からやや軟質の（暗）灰青（黄）色土になっている。調査区のほぼ中央で検出された幅2m弱~3mの溝からは、弥生時代後半と推定される尖底土器底部が出土している。

⑤常盤公園施設予定地

東側建物予定地では、茶灰褐色の微砂層の低湿地土層と考えられるベース層上に近世以降と考えられる水路に伴う木杭列が検出された。

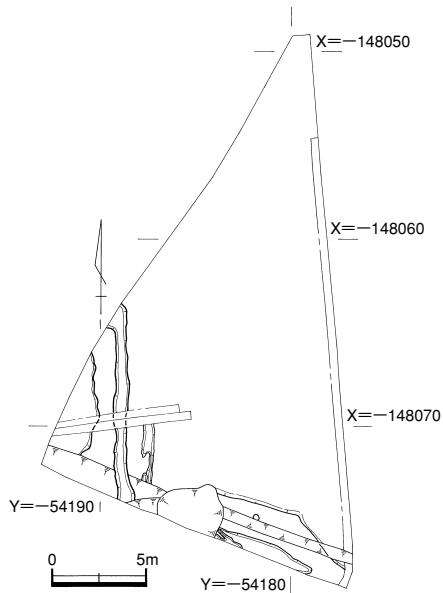


第75図 区画道57号線遺構配置図（S=1/200）

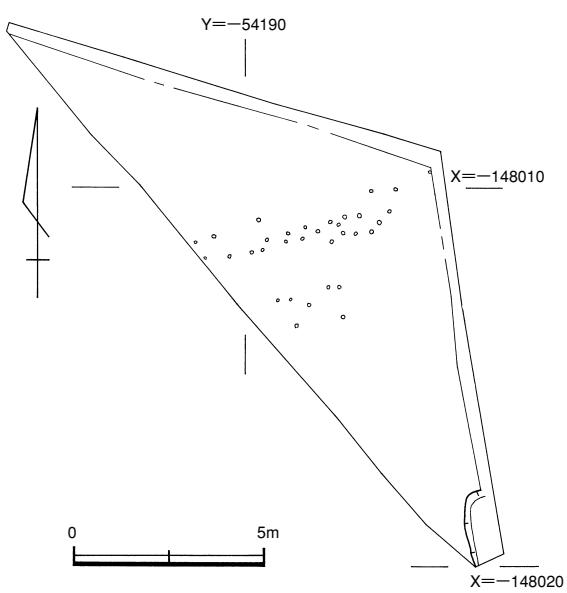


第76図版 区画道57号線完掘（北西から）

西側建物予定地でも、中世まで低湿地であったと推定され、撓み状の遺構1・溝状の遺構1・柱穴1が検出されたのみである。



第77図 常盤公園施設予定地西側調査区遺構配置図 (S=1/400)

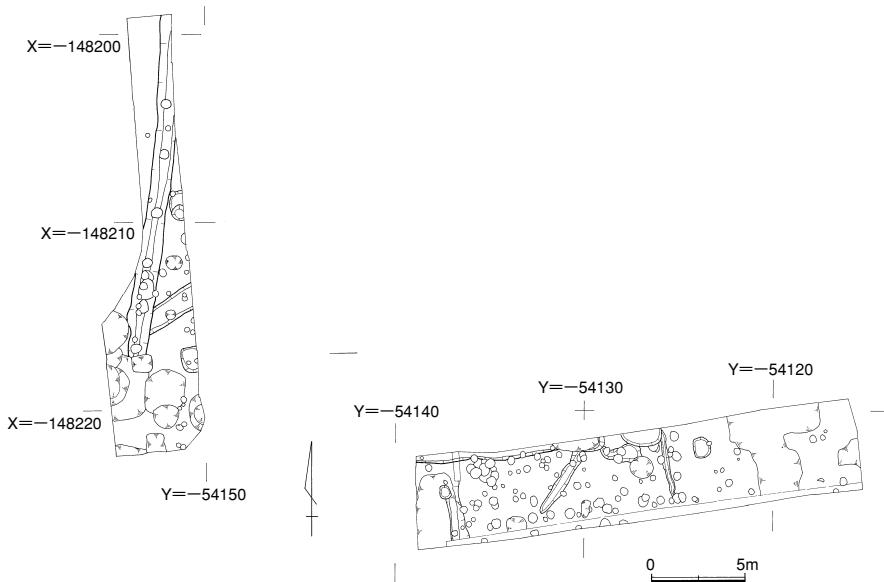


第78図 常盤公園施設予定地東側調査区遺構配置図 (S=1/200)

⑥区画道19号線2区

柱穴約100、土壙4、溝状遺構3等が検出された。柱穴は古墳時代～中世にかけてのものであったが中世のものが多かった。柱穴の中には約10m×(3)mにわたって調査区外に延びる囲いのように並ぶものも認められ、屋敷地の囲みのような性格を持つ可能性もある。

また中世の鉢形土器の内部に小皿・壺形土器を並べた遺構や、土師質土器群も検出されており、墓か地鎮の可能性が高いと考えられる。



第79図 区画道14号線・区画道19号線2区遺構配置図 (S=1/400)

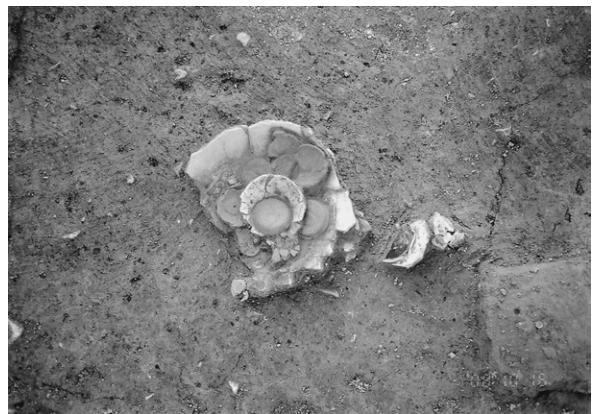
⑦区画道14号線

溝2、土壙3、柱穴42等が検出された。このうちほぼ調査区の中央で検出された溝1内には弥生時代末～古墳時代初頭の土器片が入る柱穴がほぼ等間隔に並んで検出され、布掘りの建物の可能性も

考えられたが、調査区が狭く明らかにすることは出来なかった。土壌は弥生時代後期のものと考えられる。



第80図版 区画道19号線2区（西から）



第81図版 区画道19号線2区地鎮か（東から）



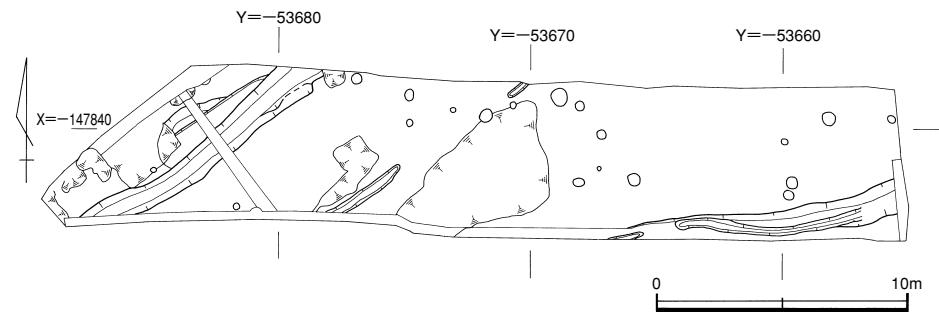
第82図版 区画道14号線（北東から）



第83図版 区画道50号線（東から）

⑧区画道50号線

水田耕作土層の下に最大20cm程度の厚さの（暗）茶灰褐色土層の客土と推定される土層が認められ、その下は茶灰褐色のベース層になっている。この微高地のベース層上から南西方向から北東方向に流路をもつ溝2のほか土壙1、柱穴20個が検出された。
(高橋)



第84図 区画道50号線遺構配置図 (S=1/300)

国府川改修工事に伴う発掘調査（5）

遺跡名 御所遺跡

所在地 総社市金井戸御所

調査期間 2008（平成20）年5月10日～7月31日

調査概要

平成20年度の国府川改修に伴う御所遺跡の発掘調査は、前年度に引き続き一町四方の方形居館北側に広がる集落跡と、居館廃絶後に開発された水田跡で、改修工事に抵触する約600m²（第85図）の調査と、方形居館外郭大溝の西北隅が想定される民有地（第85図）での確認調査を行った。

改修工事に伴う調査区は幅15m、長さ40mで、現在の国府川の流路に平行する形で設定し、人力で耕作土と地上げの造成土の掘り下げを行った。厚さ約30cmの炭・焼土を含むブロック状の黒褐色の造成土中にはまとまった量の土師器と鉄滓が含まれており、その器形組成と時期から近世の地上げに際して周囲より高い状態で遺存していた方形居館内を削平して客土としたと推定される。

造成土を除去した段階で中世後半～近世とみられる淡灰色の水田層が広がる状況が検出され、さらに約20cm下層で近世陶磁器を含まない砂質の淡灰色水田面が確認された。

この水田面の精査の段階で基盤層を削り残した畦畔と溝（第86図）が検出されたが、調査区東半の基盤層が下降する低位部（旧河道）では明瞭に確認できなかった。これらの畦畔に区画された水田耕土は調査区南端のS D 06より南の一段高く残る前年度の調査区では確認されていない。また、水田耕土除去後の鋤床面に削平された柱穴が検出されたことから、集落の廃絶後の水田開発に際して水利等の利便を考慮し、微高地を地下げして水田化したと考えられる。

また東西方向の土層（第87図）からみて、居館や集落の存続期には機能していた湿地状の低位部（旧河道 S D 0 4）も水田開発時に微高地を削平して埋められたと考えられ、埋土の上層にはブロック状の基盤土、下層には集落から廃棄された土器・磁器が含まれている。

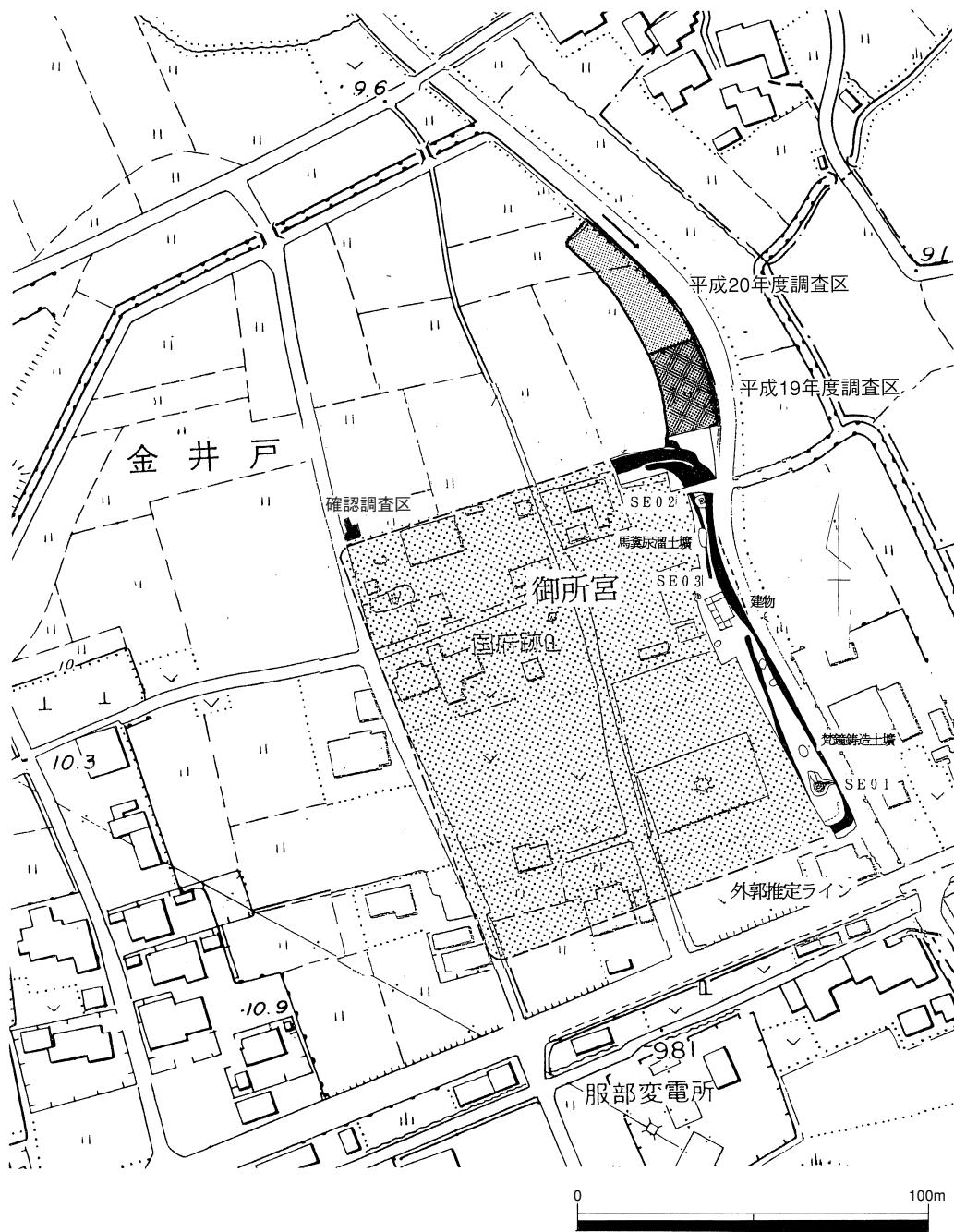
出土した遺物は時期的には方形居館の存続時期の所産であるが、それらの器種組成は前年度に調査したS E 0 5と同様に、一般的な集落の生活に伴う煮炊具や磁器が多く認められ、居館内から出土した土器資料とは様相を異にする。

今回の調査区で最も注目されるのは、集落が立地する微高地を削平した水田の畦畔（第86図）が検出された点である。検出された畦畔は、基盤層を削り出した幅80～280cmのほぼ方位に合致したもの（第86図・畦畔A～G）、畦畔の間は1.5～2.5mの小区画水田である。

この水田面は微高地縁辺に沿って基盤層に掘られた南北方向の数条の溝に切られており、溝は荒い洪水砂で埋まり溝と同じ方向の砂溜まり状の窪みもみられる。東西方向の土層（第87図）でもこの溝に対応する水田層にやはり洪水砂が含まれることから、一帯の水田は度々洪水により浸食され、畦畔の方向を変えながら復旧を繰り返したと推定される。

この洪水と復旧の段階で削平・埋没した畦畔A～Gで区画された小区画水田は幅2.5～1.4mしかないが、南北方向の調査区西壁の土層断面からみて同じ面の水田であることは確実である。しかしながら、B～Gの東西方向の畦畔は基盤層を削り残しているため明確に検出できたが、直交する畦畔は水田耕土中に確認できず、西側からの掛け流しによる水田経営が行われていたものと推定される。

今回の調査区で確認された水田跡は、御所遺跡の方形居館とその周囲の集落が廃絶した後に時間を



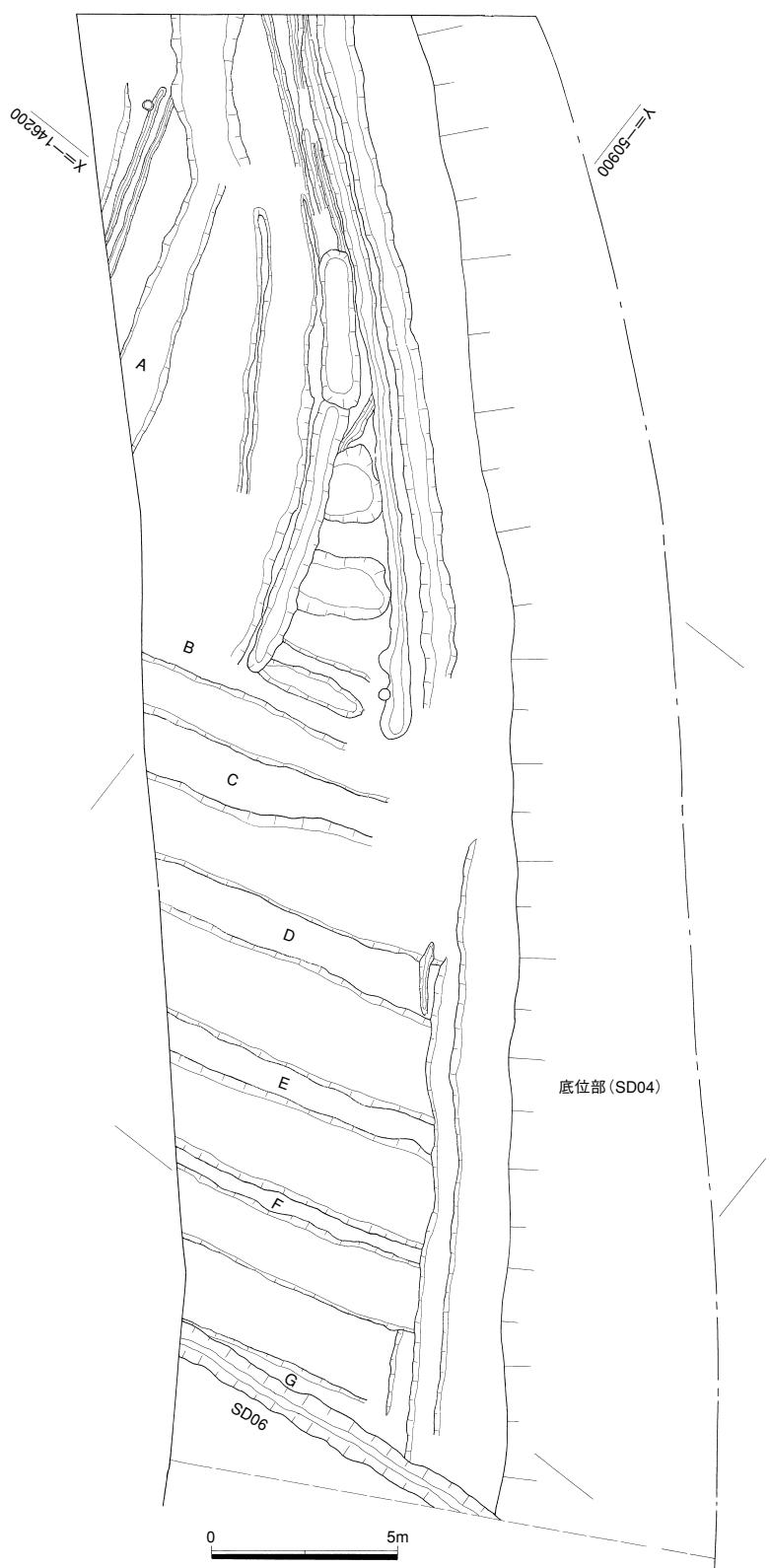
第85図 御所遺跡調査区位置図 (S=1/2,000)

置かずにつくられたと考えられるが、新たに微高地を削平した水田の畦畔の方位が方形居館の外郭大溝の方位と異なる点は、方形居館一帯の地割り方位が水田開発時に刷新されたことを示している。

御所遺跡が含まれる中世の服部郷については、13世紀に成立したと考えられる「備中國賀陽郡服部郷図」(以下「服部郷図」)に条理プランにもとづく方格図に田畠面積や所有者の詳細な記載があり、そこに描かれた地割りの現地比定については多くの先学の論考がある。

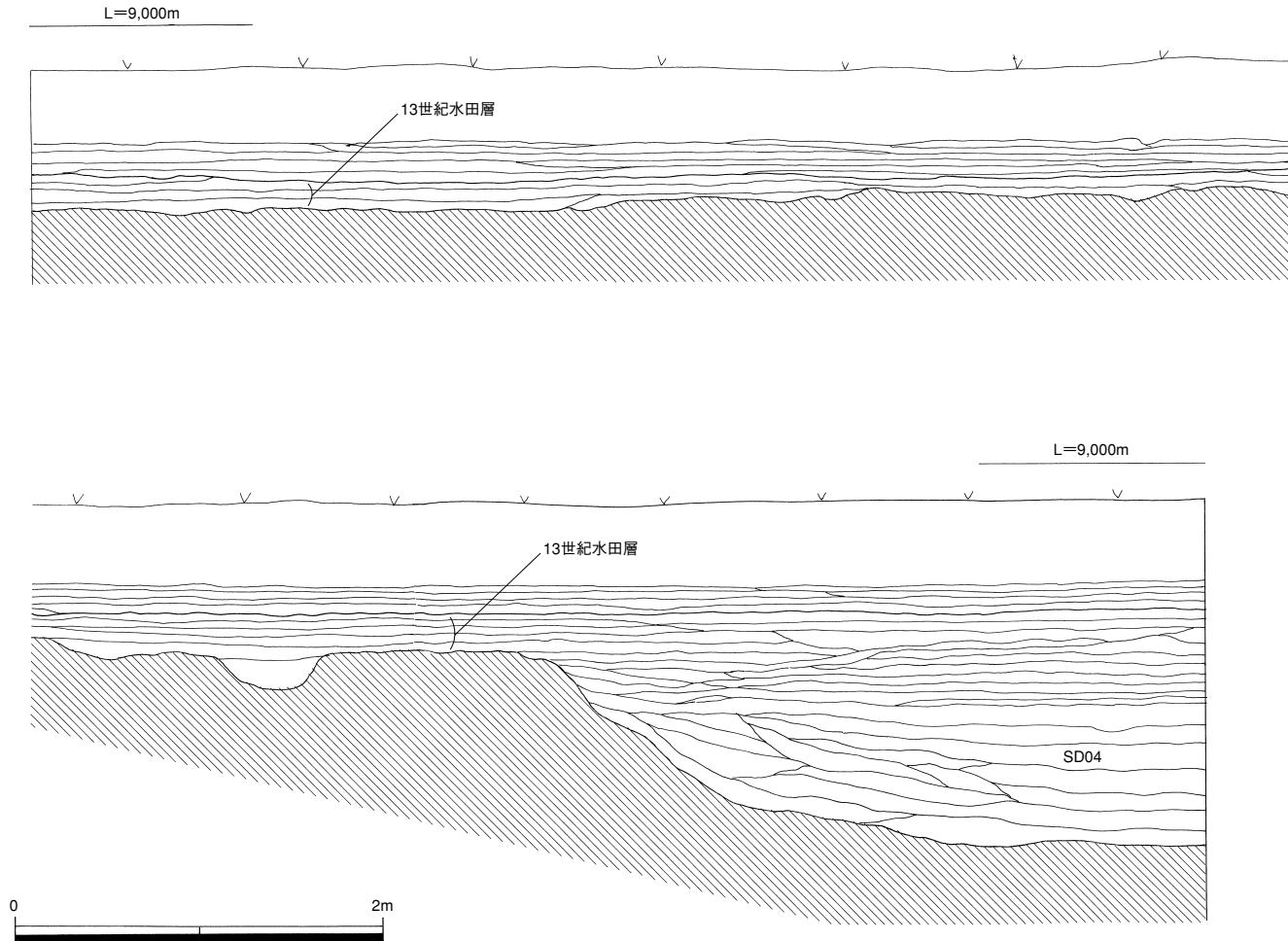
今回の調査で確認された水田畦畔は微高地を削平した土層断面等から推定して、時期的に「服部郷図」に描かれた水田地割りに近い時期の所産である可能性が高いと考えられる。

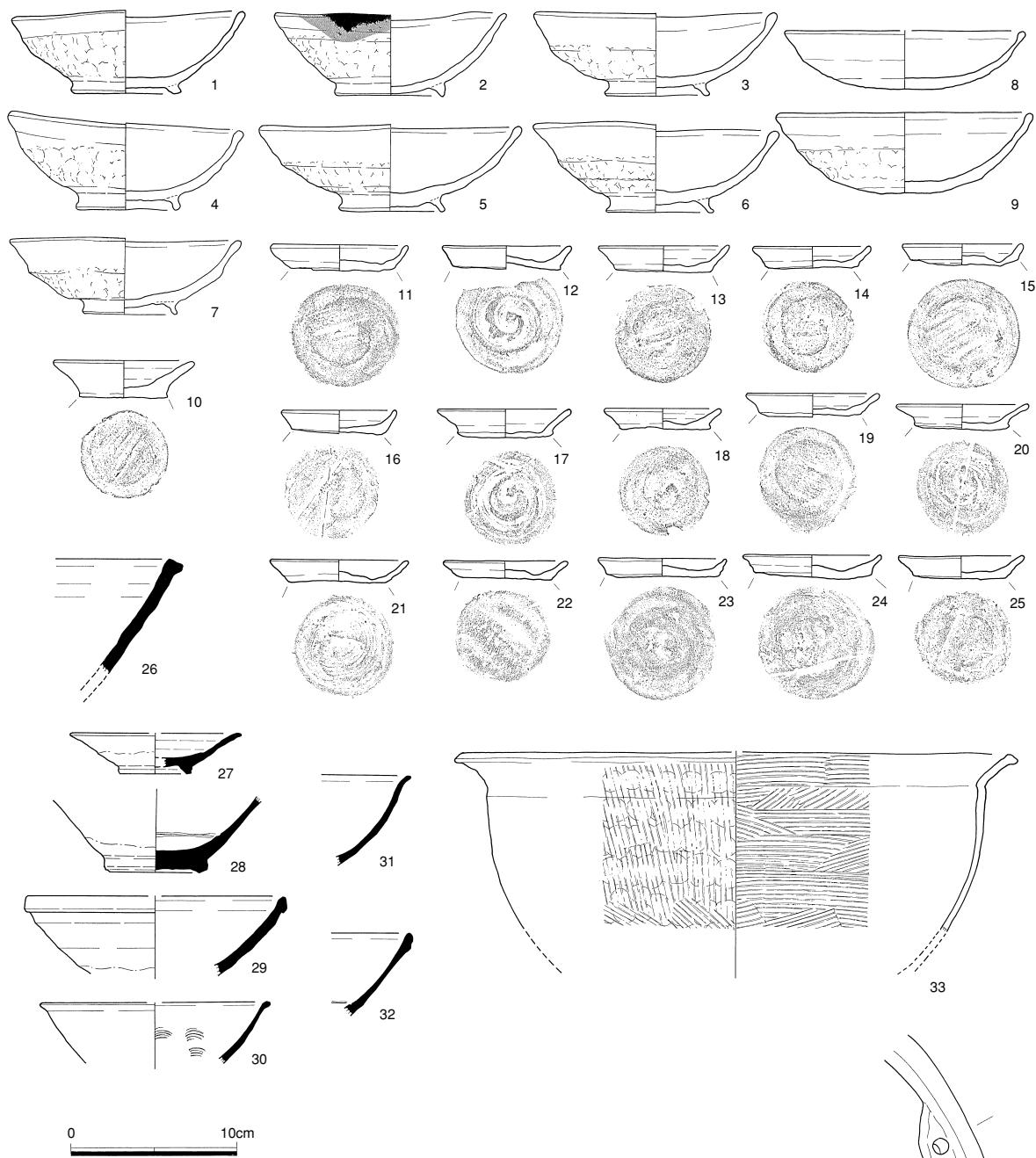
この点を踏まえてあらためて「服部郷図」に描かれた方格の現地比定についての最新の研究成果



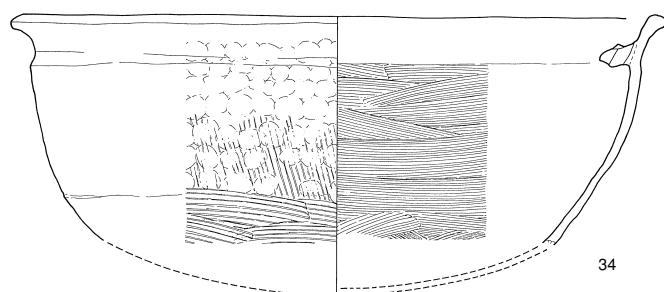
第86図 御所遺跡遺構配置図 (S=1/200)

第87図 御所遺跡東西方向断面図 (S=1/40)

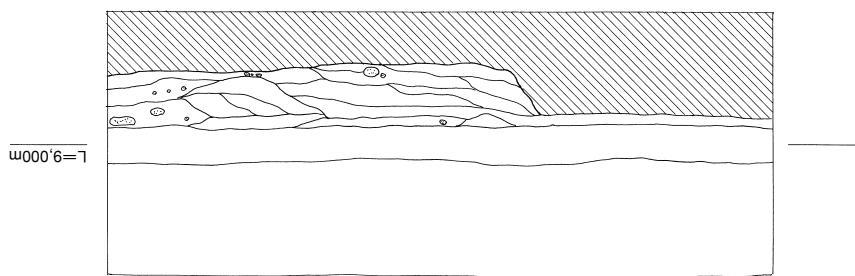
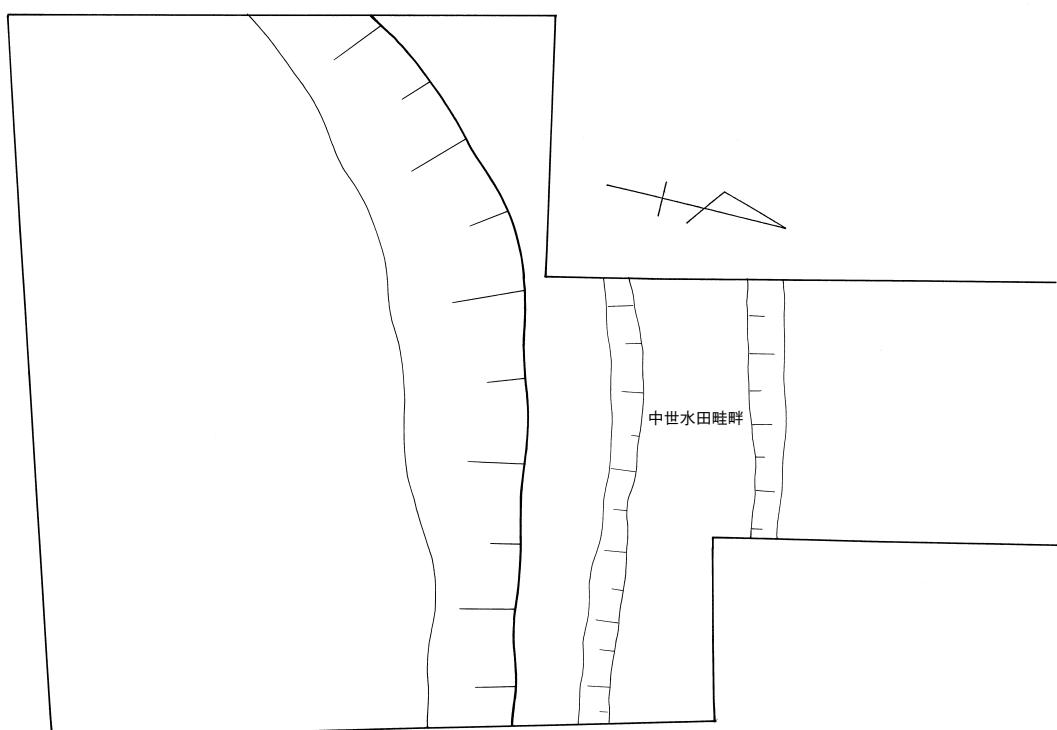
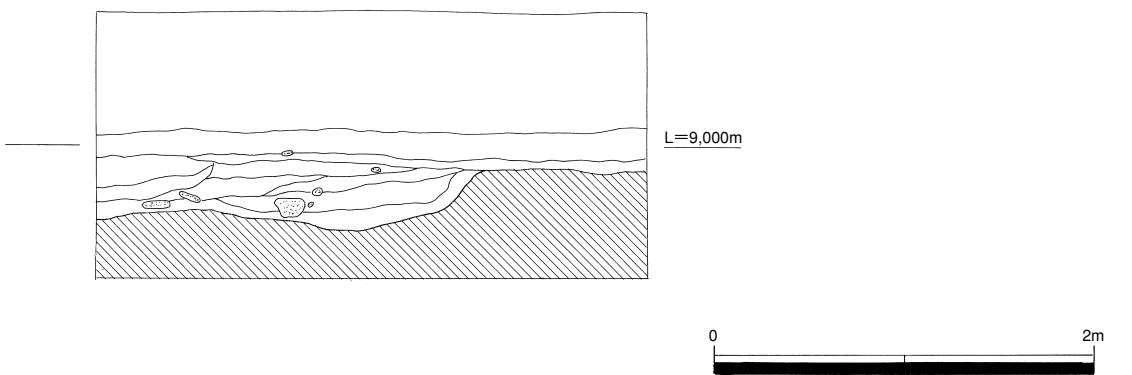




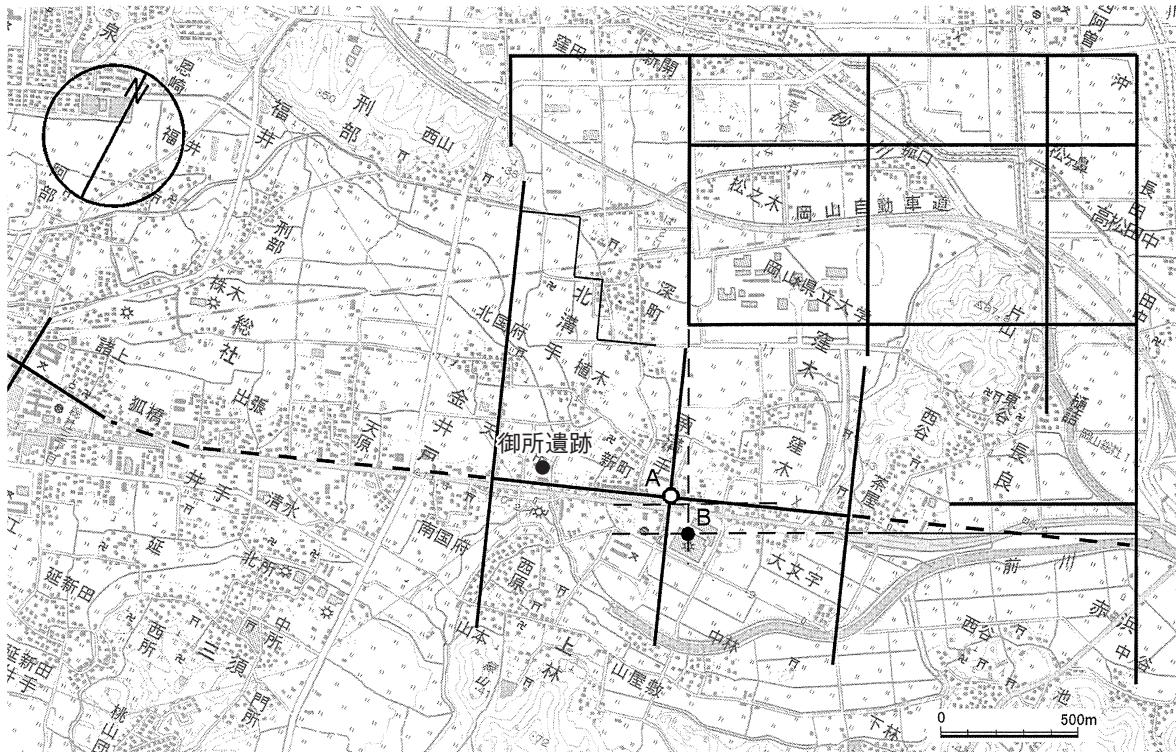
- 1 ~ 7 …土師器椀B
 8 · 9 …土師器椀A
 10…土師器杯C
 11~25…土師器皿A
 26…須恵器鉢（束縛）
 27~32…青白磁
- 1 ~ 33…SD04出土
 34…SD07出土



第88図 出土遺物 (S=1/4)



第89図 御所遺跡確認調査区大溝平面図・土層断面図 (S=1/40)



第90図 「服部郷図」作図原理（註一より）

(第90図) (註一) と対照すると、A～Gの畦畔は調査区付近に想定される地割り方向と一致し、検出された畦畔が「服部郷図」の方格地割りに描かれた水田である可能性が高いと考えられる。

のことと、新たな水田開発により旧政治勢力の方形居館の地割りを刷新した点、さらに服部郷が国衙領であったことを併せて考えると、「服部郷図」が作図された背景には新政治勢力主導の新たな開発時に、土地所有関係等の刷新について明確に記録する目的が存在したと想定することができる。

以上の見解については、近年増加した推定服部郷域での他の調査例とのさらなる対比・整合が必要であるが、今回の調査結果からみて一町四方の方形居館の廃絶と直後の旧来の地割りを一新した開発には、古代から中世へという歴史的背景の転換を想定することが現時点では最も妥当であろう。

方形居館の外郭大溝の西北隅の確認を目的とした確認調査は、現況の地割りから西北隅が想定される民有地の資材置き場で約20m²の調査区（第89図）を設定して掘り下げた。

調査区は旧水田に盛土をして造成されており、厚さ60～70cmの造成土と近世水田層と薄い淡灰色の中世水田層を除去した段階で砂質の基盤層に掘られた礫を多く含む落ち込みを確認した。

この落ち込みの検出レベルは標高8.8～8.9mで、方形居館の北辺外郭大溝や東辺の造成面とほぼ同じであるが、西にやや高くなる地形が災いして後世の削平が激しく、溝とみられる落ち込みの残存する深さは20～30cm程度である。今回の確認調査は範囲が限定されていたため大溝とみられる落ち込みの幅は不明であるが、平面形態・土層断面（第89図）とその位置からみて、東方向から伸びる大溝が南に屈曲する方形居館の外郭大溝の北西隅に相当する可能性が高いと考えられる。その仮定の場合、方形居館の北辺の長さはほぼ100mとなり、東辺より若干短くなると推定される。 (武田)

(註一) 「地理情報システムを用いた歴史的地域景観復元のための技術的検討」 新納泉編 岡山大学大学院社会文化科学研究科
2008



第91図版
水田畦畔（南から）



第92図版
水田畦畔（北から）



第93図版
確認調査区大溝検出状態
(東から)

常盤幼稚園園舎増築に伴う発掘調査

遺跡名 真壁遺跡群

所在地 真壁 773-1

調査期間 2008（平成20）年6月18日～7月14日

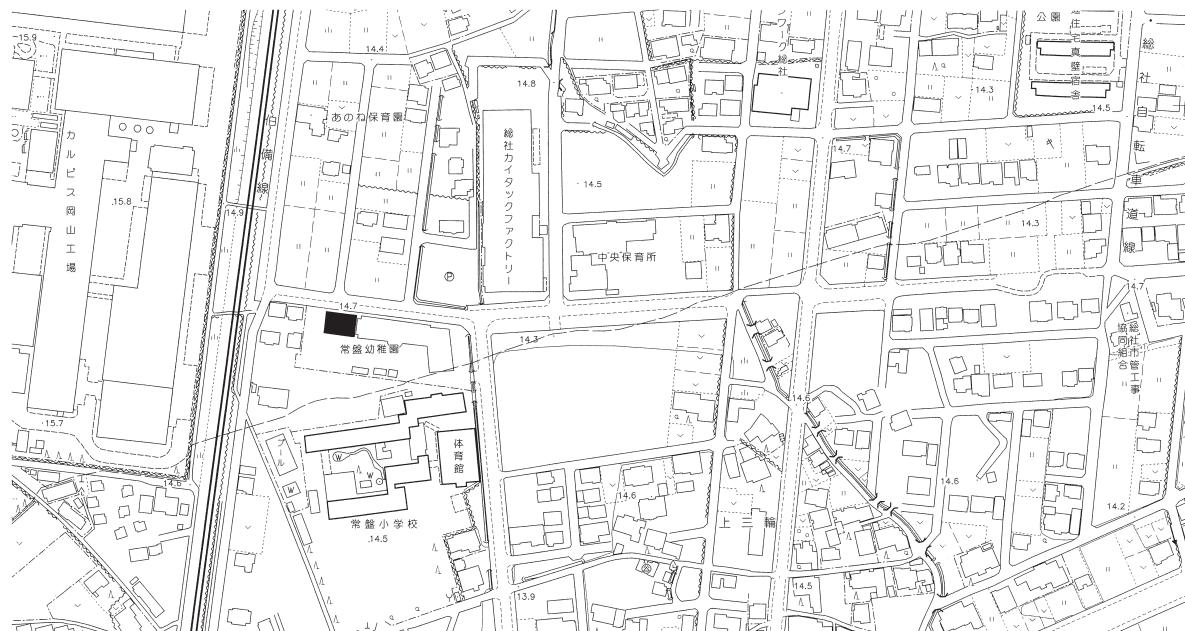
調査概要

今回の発掘調査は、常盤幼稚園の就園児童数の増加が予想をはるかに上まわったため、園舎の増築が不可避となったことから実施することとなった。調査地は既存の園舎の西隣りに位置しており、弥生時代等の古い時期の遺構の存在が期待されたが、微高地が高く残っていたのは調査区の東端付近のみで、おそらく中世以降の新田開発によって微高地端部を削って地下げが行われていたことが明らかになった。地下げの境に溝が作られ、溝以西は砂礫層まで削られて水田となっていた。

既存の常盤幼稚園園舎の調査は、1998年度と1999年度に行われている。発掘調査の結果、当該地は、中洲状の微高地上に位置しており、園舎部分の西半は縄文時代前期以前に形成された古い微高地上に、東半は古墳時代以降に形成された比較的新しい微高地上にあたることが判明した。園舎の西半では弥生時代の住居址・貯蔵穴・土壙・溝・柱穴の他、微高地の西側斜面に、旧河道の方向に沿って掘り込まれた溝・古墳時代の住居址・柱穴等が検出されている。なかでも古墳時代の隅丸方形の住居址には拡張が認められ、弥生時代中期の溝が埋まった後に作られていたことが確認された。園舎の東半では古代～中世を中心とする柱穴・土壙・火葬墓・鍛冶炉等が検出されたが、幼稚園敷地の東に隣接する駅南幹線の調査で確認された平安期の遺構等は確認されなかった。

遺物は地下げで削られた斜面の堆積から、弥生時代中期～後期にかけての長頸壺や甕の破片に混じって比較的残りの良い小型丸底壺・手捏ね土器・甕・少量の須恵器破片が出土しているが、ごく少量の近世土器が含まれており、5世紀を中心として形成された遺構を近世に切って地下げが行われたと推定される。

(高橋)



第94図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第95図 常盤幼稚園園舎増築予定地遺構配置図 (S=1/200)



第96図版 遺構完掘状況（西から）



第97図版 微高地の下がり完掘状況（南西から）



第98図版 微高地の下がり南壁断面（北から）



第99図版 微高地の下がり内遺物出土状況
(西から)

4 . 発掘調査の報告

かんばら
上原遺跡発掘調査報告

目 次

1.はじめに	67
2.調査の体制	69
3.発掘調査の概要	69
4.検出遺構	69
5.まとめ	88

図・図版目次

第100図 調査地位置図 (S=1/5,000)	67	第126図 袋状土壙 断面図 (S=1/80)	89
第101図 調査地周辺図 (S=1/400)	68	第127図版 人面土器	90
第102図 全体図 (S=1/100)	70	第128図 各種の人面表現	91
第103図 土層断面図 (S=1/60)	70	第129図版 調査地全景 (南から)	96
第104図 竪穴住居1 平面図 (S=1/40)	71	第130図版 調査地全景 (南西から)	96
第105図 竪穴住居1, 方形土壙, 溝1, 袋状土壙 断面図 (S=1/40)	71	第131図版 確認調査 (西から)	97
第106図 竪穴住居1 出土遺物 (S=1/4)	71	第132図版 人面土製品出土状況 (北西から)	97
第107図 建物1 平・断面図 (S=1/60)	73	第133図版 竪穴住居1 (南から)	97
第108図 建物2 平・断面図 (S=1/60)	73	第134図版 建物1 (北から)	97
第109図 袋状土壙1 平・断面図 (S=1/40) 及び 出土遺物 (S=1/4)	73	第135図版 建物2 (東から)	97
第110図 袋状土壙2 平・断面図 (S=1/40)	74	第136図版 袋状土壙1 (北から)	97
第111図 袋状土壙2 出土遺物 (S=1/4・1/2)	74	第137図版 袋状土壙1 完掘 (北から)	97
第112図 袋状土壙3 平・断面図 (S=1/40) 及び 出土遺物 (S=1/4・1/2)	75	第138図版 袋状土壙2 (南から)	98
第113図 袋状土壙4 平・断面図 (S=1/40) 及び 出土遺物 (S=1/4)	76	第139図版 袋状土壙2 完掘 (南から)	98
第114図 袋状土壙6 平・断面図 (S=1/40) 及び 出土遺物 (S=1/4)	77	第140図版 袋状土壙3 (南から)	98
第115図 袋状土壙6 出土遺物 (S=1/4)	78	第141図版 袋状土壙4 (南から)	98
第116図 土壙1 平・断面図 (S=1/40) 及び 出土遺物 (S=1/4)	79	第142図版 土壙1 (東から)	98
第117図 土壙2 平・断面図 (S=1/40)	79	第143図版 方形土壙, 溝1, 袋状土壙6 (南西から)	98
第118図 方形土壙 平・断面図 (S=1/40) 及び 出土遺物 (S=1/4)	79	第144図版 袋状土壙6 (西から)	98
第119図 火堀, 柱穴 平・断面図 (S=1/20・1/40) 及び出土遺物 (S=1/4)	81	第145図版 方形土壙 (北から)	99
第120図 溝1 平・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物 (S=1/4)	82	第146図版 溝1 (北から)	99
第121図 溝2 平・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物 (S=1/4)	83	第147図版 溝1 遺物出土状況 (東から)	99
第122図 溝2 人面土製品 (S=1/3)	85	第148図版 溝2 (北西から)	99
第123図 調査地2 平・断面図 (S=1/40・1/20)	86	第149図版 P 2 (南から)	99
第124図 遺構に伴わない遺物 (S=1/4・1/2)	86	第150図版 調査区2 (北から)	99
第125図 上原遺跡模式図 (S=1/25,000)	88	第151図版 竪穴住居2 炉 (南から)	99
		第152図版 人面土製品展開	100
		第153図版 出土遺物	101
		第154図版 溝1 石器剥片	102
		第155図版 袋状土壙2 石鏃と剥片	102
		第156図版 袋状土壙3 石鏃と剥片	102
		第157図版 袋状土壙3 磨石	102
		第158図版 土壙 石器剥片	102
		第159図版 袋状土壙6 砥石	102
		第160図版 遺構検出面 石鏃と剥片	102
		第161図版 遺構検出面 砥石	102

表 目 次

第9表 編年対比表	87	第11表 土器観察表	94
第10表 上原遺跡の変遷	88		

1. はじめに

調査地は総社市の中央を流れる高梁川の西岸にあたり、上原地区に所在する雇用促進住宅の東側に位置する。上原遺跡は高梁川に沿い、上原から富原にかけて弓なりに形成された自然堤防が、拡大発達し、遺跡が形成されたものである。自然堤防より西側は高梁川による後背湿地であると共に、新本川との合流地点もある。

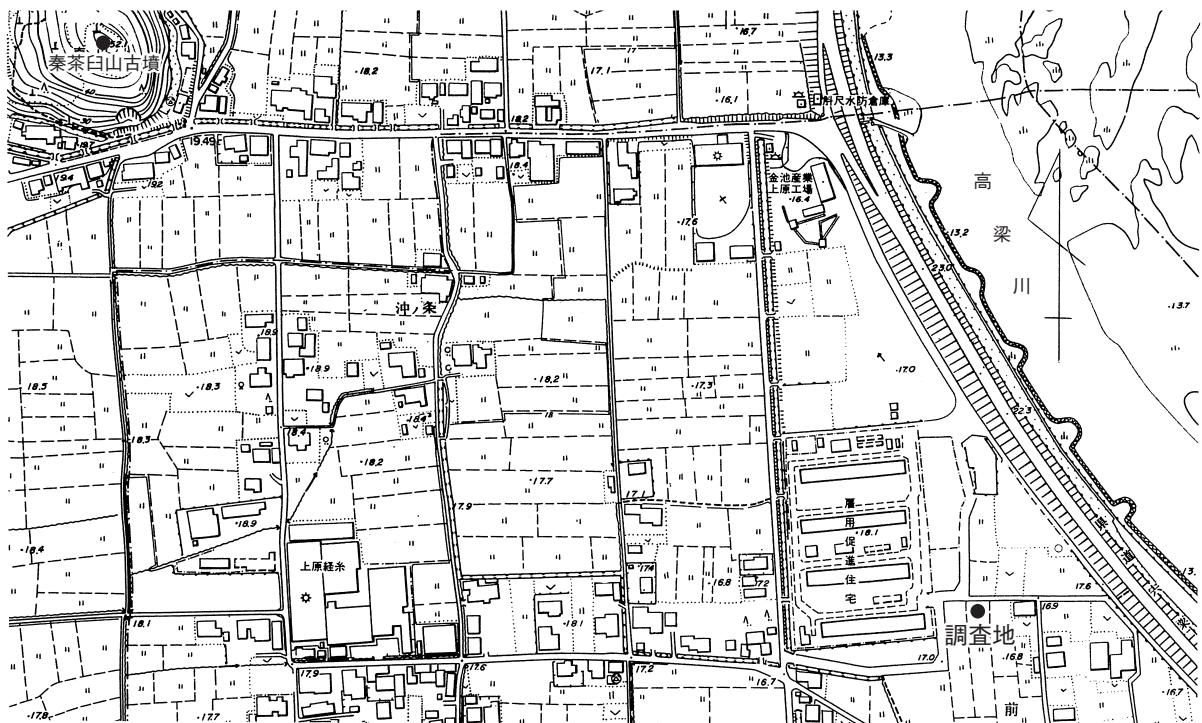
上原遺跡の北端に位置する調査地は、現況が水田で埋蔵文化財包蔵地の散布地に含まれており、このたび携帯電話基地局が建設されることになった。

基地局建設前にはKDDI(株)の代理者としてNECネットエスアイ(株)と埋蔵文化財の取り扱いについて協議があった。建築計画では敷地内に約40cmの厚さで盛土し、局舎などの周辺機器を設置する予定であるが、鉄塔部分については約9m四方を深さ2.2mまで掘り下げて基礎を打設するため、掘削時に埋蔵文化財に影響を及ぼすことが懸念された。そのため、事業者と土地所有者の承諾を得て、2月10日に確認調査を実施することにした。

確認調査は鉄塔部分の南辺にトレーナー（試掘坑）を設定したところ、ほぼ耕作土直下から建物の柱穴、土壌、溝と共に土器が出土した。同じく敷地内の引き込み柱の位置に小さなトレーナーを設定したところ、竪穴住居が1軒と土壌が確認され（調査地2）、当地の一帯に一連の遺構が検出される可能性が高くなった。こうした状況から、遺跡に影響を及ぼす鉄塔部分ほかについては、現状保存が困難なため発掘調査が必要という結論になり、平成21年3月2日から着手することで合意に達した。

そのため、平成21年2月17日付けで岡山県教育委員会教育長宛に文化財保護法第93条に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」を提出し、平成21年3月6日付けで文化財保護法第99条の「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を提出した。

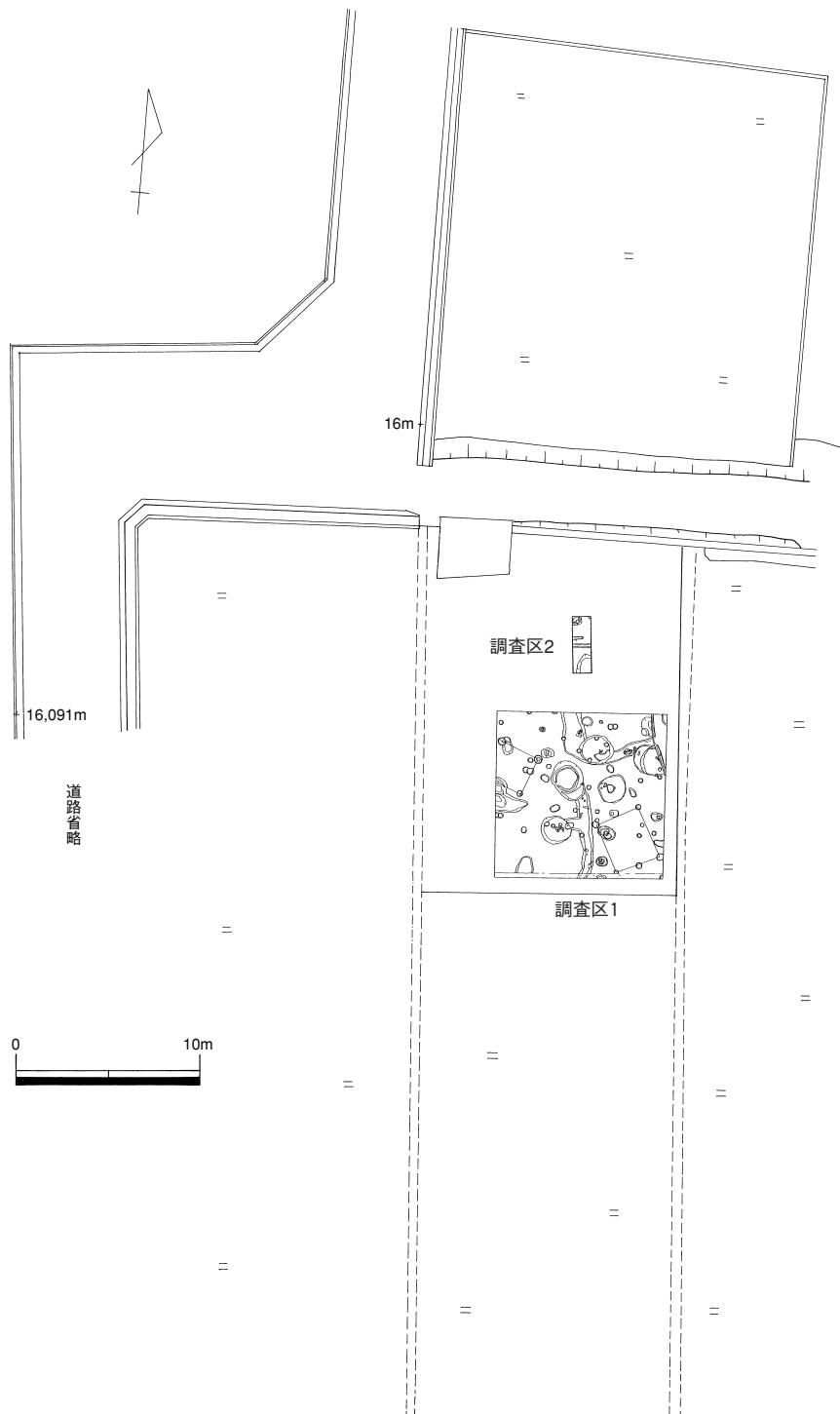
以上の経緯をもとに携帯電話基地局建設に伴う発掘調査は平成21年3月2日から3月19日にかけて



第100図 調査地位置図 (S=1/5,000)

実施し、調査終了後は平成21年3月25日付けで文化財保護法第108条及び遺失物法第13条に基づき、埋蔵文化財保管証及び埋蔵文化財発見届を岡山県教育委員会教育長と、総社警察署長あてに提出した。

また、調査終了後の4月8日に遺物を洗浄していたところ、弥生時代前期の人面土製品を発見した。全国的にも希な遺物のため、今後、展示貸し出しの増加が見込まれることから、平成21年度中に保存処理とレプリカの作成を実施することにした。そして、文化財保護法第107条の規定により、岡山県教育委員会あてに埋蔵文化財譲与申請を行い、平成21年10月26日付けで整理箱7箱分の出土遺物が総社市教育委員会に譲与された。



第101図 調査地周辺図 (S=1/400)

2. 調査の体制

発掘調査は岡山県教育委員会の指導助言のもとに平成21年3月2日から19日にかけて実施した。

調査組織

教 育 長	乗田交三
教育次長	加藤信二
文化課長	荒木泰行
主 幹	谷山雅彦
課長補佐	武田恭彰（確認調査担当）
主 任	松尾洋平（調査、報告担当）
整理作業	田中富子 犬飼真弓

発掘調査の報告にあたり、下記の方々には有益なご教示をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。（順不同、敬称略）

金関恕、設楽博己、正岡睦夫、亀田修一、赤司善彦、合田幸美、米田克彦、武智泰史

3. 発掘調査の概要

発掘調査は鉄塔本体部分を調査区1、引き込み柱設置箇所を調査区2とした。検出した遺構は竪穴住居2軒、掘立柱建物2棟、袋状土壙6、土壙4、火處2、柱穴ほか32基、溝2条である。

遺構は調査地の全域で検出し、弥生時代後期前葉の袋状土壙が集中的に営まれている。また、調査区1の北東部では溝1→方形土壙→袋状土壙6→竪穴住居1の順で切り合いが確認できた。

出土遺物は各袋状土壙から弥生土器壺、甕、高坏、サヌカイト剥片、石鏃、砥石などが出土し、方形土壙からも弥生時代中期中葉の甕などが出土している。これらの他にも溝1、溝2から弥生時代前期の壺、甕などが出土している。

層序は耕作土以下が、遺跡の形成された基盤層（にぶい黄橙色粘質土）で、層上面から多数の遺構を検出した。遺跡の消長としては弥生時代前期、中期、後期、古墳時代前期の遺構・遺物があり、弥生時代後期前葉に盛期を迎えていることが判明した。

以下で説明する土器編年については、「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127」『津寺遺跡5』の編年対比表に準じ土器は番号を、石器は番号の前にSを付した（註1）。

4. 検出遺構

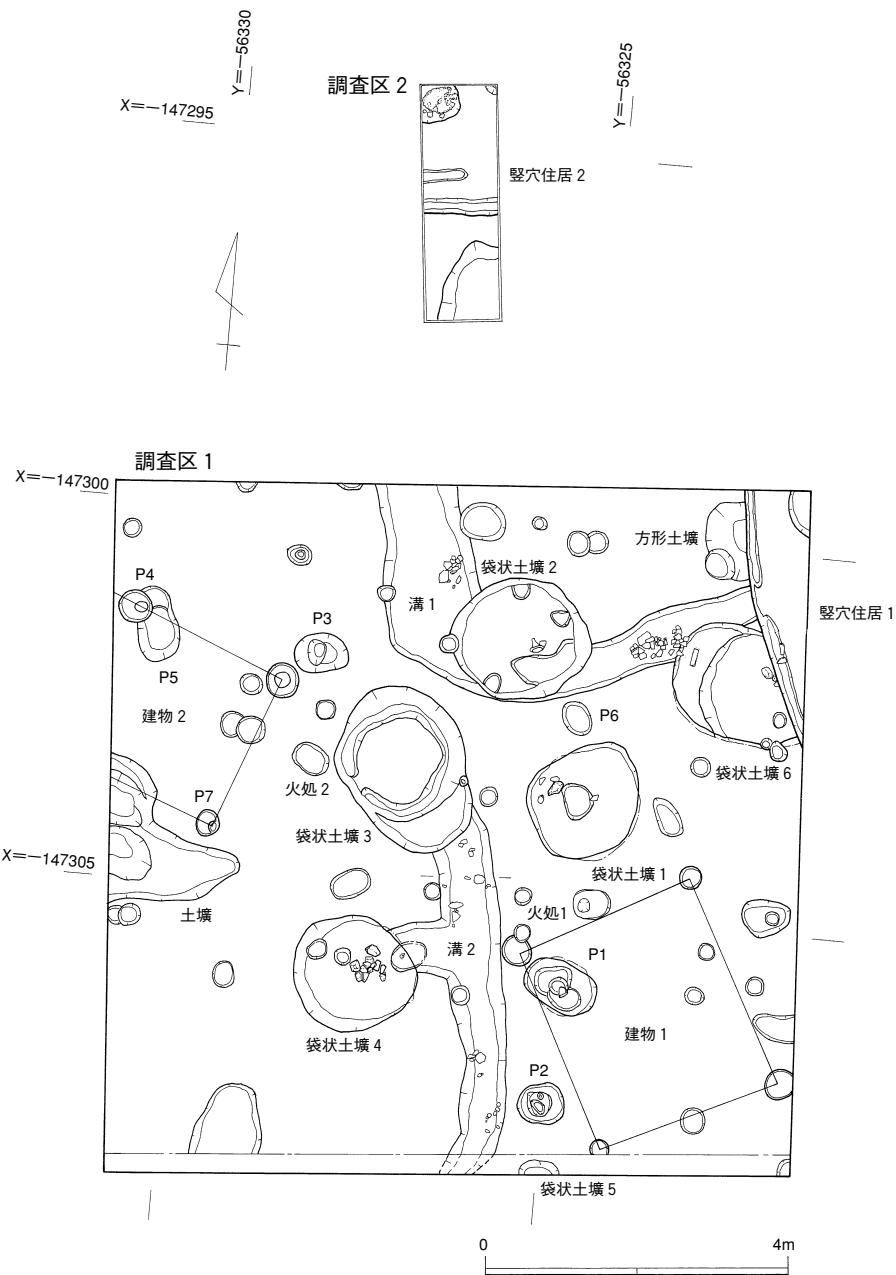
（1）調査区1

1 竪穴住居

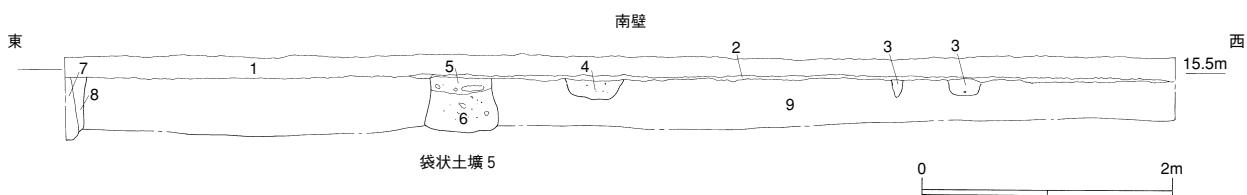
竪穴住居1（第104図 第133図版）

調査区の北東に位置し、住居西辺の壁体溝を検出したことから方形の竪穴住居と考えられる。現存する壁の高さは20cmを測り、壁際には幅10cm、深さ6cmの壁体溝が断続的にめぐる。床面から主柱穴を1基検出したが、貼り床は認められなかった。

遺物は床から遊離した状態で1から3の土師器が出土した。吉備型甕1、2は口縁部が斜め上方へ立ち上がり頸部の器壁が厚く、1には櫛描沈線が施されている。出土遺物から古・前・Ⅱに比定される。



第102図 全体図 (S=1/100)

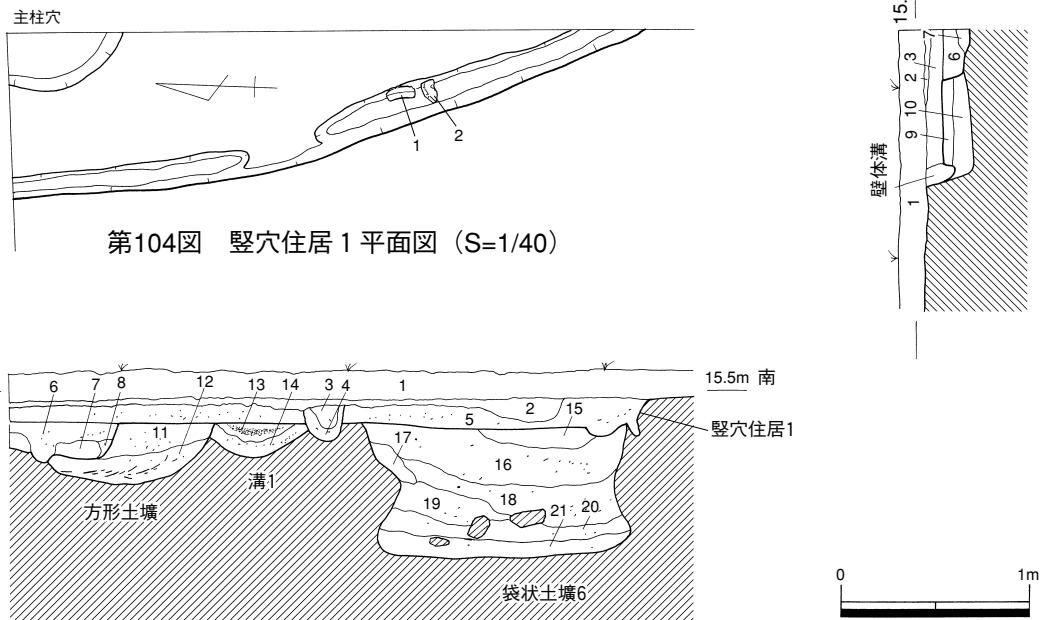


土層

1. 耕作土
2. にぶい橙色粘質土 (7.5YR7/4) 床土
3. 灰黄褐色粘質土 (10YR6/2)
4. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 焼土・炭含
5. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 基盤土ブロック含

6. 褐灰色粘質土 (10YR4/1) 炭・基盤土ブロック含
 7. 褐灰色粘質土 (10YR4/1) 柱痕跡
 8. にぶい黄橙色粘質土 (10YR6/3) 柱掘形
 9. にぶい黄橙色粘質土 (10YR6/3) 基盤層
- ※ () は『新版標準土色帖』による

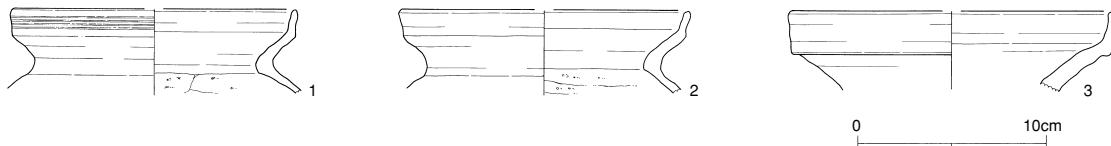
第103図 土層断面図 (S=1/60)



第104図 竪穴住居1平面図 (S=1/40)

- | | |
|----------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 耕土 | 溝1 |
| 2. 浅黄色粘質土 (2.5Y7/3) 中世 | 13. 黒褐色粘質土 (2.5Y5/2) 土器多、炭・焼土含む |
| 3. 浅黄色粘質土 (2.5Y7/3) | 14. にぶい黄褐色粘質土 (10YR3/1) |
| 4. 黄灰色粘質土 (10YR6/1) 黄色ブロック多い | 袋状土壌 6 |
| 竪穴住居1 | 15. 灰黄褐色粘質土 (10YR6/2) 黄色ブロック多 |
| 5. 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1) 炭・焼土・土器含む | 16. 灰黄褐色粘質土 (10YR6/3) 烧土・炭・土器含む |
| 6. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2) | 17. にぶい黄橙色粘質土 (10YR7/4) 基盤土ブロック含む |
| 7. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4) | 18. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 烧土・炭多い |
| 8. 灰黄色粘質土 (2.5Y6/2) | 19. にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) 烧土・炭多い |
| 9. 黄褐色粘質土 (2.5Y5/3) | 20. にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/3) 烧土・炭多い |
| 10. 黄褐色粘質土 (2.5Y5/4) 黄色ブロック多い | 21. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 黒色土・焼土・炭含む |
| 方形土壌 | |
| 11. 灰黄色粘質土 (2.5Y6/2) 炭・焼土含む | |
| 12. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) 土器多、炭・焼土含む | |

第105図 竪穴住居1, 方形土壌, 溝1, 袋状土壌 断面図 (S=1/40)



第105図 竪穴住居1, 方形土壌, 溝1, 袋状土壌 断面図 (S=1/40)

2 掘立柱建物

建物1 (第107図 第134図版)

調査区の南東に所在し、柱穴は6本を検出した。棟の方向をN-28°-Wにとり、桁行1間(2.9m)×梁行2間(2.5m)の規模であるが、梁の中央には柱通りよりも外に柱穴を確認した。

柱穴の掘形は円形で、規模は20~35cm、深さ23~40cmを測る。遺物は柱穴出土の土器小片からみて弥生時代後期に比定される。

建物2 (第108図、第135図版)

調査区の西に所在し、柱穴は3本のみの検出である。棟の方向をN-68°-Wにとり、桁行1間以上×梁行1間(2.1m)である。柱穴の掘形は円形で、規模は35~45cm、深さ15~33cmを測る。いずれからも柱痕跡が見られ、直径10~15cmぐらいの丸柱が使用されたようである。

遺物は柱穴内出土の土器片やサヌカイトの剥片があり、時期は弥生時代後期に比定される。

3 袋状土壙

袋状土壙1（第109図、第136・137図版）

袋状土壙1は調査区の中央に位置する。平面は不整形で上端径は145～168cm、底面径は140～154cm、深さ64cmを測る。断面は円筒形であり、崩れのため壁際の一部がくい込んでいる。底部は平坦で中央に約36cm、深さ4cmを測る不整形な浅い窪みが見られた。

埋土には炭粒や焼土粒を含み、底面から浮いた状態で複数の石を検出し、その状況から底部が堆積し、しばらくした後に廃棄されたと考えられる。

遺物は壺4・壺5、甕6・甕7、高坏8が出土した。壺は頸部がゆるやかに外反する壺4と、直立する壺5があり、壺4の外面には沈線が一条認められ、甕6には口縁部外面に凹線が施されている。高坏8は口縁部が斜め上方に立ち上がり端部に凹線をめぐらす。

これらの出土遺物から時期は弥・後・Ⅰに比定される。

袋状土壙2（第110図、第138・139図版）

袋状土壙2は調査区の中央に位置する。平面は橢円形で上端径158～186cm、底面径145cm、深さ65cmを測る。断面は逆台形となってすぼまり、底面の壁際に浅い窪みが4ヵ所と、西側の壁に柱穴を検出した。埋土には炭粒・焼土粒、土器片を多く含み、レンズ状に順次堆積したことをうかがわせ、埋土中からは壺9～壺11、甕12～甕17、高坏19～高坏21、鉢22、石器が出土した。

弥・中・Ⅱの遺物としては、甕12・13、高坏21があり、高坏21は坏部の屈曲が甘く坏部外面には凹線と、縦に3条の棒状浮文を貼り付ける。これ以外には後期初頭の遺物が大半を占め壺9、甕14、高坏19・高坏20などがある。

石器はサヌカイト製の石鎌S1～S3とサヌカイトの剥片が出土した。S1・S2は三角形を呈し基部が直線的な平基式である。S1は長さ2cm、幅1.6cm、重さ1.2gを測り、S2は長さ2.8cm、幅1.6cm、重さ1.4gを測る。S3は下部を欠き長さ1.4cm、幅1.3cm、重さ0.2gである。

時期は底面から高坏18が出土していることや、埋土中の出土遺物からみて弥・後・Ⅰに比定される。

袋状土壙3（第112図、第140図版）

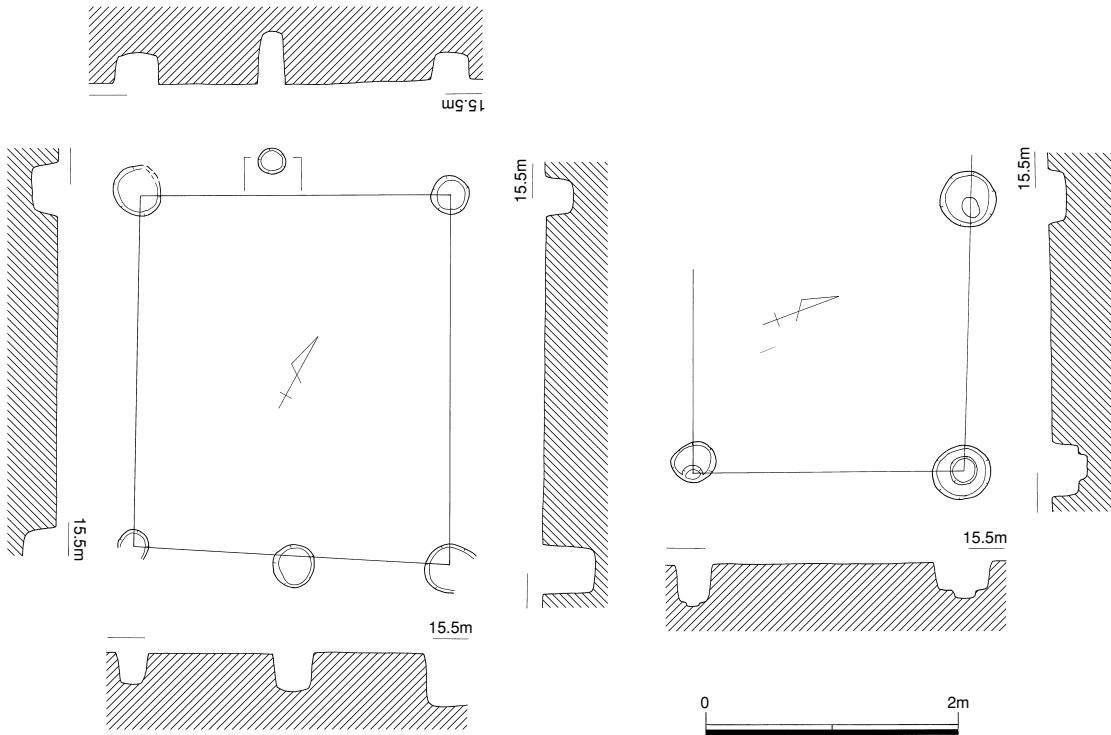
袋状土壙3は調査区の中央に位置する。本体である土壙部分と南東側には拡張部があり、段が形成されている。全長は225cm、上端径166cm、底面径130～140cmを測り、土壙部分は深さ66cm、段となる拡張部は深さ26cmである。

土壙の底面は壁面下に幅8～20cm、深さ約6cmの溝がめぐるが、南西側は空いており完周していない。断面は逆台形となり、壁の上位には径10cm、深さ30cmの杭痕が認められた。

埋土には炭粒・焼土粒・土器片を含み、レンズ状にたわみながら埋没した断面形状を表している。遺物は前期の甕23、後期の壺24、甕25～甕28、高坏29・高坏30、石鎌S4～S7、磨石S8、サヌカイトの剥片が出土した。

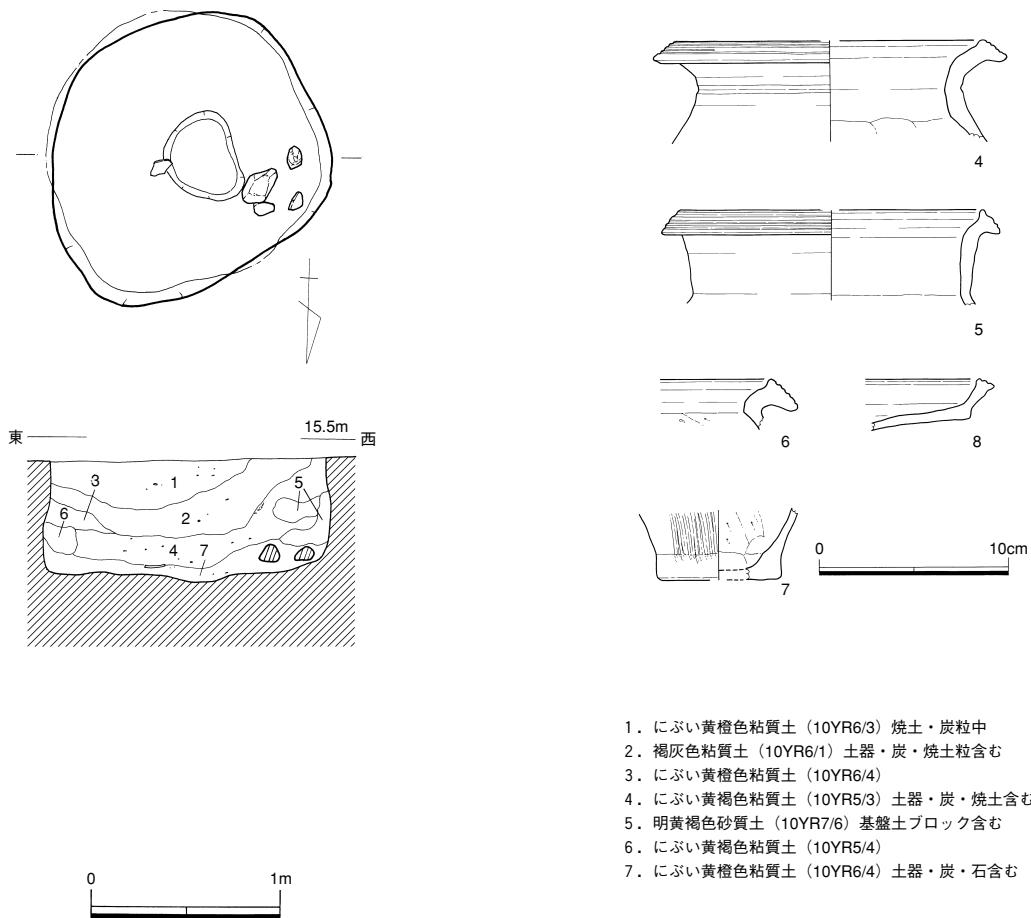
甕23は口縁部外面に刻み目と、頸部下にヘラ描沈線を施し弥・前・Ⅲに比定され、同時期の遺構である溝1から流入したものであろう。壺24は頸部が上方へ外反し、口縁部端部に凹線を施す。また、高坏29・高坏30は口縁部端部を内側に肥厚させている。

サヌカイト製石鎌には4種がある。S4は茎を持ち鎌と茎の境が不明瞭な凸基Ⅱ式で長さ2.1cm、幅0.8cm、重さ0.4gを測り、S5は凹基式で基部が小さく内湾し長さ1.1cm、幅1cm、重さ0.05gを測る。S6は凸基Ⅰ式で、基部は外湾し丸みをもち長さ2.8cm、幅2cm、重さ2.2gを測る。抉り入り式のS

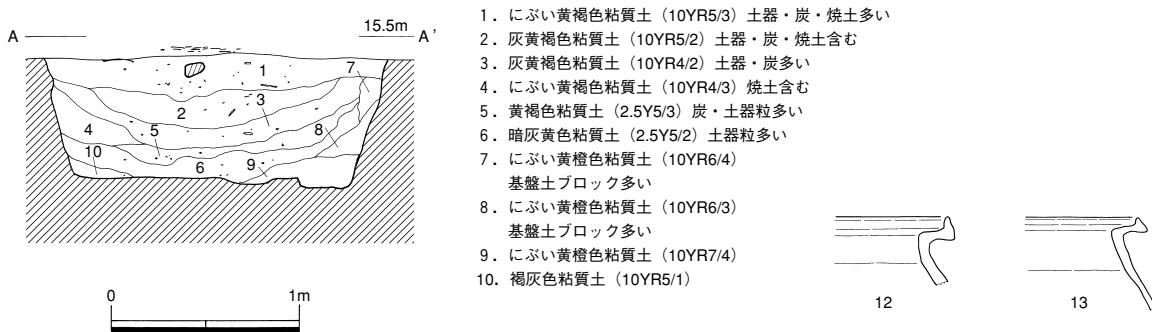
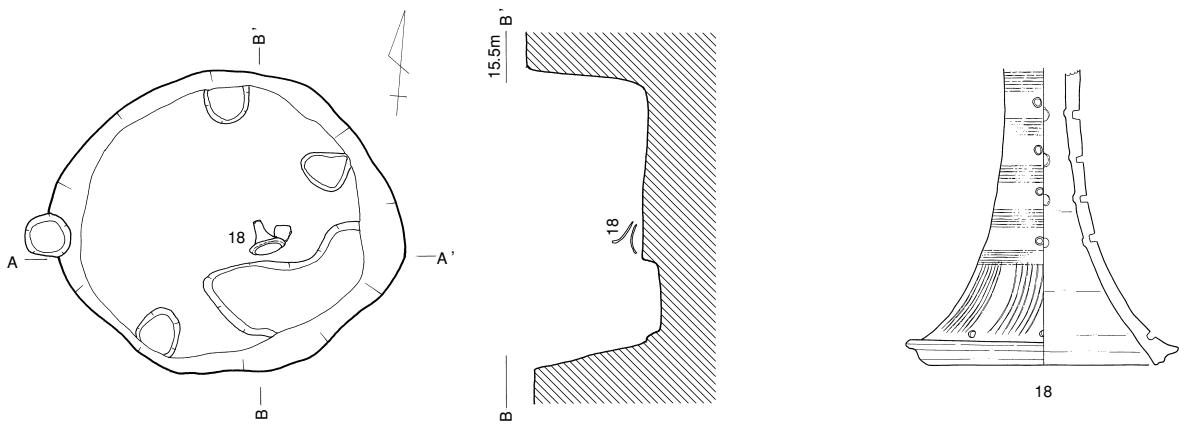


第107図 建物1 平・断面図 (S=1/60)

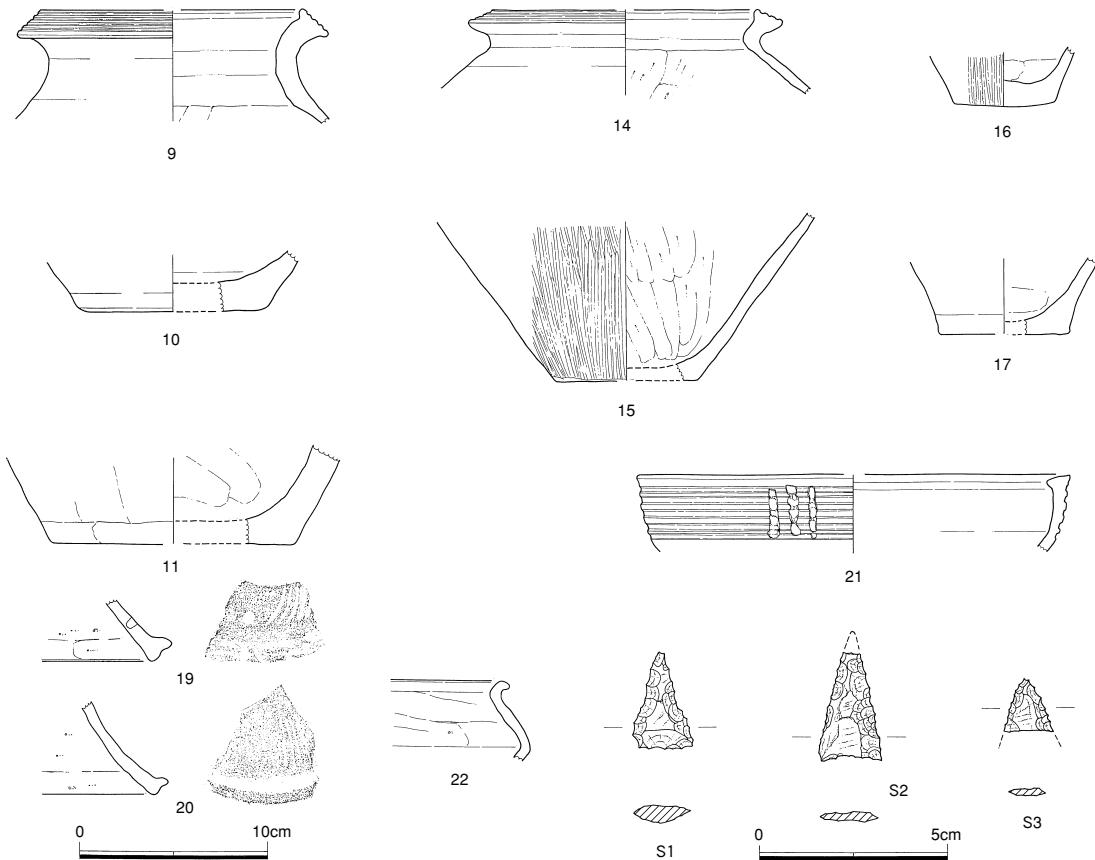
第108図 建物2 平・断面図 (S=1/60)



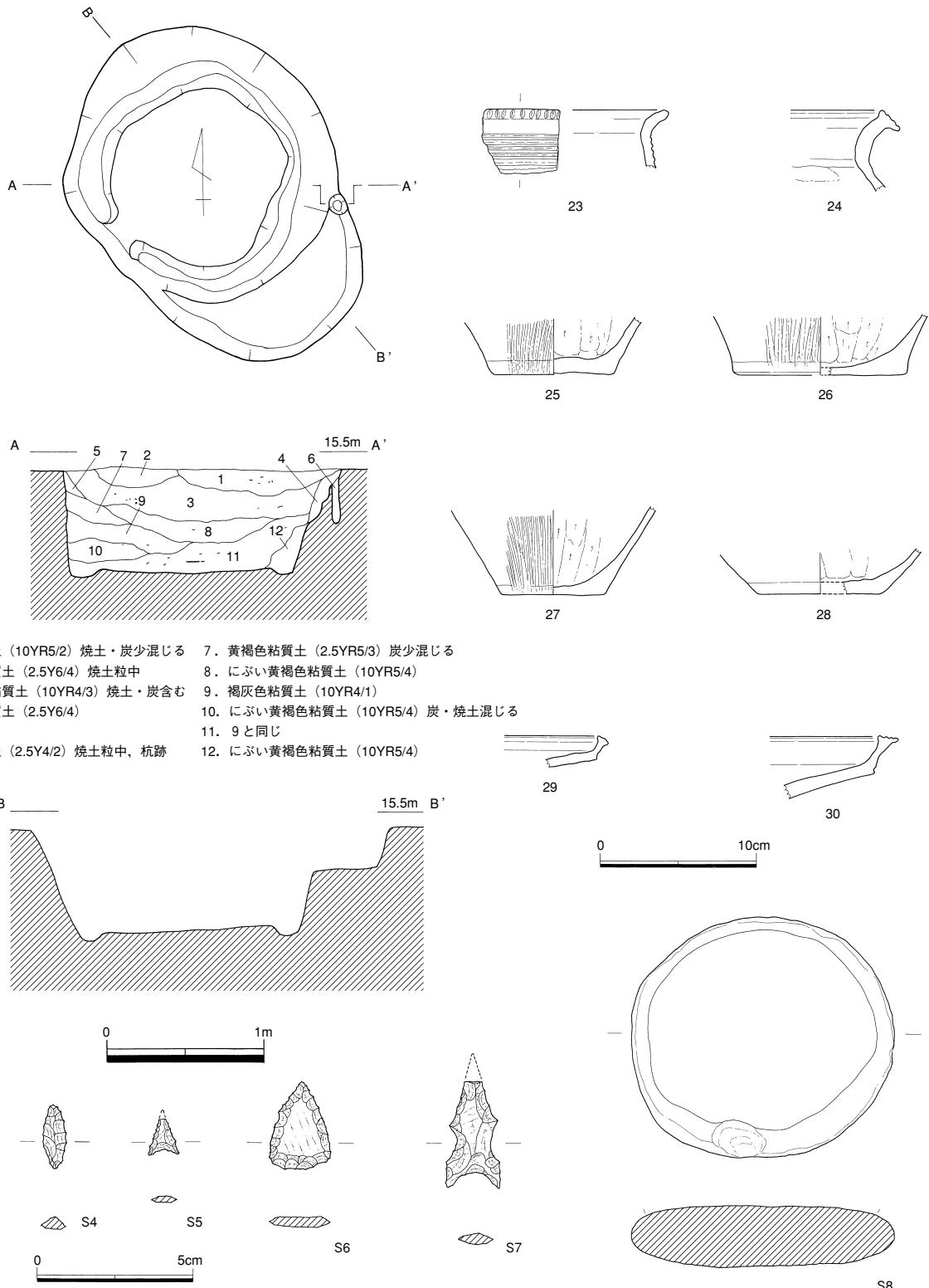
第109図 袋状土壤1 平・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物 (S=1/4)



第110図 袋状土壤 2 平・断面図 (S=1/40)



第111図 袋状土壤 2 出土遺物 (S=1/4・1/2)

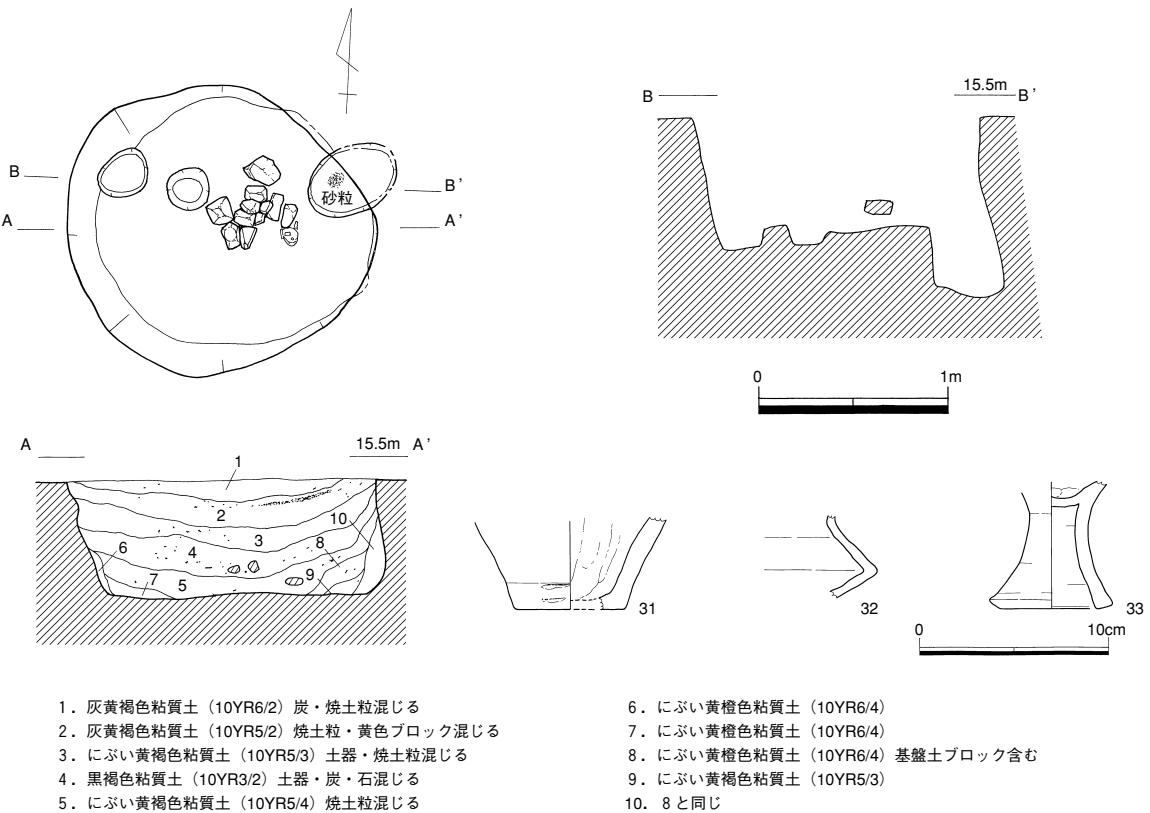


第112図 袋状土壤3 平・断面図 ($S=1/40$) 及び出土遺物 ($S=1/4 \cdot 1/2$)

7は、両側縁と基部が内湾し長さ3.4cm、幅1.7cm、重さ2gである。磨石S8は流紋岩で、埋土上面より検出したものである(註2)。円形を呈し表面は平滑に摩滅し、長さ16.8cm、幅15.3cm、重さ1587gを測る。

これらの遺物からみて時期は弥・後・Iである。

袋状土壤4 (第113図、第141図版)



第113図 袋状土壙4 平・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物 (S=1/4)

袋状土壙4は調査区の中央よりやや南に位置する。平面は不整円形で上端径156~162cm, 底面径130~146cm, 深さ60cmを測る。断面は円筒形で東半は壁際よりも一部が入り込んでいる。底面には小さな窪みが2ヵ所見られ、特に壁際から長径約45cm, 深さ約40cmを測る柱穴を検出したことが特筆される。この柱穴には炭化材がみられ、鉛直方向の壁面に炭粒が付着していた事から、木柱が建てられたと推定される。

埋土は炭粒・焼土粒を含み、レンズ状に堆積している中で、2層からは集中的な広がりが認められた。また、底面から6~10cm浮いた状態で石がまとまっており、埋没の過程で廃棄されたと考えられる。遺物は埋土中から甕31, 鉢32, 高坏33が出土し時期は弥・後・Iに比定される。

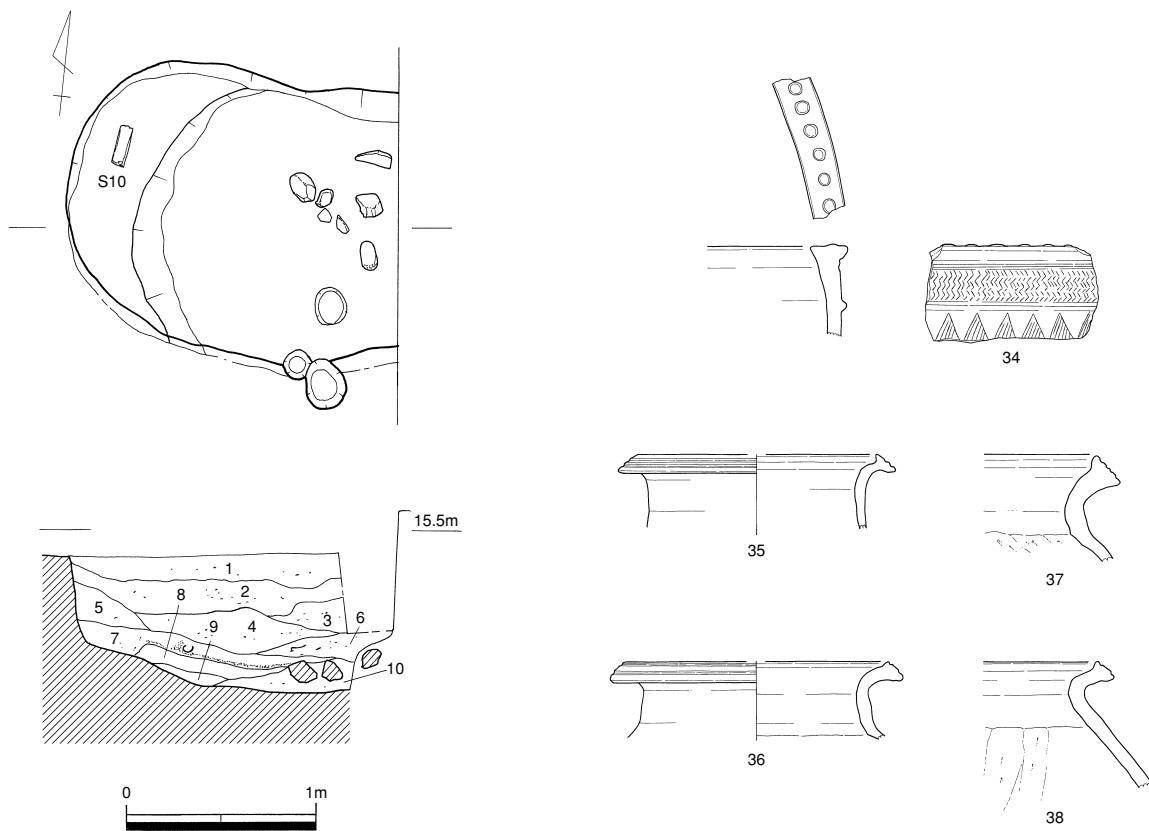
袋状土壙5 (第103図)

袋状土壙5は調査区の南端に位置する。楕円形を呈し上端径45cm, 底面径55cm, 深さ43cmを測る。断面形はフラスコ状となり埋土は2層に分層され、一気に埋没したような状況であった。出土遺物はなく埋土の状況から弥・後・Iと考えられる。

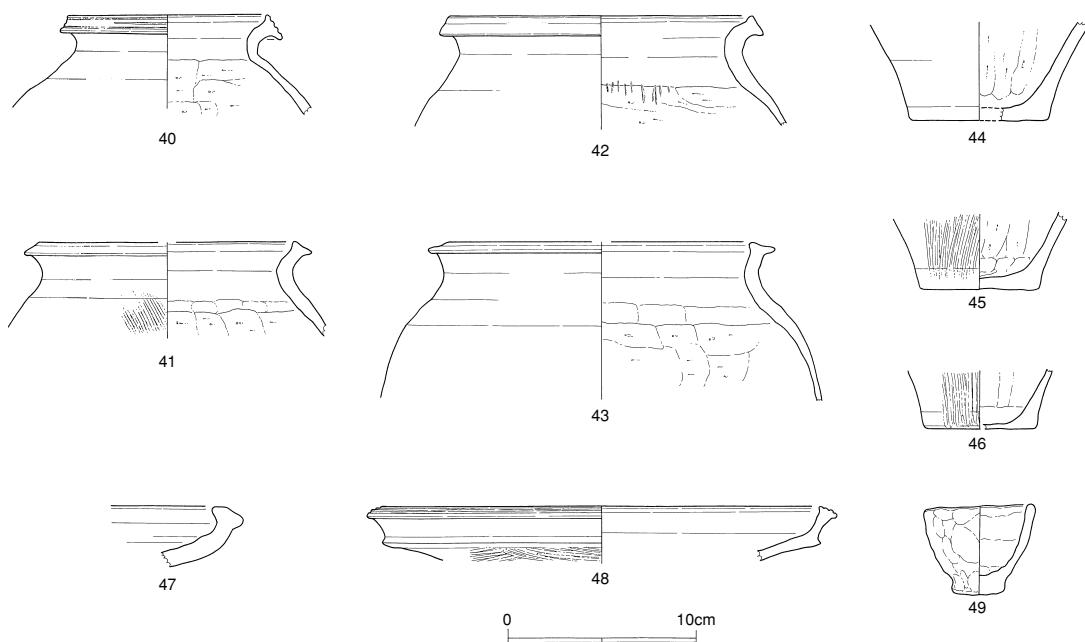
袋状土壙6 (第114図, 第144図版)

袋状土壙6は調査区の北東に位置する。平面は楕円形を呈し上端径140~176cm, 底面径140cm, 最深部で72cmを測る。断面は円筒形を呈し、床面の西端は段状となってゆるやかに傾斜し、南側の壁面からは柱穴を検出した。

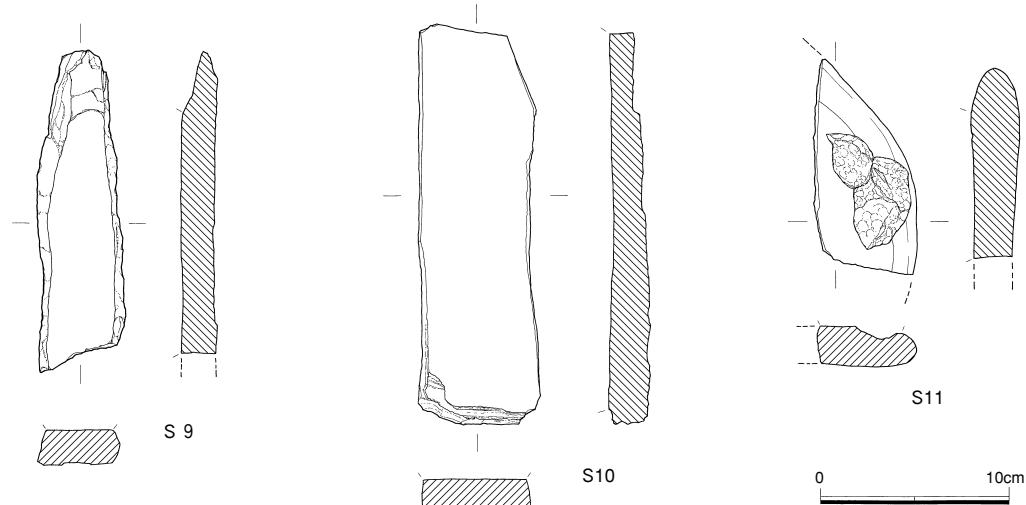
埋土には炭粒・焼土粒を含み、床面から5cm浮いた状態で複数の石がまとまり廃棄されていた。埋土中からは台付鉢34, 壺35・壺36, 甕37~甕46, 高坏47・高坏48, 鉢49, 砥石S9・S10, 磨石S11が出土した。



1. 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 土器・焼土・炭少混
2. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 土器・焼土・炭混
3. 褐色粘質土 (10YR4/4) 土器・焼土混
4. にぶい黄橙色粘質土 (10YR6/4) 黄色ブロック混
5. にぶい黄橙色粘質土 (10YR6/3) 炭少混
6. 明灰黄色粘質土 (2.5Y4/2) 土器・焼土・炭混
7. 褐灰色粘質土 (10YR5/1) 黄色粘土混
8. にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) 炭少混
9. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3) 烧土粒含
10. 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1) 土器・炭・石混



第114図 袋状土壤6 平・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物 (S=1/4)



第115図 袋状土壤6 出土遺物 (S=1/4)

台付鉢34は口縁部上面に円形浮文、外面には網代状の刺突文と鋸歯文が施され弥・中・Ⅱに属している。壺35・壺36は頸部が長く端部を外反させており、壺37～壺43は口縁端部に凹線を施すものと、施さないものがある。高坏48は坏部が斜め上方に立ち上がり、端部を肥厚させ凹線を施す。鉢49は手づくねで成形されている。

砥石S9は黒色片岩で長方形を呈し、上面は平滑で長さ17.1cm、幅4.4cm、厚さ1.9cm、重さ256gを測る。砥石S10は珪質片岩で長方形を呈し、長さ21.2cm、幅6.4cm、厚さ1.5cm、重さ435gを測る。磨石S11は安山岩で本来の形状は円形とみられるが、全体を欠き長さ11.4cm、幅5.4cm、厚さ2.6cm、重さ210gを測る。上面は平滑でわずかにくぼんでいるように観察され、側面の近くには叩打により割れが認められる。これらの遺物から時期は弥・後・Ⅰに比定される。

4 土壙

土壙1 (第116図、第142図版)

土壙1は調査区の西側中央に位置する。不整形な形状を呈し上端幅2m、最深部は深さ72cmを測り底部もまた不整形である。埋土には炭粒・焼土粒と、わずかな土器片が流入しており、6層の下位には炭粒の沈着が認められた。

出土遺物は混入とみられる弥生時代前期の蓋50が出土しているが、他の土器小片からみて弥生時代後期前葉に比定される。

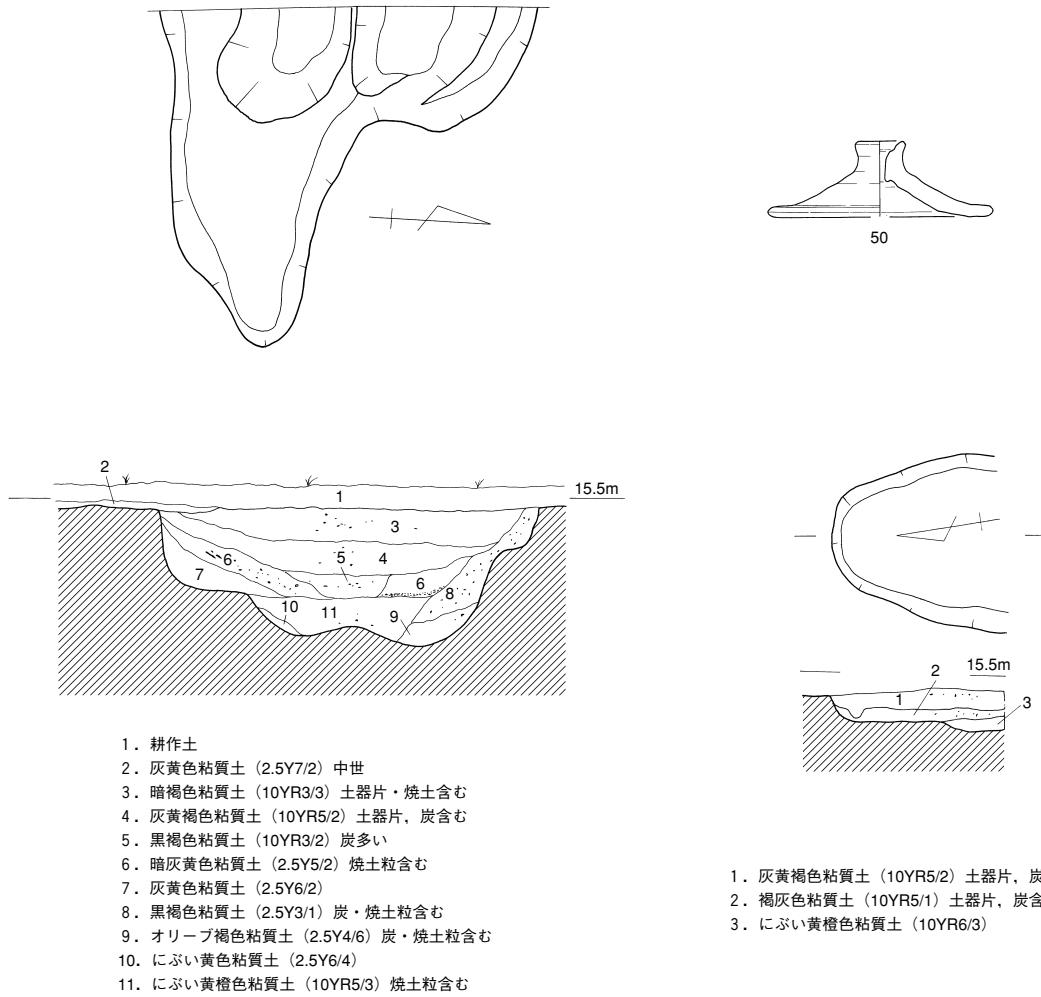
土壙2 (第117図)

土壙2は調査区の南西に位置する。楕円形を呈し上端幅92cm、深さ20cmを測り、埋土には炭粒・土器片を含む。土器片からみて時期は弥生時代後期に比定される。

方形土壙 (第118図、第145図版)

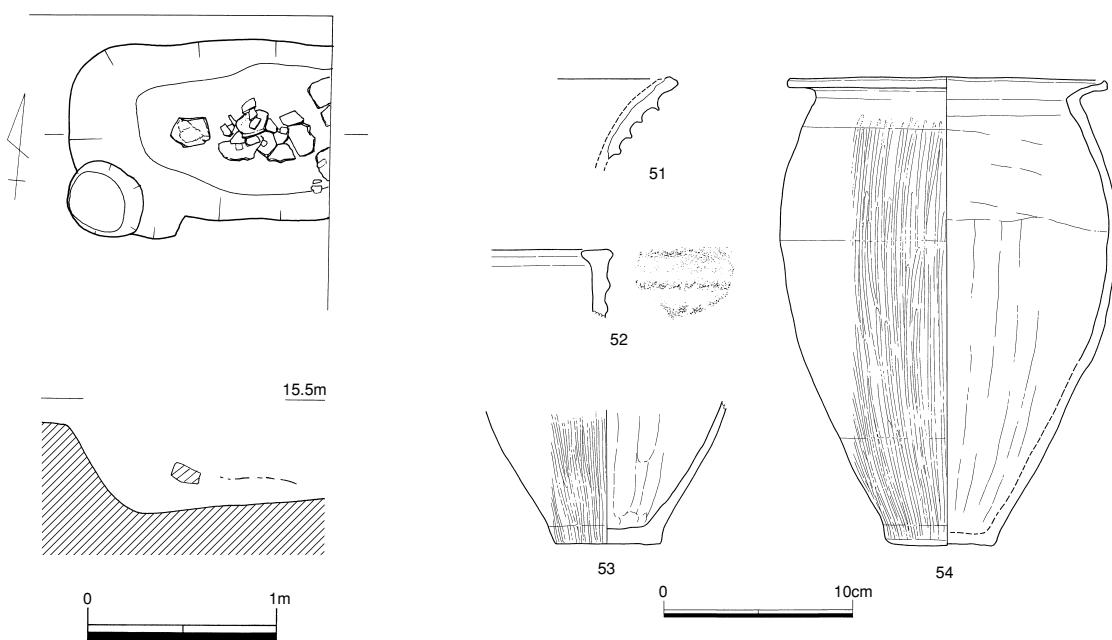
方形土壙は調査区の北東で検出した。隅丸方形で東西に細長く上端幅1m、深さ48cmを測る。底面から約14cm浮いた状態で壺51、台付鉢52、甕53・甕54が出土しており、埋没の過程で廃棄されたと考えられる。

壺51は口縁部外面に貼り付け突帯が4条と、縦に棒状浮文が貼り付けられ、台付鉢52の外面にも貼



第116図 土壌1 平・断面図 (S=1/40)
及び出土遺物 (S=1/4)

第117図 土壌2 平・断面図 (S=1/40)



第118図 方形土壌 平・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物 (S=1/4)

り付け突帯が認められる。甕54は頸部がくの字状に屈折し端部をつまみ上げる。出土遺物からみて時期は弥・中・Ⅱに比定される。

5 火処

火処1（第119図）

火処1は調査地の中央に位置する。遺構検出中に橙色系の焼土面と、熱影響を受けて赤変している部分が確認できた。時期は弥生時代と考えられる。

火処2（第119図）

火処2は調査地の中央よりも北西に位置する。不整円形で長さ50cmを測り浅く掘り窪められている。橙色系の焼土面と、地面が熱影響を受けて赤変しており、規模と焼土面からみて火処1と同じく弥生時代に推測される。

6 柱穴

P1（第119図）

P1は調査地中央のやや南に位置する。掘形は楕円形で長さ98cm、幅60cm、深さ50cmを測る。底面は凹凸が顕著で、埋土は硬くしまっていた。掘形のほぼ中央に径約20cmの柱痕を確認し、底部には長さ10cm程度の礎盤石が据えられていた。埋土中から出土した土器片からみて、弥生時代後期である。

P2（第119図、第149図版）

P2は調査地の南中央に位置する。掘形は楕円形で上端径50～62cm、深さ20cmを測る。柱痕は径20cm前後であるが、柱痕の底面には2ヵ所の窪みがあり、柱を取り替えた可能性もある。埋土中から出土した土器片からみて、弥生時代後期である。

P3（第119図）

P3は調査地の北西に位置する。掘形は楕円形で上端径50～70cm、深さ約20cmを測り、埋土は比較的しまっている。掘形の中央付近には径15cm前後の柱痕を検出した。時期は弥生時代後期である。

P4・P5（第119図）

P4とP5は調査地の北西に位置する。柱2基は切り合い関係にあり、建物2を構成するP4が新しい。P4は掘形が円形を呈し径44cm、深さ12cmを測り、円形の柱痕は15cm前後である。

P5は細長く不整な形状で長さ98cm、幅54cm、深さ16cmを測る。底面は船底状に傾斜し、中央付近が深くなっていた。

出土遺物からP4、P5は弥生時代後期である。

P6（第119図）

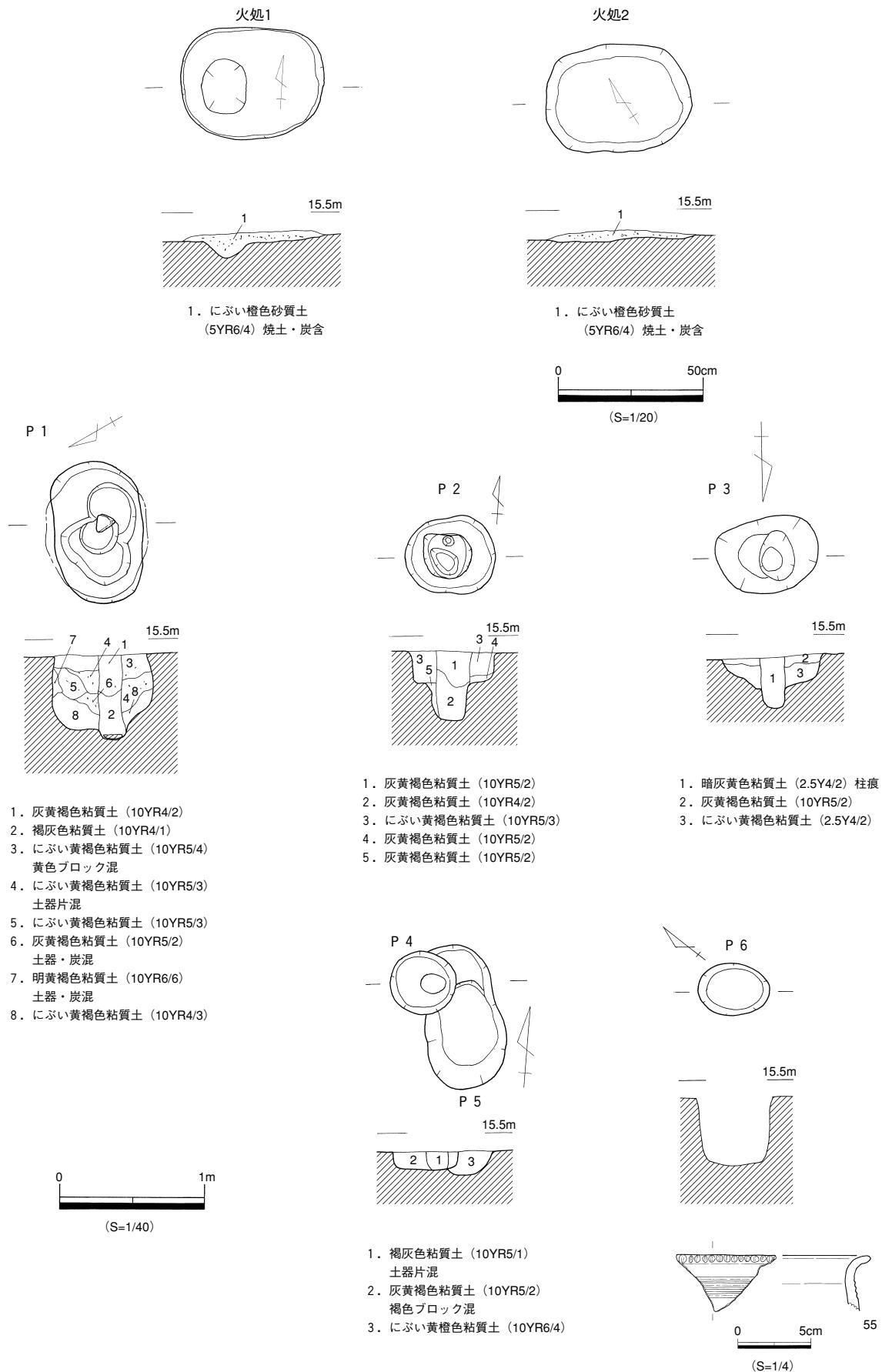
P6は溝1と袋状土壙1の間に位置する。楕円形を呈し長径約50cm、深さ50cmを測る。埋土中から甕55が出土した。時期は弥・前・Ⅲである。

7 溝

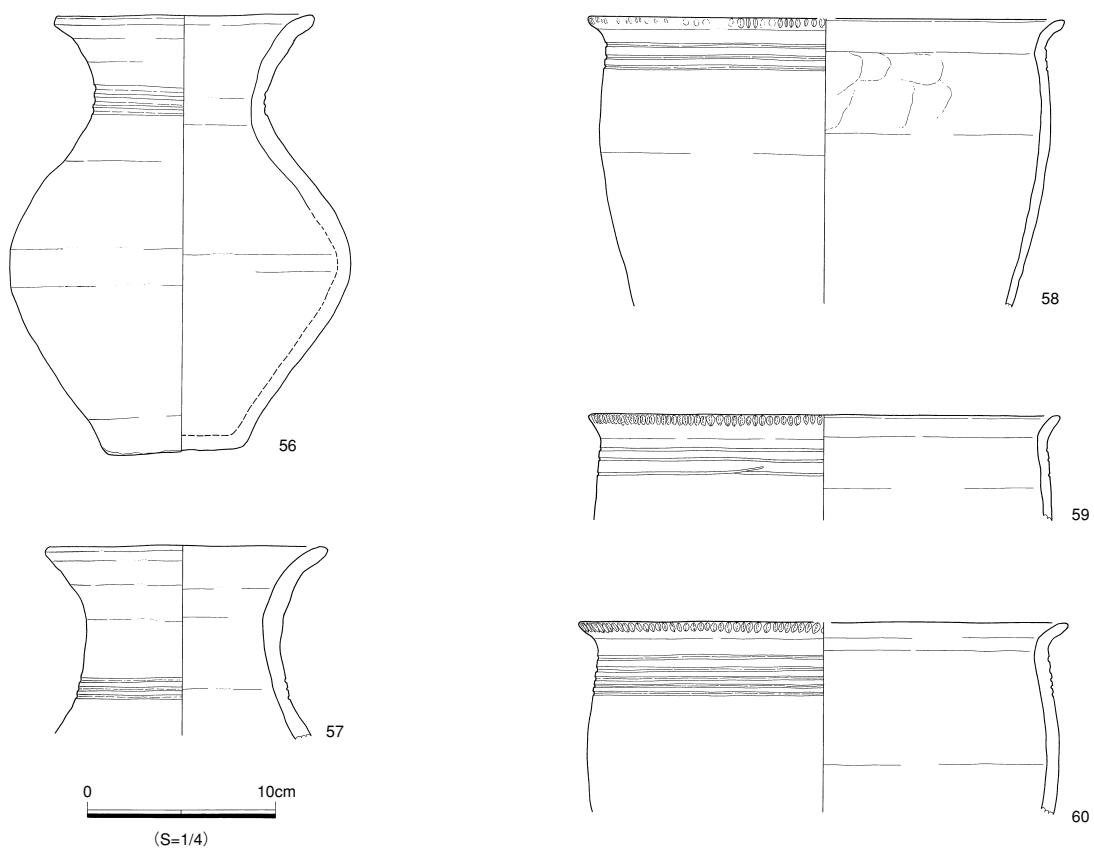
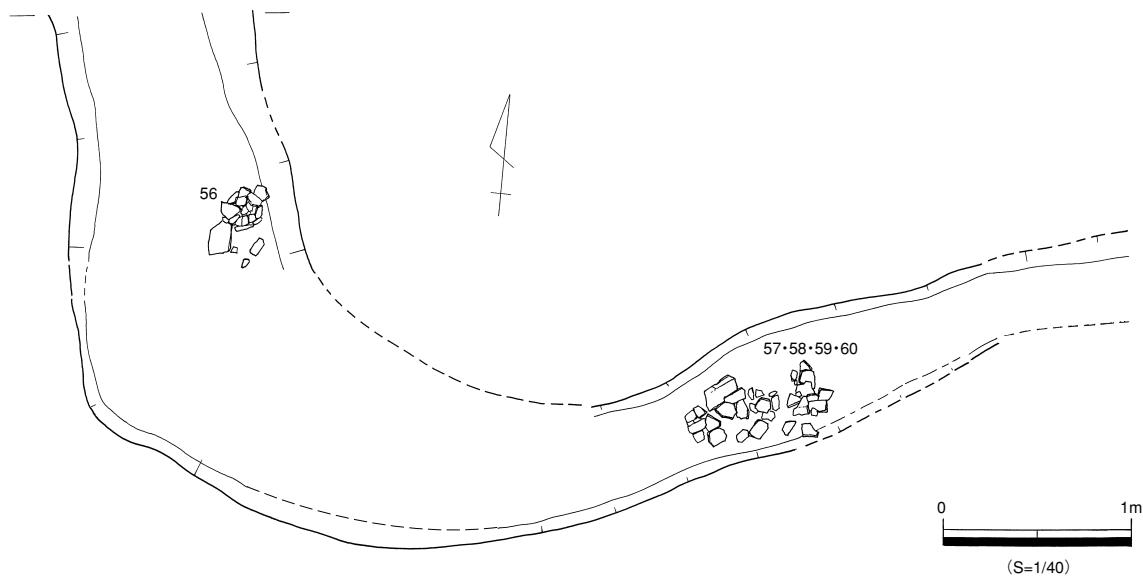
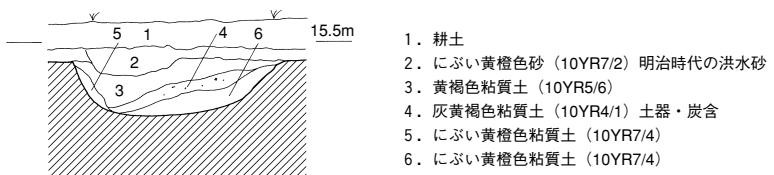
溝1（第120図、第146・147図版）

溝1は調査区の北に位置する。L字形に屈折し幅50～130cm、深さ20～70cmを測り、底部の高低差からみて東から北へ流走していたと見られる。溝1は周辺の遺構と切り合い関係にあり、溝1→方形土壙→袋状土壙6→竪穴住居1の順で変遷している。埋土中からは壺56・壺57、甕58～甕60の遺物が出土した。

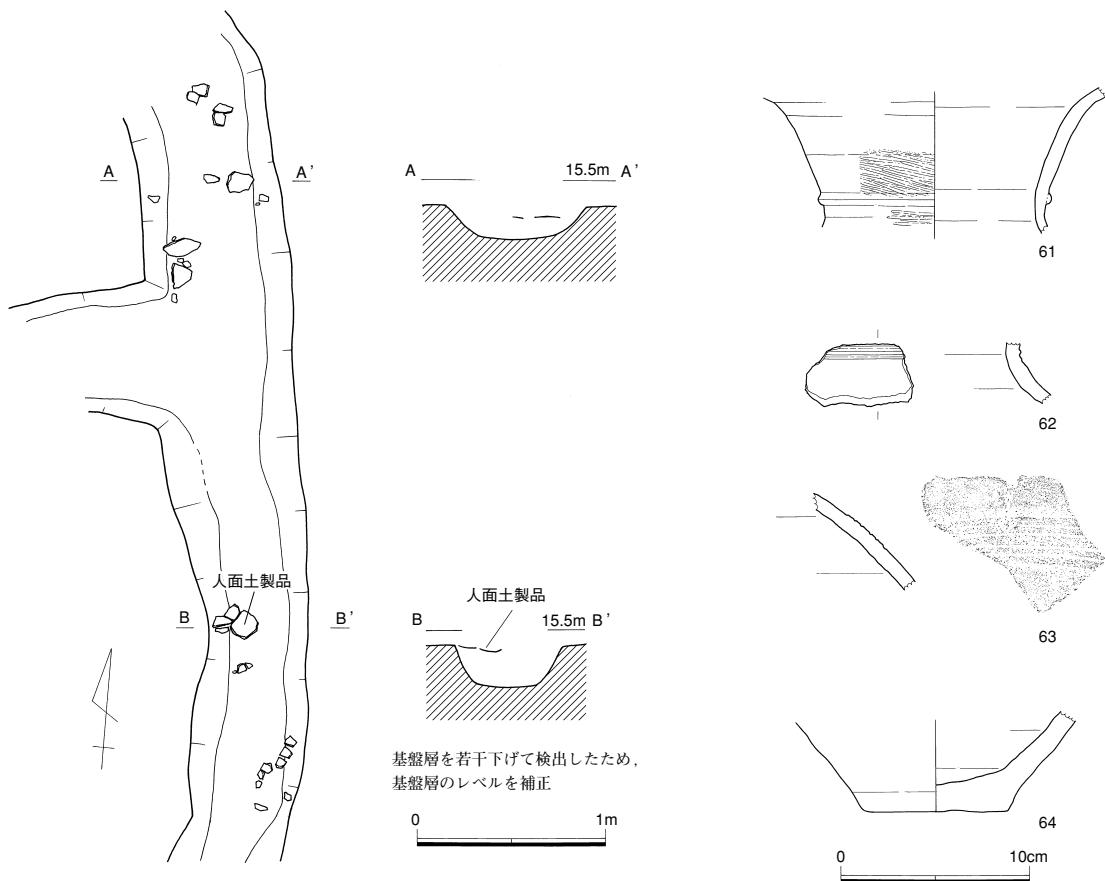
壺56は体部の中程に最大径があり頸部にはヘラ描沈線を3条施す。甕58～甕60は口縁端部に刻み目、



第119図 火廻、柱穴 平・断面図 ($S=1/20 \cdot 1/40$) 及び出土遺物 ($S=1/4$)



第120図 溝1 平・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物 (S=1/4)



第121図 溝2 平・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物 (S=1/4)

頸部下にはヘラ描沈線を施している。これらの遺物から時期は弥・前・Ⅲである

溝2 (第121・122図, 第148図版)

溝2は調査区の中央から南に位置する。幅50~70cm, 深さ約20cmを測り, 南北方向から途中西側に分岐し, 袋状土壙3と袋状土壙4の切り合い関係にある。調査地南壁の断面図では溝の大きさが縮小しているため, この周辺で収束するものと推測される。埋土中からは壺61~壺64と埋土の上位より, 人面土製品65が出土した。

壺61は口縁部が外反し, 頸部に一条の突帯をめぐらす。壺62は頸部に, 壺63には体部上半にヘラ描沈線を施す。

人面土製品は人の頭部を写実的に造形した被り物で, 下位は欠落している。土器を転用したものや人形土製品, 東日本に見られる人面付土器などとは遺物の性格が異なるため, 人頭の部位名称を用いて説明したい。

上位からみた頭頂部は円形を呈し, 頭頂部から側頭部にかけて丸みを持たせながら造形されている。断面は頭頂部から左右の側頭部にかけてゆるやかにカーブを描くと共に, 頭頂部から前頭部にかけては額のあたりから下へ屈折している。規模は残存高11.1cm, 顔幅17.6cm, 頭頂部の長さ18.1cmを測る。

頭頂部には魚のひれのような突起が貼り付けられ, 額から頭頂部にかけてゆるやかに立ち上がり, 頂部には波打つような凹凸が見られると共に, 後頭部に向けて擦り付いている。突起の長さは16.1cm,

最高部で2.5cm、幅は基部で1.1cm、頂部で0.2cmを測る。

顔は眉毛、鼻、目が表現されている。両眉は約2.2cm離れて貼り付けられ、眉は下に向けてゆるやかにカーブし長さ4.2～4.6cm、幅0.6cm前後を測る。

鼻は鼻筋を示す鼻背、そして、先端のふくらみを示す鼻尖が造形され、下端には鼻孔が2つ刺突されている。鼻の長さは3.5cm、幅は1.5cm、鼻尖までの高さ1.1cmを測る。

両目は3.6cm離れて孔をあけ、それぞれの目は目じりが下がっている。眉毛と目の間にはイレズミと見られる線刻が3条確認できる。土製品自体がもろいため、表面は剥落して不明であるが、左目については、見方によって目頭まで線刻された可能性もある。

外面調整は頭頂部と左目付近にヘラミガキが確認でき、本来は精製されて光沢があったものと見られ、内面調整はナデて整形し厚さ約6mmを測る。焼成は甘く、色調は外面が黄橙色、内面は黄灰色で、粗い胎土には2mm以下の長石や石英が多く含まれている。

時期は共伴する遺物や、砂粒を多く含む胎土からみて弥・前・Ⅲである。

(2) 調査区 2

8 壱穴住居

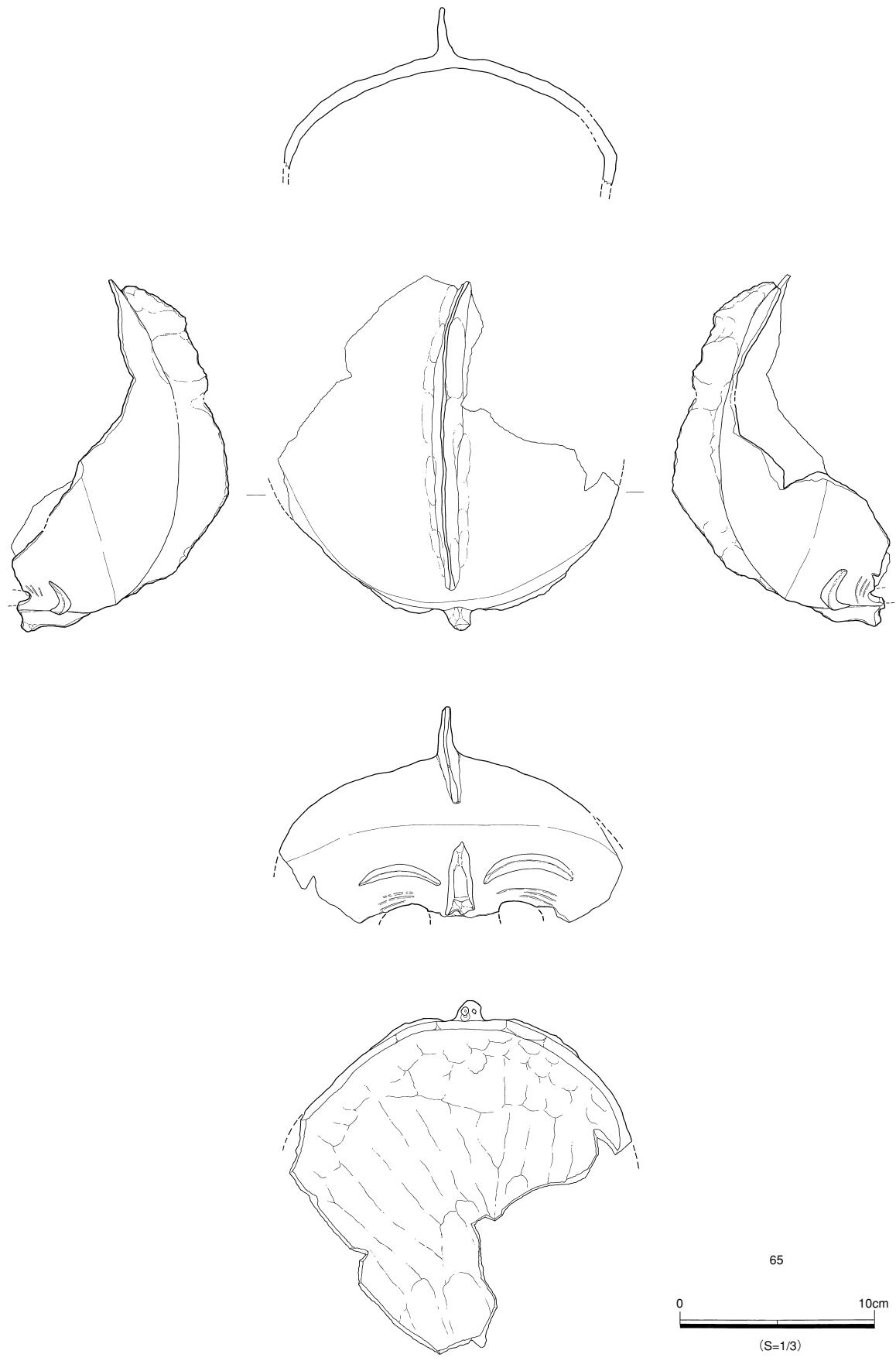
壹穴住居 2 (第123図 第150・151図版)

調査区2の北半から方形と考えられる壹穴住居を検出した。壁際には幅18cm、深さ約5cmを測る壁体溝がめぐり、床上面にはわずかに掘り窪めた炉床に、被熱を受けた赤色の硬化面を検出した。床面には貼床はなかったが、壁体溝と平行して小溝を検出している。

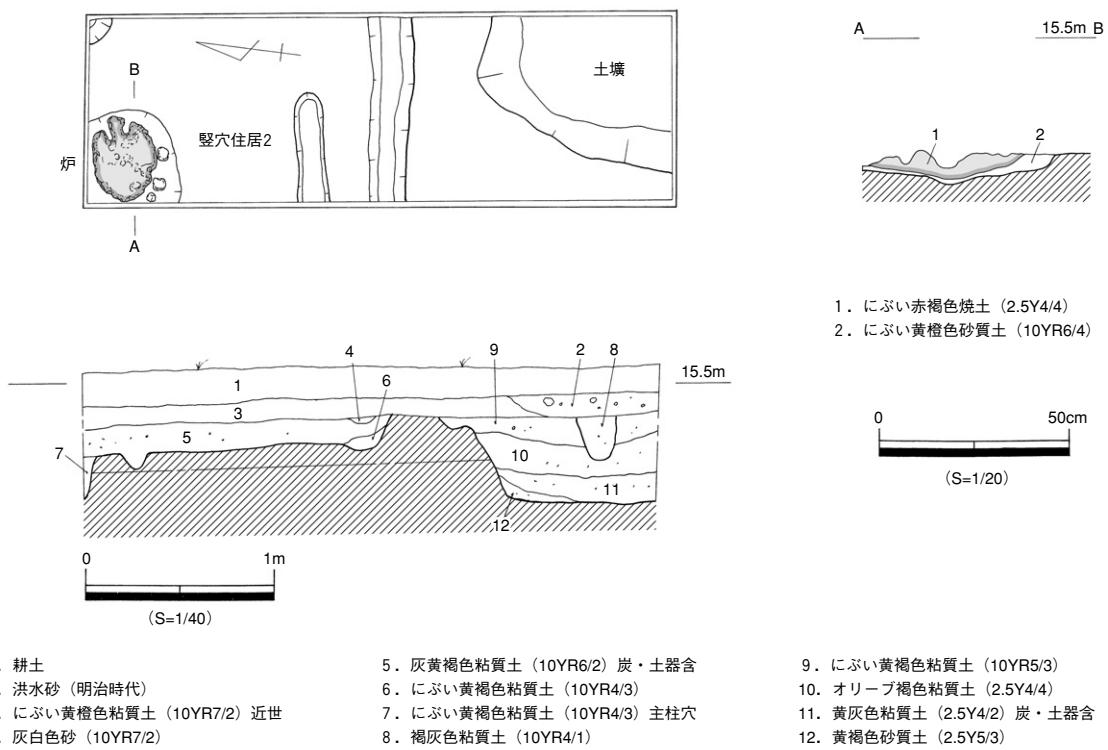
壹穴住居2は壹穴住居1と同じく古墳時代初頭に比定される。

(3) 遺構にともなわない遺物

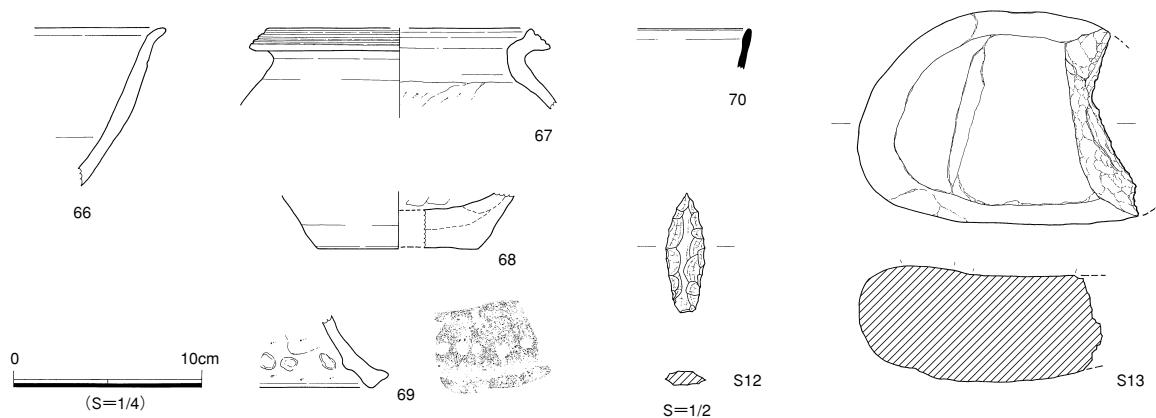
調査区1から甕66・甕67、壺68、高坏69、須恵器坏70、石鎌S12、砥石S13が出土した。このうち甕66は頸部下に一条のヘラ描沈線を施し、弥生時代前期に比定される。後期前葉の遺物としては甕67、高坏69、石鎌S12、砥石S13がある。サヌカイト製石鎌S12は凸基Ⅱ式で長さ3.1cm、幅1cm、厚さ0.4cmを測り、砥石S13は流紋岩で、長さ14.7cm、幅11.2cm、厚さ5.6cm、重さ1533gを測る。



第122図 溝2 人面土製品 (S=1/3)



第123図 調査地2 平・断面図 ($S=1/40 \cdot 1/20$)



第124図 遺構に伴わない遺物 ($S=1/4 \cdot 1/2$)

第9表 編年対比表

		津寺	上東・川入	百間川	雄町		高橋編年
弥生時代	前期	弥・前・I		百・前・I		津島	I期 { a b c }
		弥・前・II		百・前・II	雄町1	門田	II期 { a b c }
		弥・前・III		百・前・III	雄町2		
	中期	弥・中・I		百・中・I	高田	南方	III期 { a b }
		弥・中・II		百・中・II	雄町3		
		弥・中・III		百・中・III	船山5 滋池 雄町4	滋池	IV期 { a b c }
	後期	鬼川市0		百・後・I	前山東 雄町5	前山II	V期 { a b }
		弥・後・I		百・後・II	雄町6		
		弥・後・II	鬼川市II	百・後・III	雄町7 雄町8	上東	VI期 { a b }
	古墳時代	弥・後・III	鬼川市III	百・後・IV	雄町9 雄町10		
		弥・後・IV	才ノ町I 才ノ町II	百・後・V	雄町11 雄町12	グランド上層	VII期 { a b c d }
		古・前・I	下田所	百・古・I	雄町13		
	前期	古・前・II	龟川上層	百・古・II	雄町14	酒津	VIII期 { a b c d }
		+	+	+	雄町15		
		古・前・III	川入・大溝上層	百・古・III		王泊六層	IX期 { a b c d e }
							X期 { a b }

註1 「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 岡山県教育委員会 1998年

註2 石材鑑定は倉敷市立自然史博物館 武智泰史氏からご教示を得た。

参考 平井泰男「弥生時代中期前葉～中葉の土器」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138『加茂政所遺跡、高松原古才遺跡、立田遺跡』岡山県教育委員会 1999年

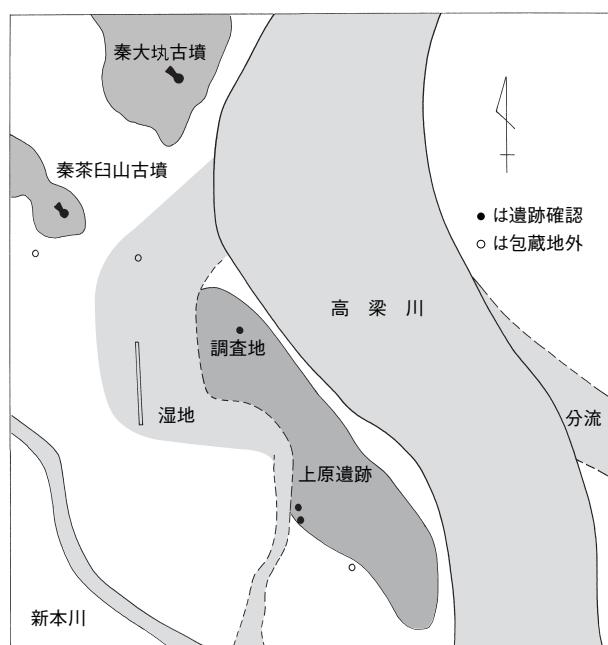
亀山行雄「縄文～弥生時代の津寺遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116『津寺遺跡』4 岡山県教育委員会 1997年

5. まとめ

1. 上原遺跡について

上原遺跡は総社市の中央を貫流する高梁川の西岸に位置する。これまで「散布地」として周知されていたが、今回の発掘調査により改めて遺跡を確認したことを受け「上原遺跡」へと名称を変更した。その範囲は上原地区から富原地区にかけての現集落と重なる細長いエリアであり、高梁川に沿う形状から自然堤防が拡大発達したものと考えられる。

上原遺跡の範囲は総社市教育委員会がこれまで実施してきた立会調査や、地形図による地割によつてある程度絞り込みができるため、第125図を作成した。それによれば遺跡の北西側は、丘陵谷部(現、金子大池)の延長線にあたり、立会調査により湿地状の堆積かもしくはグライ化層が広範囲に広がる事を確認している(註1)。一方、西側には北から南へ流走した河道の地割が明瞭に認められ、やはり湿地状の堆積を確認している状況から見て、上原遺跡よりも北側の平地は、丘陵部からの流路と高梁川の旧河道が合流し、北から西へ抜けていたと予想され、西側は氾濫原か後背湿地と推測される。発掘調査では弥生時代前期の遺構と遺物を検出しておらず、おそらくはこうした湿地を利用して開田されたのであろう。従って遺跡地図に示された「散布地」の範囲(註2)と立会調査のデータを加味すれば、遺跡の範囲はおよそ長さ1300m、幅300mの規模であり、今回の調査地は遺跡の北端に位置していることになる。そして、遺跡が形成された基盤層は硬くしっかりとした粘質土で安定しており、集落を形成するには居住に適した好所であったことがうかがえる。



第125図 上原遺跡模式図 (S=1/25,000)

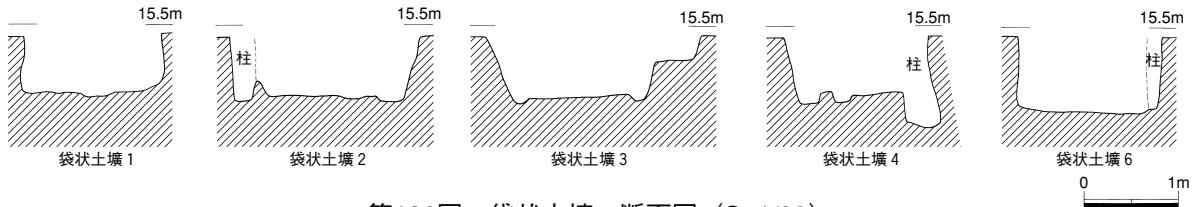
今回の発掘調査では弥生時代前期、中期、後期、そして古墳時代前期の遺構と遺物を検出した。弥・前・Ⅲ期の遺構は、溝1・溝2・P6を検出し、溝はいずれも浅く断続的で溝1からは壺・甕などが、溝2からは壺と共に人面土製品が出土した。廃棄されていたとは言え人面土製品は冠帽状の仮面であり、鳥装の一装束でもあることから当地及びその周辺が祭場であった可能性は高い。

上原遺跡の立地が自然堤防(集落域)の上位であり、高梁川の本流から西へ流走する旧河道の分岐点もしくは推測される湿田への取水口でもあり、農耕祭祀を行う上では象徴的位置関係にあるのではないかと思われる。

弥・中・Ⅱ期の遺構・遺物は方形土壙を1基

第10表 上原遺跡の変遷

弥 生 時 代												古墳時代	
前 期			中 期			後 期			前 期				
I	II	III	I	II	III	I	II	III	IV	I	II		
		■		■			■				■		



第126図 袋状土壙 断面図 (S=1/80)

検出し、ここから壺51、甕53・甕54、台付鉢52が出土した。袋状土壙2からは甕12・甕13、高坏21が出土し、袋状土壙4からは高坏33、袋状土壙6では円形浮文や網代状の刺突文、そして鋸歯文によって加飾された台付鉢34が出土した。中期の遺構は総じて少ない状況にあったが、周辺部に遺構が展開していることを強くうかがわせる。

弥・後・I期は遺構数が最も多く、袋状土壙1～6や、土壙1、後期とみられる建物、柱穴なども検出した。当該期において集落は盛期を迎える、周辺部における竪穴住居との対応関係も推測することができる。また、袋状土壙は6基を確認し小規模な袋状土壙5を除いては、上端径が150cm前後と近似しており、それぞれが1m前後の距離で営まれている。

袋状土壙には壁面に柱を建てた袋状土壙2、袋状土壙4や袋状土壙6、そして袋状土壙3のように底部に溝をめぐらす事例も確認でき、整理すると次ぎのようになる。

- ・袋状土壙1は断面形状が円筒形を呈し、底部の中央に浅い窪みが認められる。
- ・袋状土壙2は壁面の上部が広がり、壁にくい込むように径24cmの柱を建て、底部には小さな窪みを検出した。
- ・袋状土壙3は拡張区を設け、断面が段状になっている。本体部分は壁面の上部が広がり、底部に小溝を巡らせているが、完周はしていない。
- ・袋状土壙4は円筒形を呈し、壁際に径34cmの柱を1本建てていた。柱位置となる底部や壁面には柱の腐朽に伴う炭粒が付着していた。
- ・袋状土壙6は壁面・底部とも一定した形状ではなく、長軸側の底部は浅い段を持つと共に、ゆるやかに傾斜する。短軸側は断面がフラスコ状となり、壁際に径15cmの柱が建てられていた。

このように、各袋状土壙には底部のくぼみや壁体溝を示すような小溝が認められ、貯蔵施設として活用された痕跡を留めている。また、壁際の柱はおそらく覆いの支柱として建てられた事例ではないだろうか。

発掘調査の結果、わずかな面積でありながら遺構密度は濃く、主に弥生時代前期、中期、後期と古墳時代前期の遺構を検出し、弥生時代後期に盛期を迎えていたことが判明した。特に袋状土壙は、食料の貯蔵・保管を目的に集中的に営まれ、検出面から80cmの深さでも湧水がなく、貯蔵に適した選地である。袋状土壙の埋土からはサヌカイトの剥片や、石鎌、砥石が出土し、当地において石器製作が行われ、近傍に居住域が存在するのであろう。

遺構の切り合い関係では溝1(弥生前期)→方形土壙(弥生中期)→袋状土壙6(弥生後期)→竪穴住居1(古墳前期)の順で変遷していることを確認し、各期の集落が展開していると予想される。

今回の発掘調査は上原遺跡の一端が判明したばかりでなく、古墳時代前期にはすぐ北側の丘陵に秦上沼古墳、秦大塹古墳、秦茶臼山古墳の有力墳が築造されており(註3)，当地域に在地首長が成長していく前史や、その背景を考えていく上でも意義深い調査成果となった。

2. 人面土製品について

人面表現には絵画土器、人面土製品、人形土製品、分銅形土製品があり、銅鐸、戈、板等にも描かれている。

総社市では弥生時代後期の人面絵画土器が2例あり、新本一倉遺跡出土の小形壺と宮山遺跡より表採された器台が知られている。上原遺跡出土の人面土製品は弥生時代前期の所産であり、時代が大きく遡るばかりか、人頭に装着する土製の被り物としては全国初の出土例になった。

被り物の用語を整理すると、まず冠は頭にかぶるものを指し、古代以降は儀式の束帶・衣冠などに使われ強調されるようになる。次に帽子は布製の被り物であり、材質の違いで区別される。いずれも被り物としては類似するが歴史的な変遷や材質、機能面に違いがあり、厳密に定義づけることは困難なため、ここでは広義の意味において被り物の総称である「冠帽」を用いることにしたい（註4）。

その一方で、人面土製品が人の顔を造形している以上、仮面という用語を適用させることもできる。仮面は木・紙・土などでいろいろなものの顔にかたどって作った面であり、春成秀爾氏は次ぎのように定義している。「非日常的な状態に変化するために顔を覆う物、あるいは頭にかぶるために木、被革、骨、布、粘土、金属などを材料にして作った面や被り物を仮面と呼ぶのが習わしである。」そして、顔や頭をかたどっているが人頭に合わないものも、同じ形をしているならば仮面と呼ぶことが普通としている（註5）。こうした見解に立てば、人面土製品は形状が「冠帽」であるのと同時に、その性格は「仮面」ということができよう。

さて、人面土製品は人の頭と顔を写実的に造形している。顔には両目に孔があけられ、眉毛と鼻、鼻孔までもが表現されており、まぶたにはイレズミと見られる装飾が施される。そして、頭頂部から後頭部にかけてはひれのような突起が取り付けられている。

成人であれば実際に被ることができる形状と大きさであるが、その場合、土製品の目の位置が額にくるため両眼から孔を見通すことはできない。また、鼻の位置を見ると本来であれば両目の間に鼻根部があり、そこから鼻背が延び鼻尖にいたるが、人面土製品の場合は、かなり上位に鼻が貼り付けられ、しかも現実ではありえない両目の間に鼻孔が表現されている。

これは人面表現が写実的であるのと同時に、形象化された一面を示している。残念ながら両目より下は欠損しており詳細は不明であるが、仮に口が表現されていたならば頭部に対して顔全体が圧縮し



第127図版 人面土器

た形状となり、装着時には眉間にあたりに口が位置することになるのであろう。

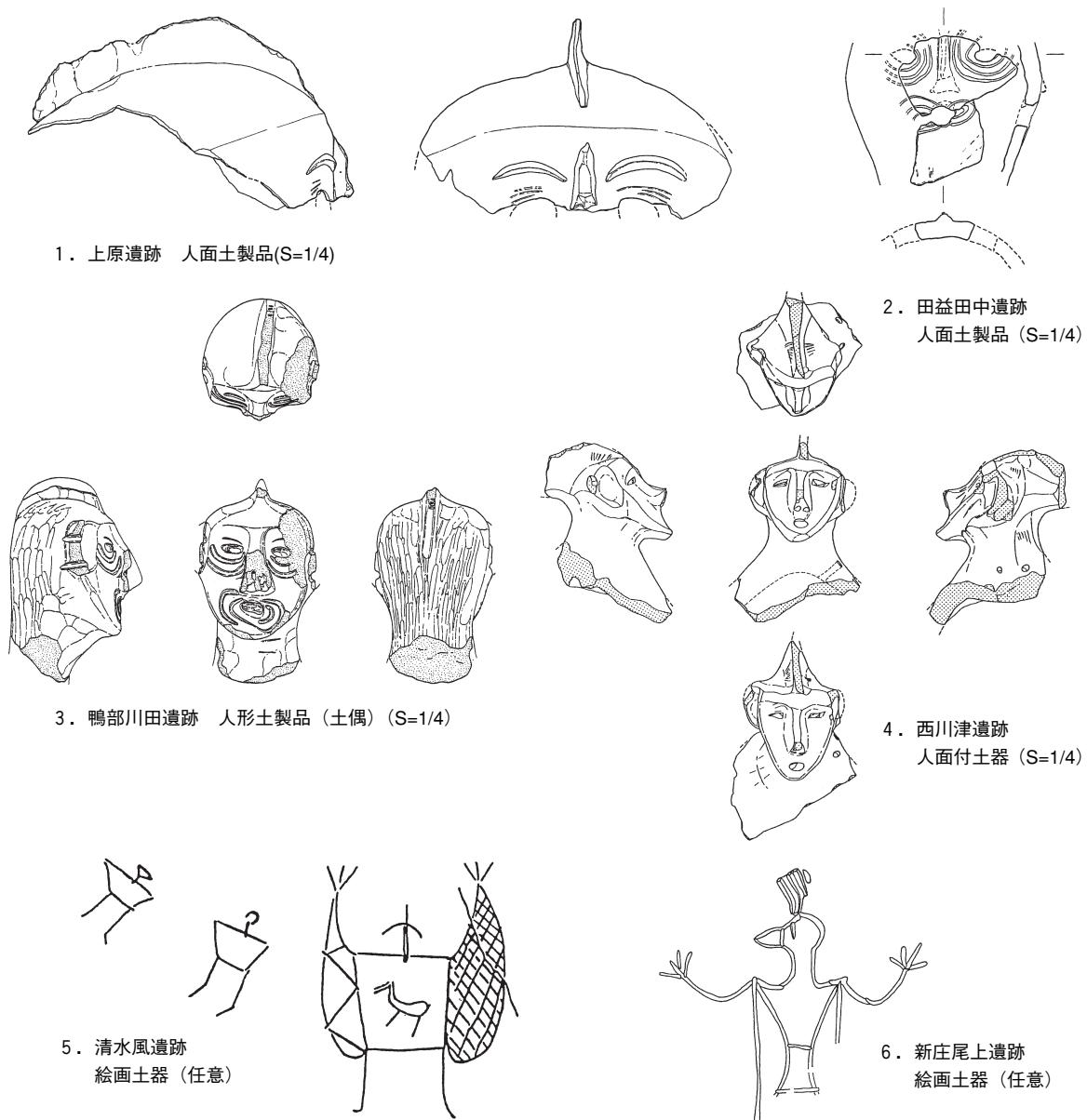
では一体、この冠帽状の仮面は何のために造形されたのであろうか。冠帽、頭頂部の突起、顔、イレズミといった属性から人形土製品と絵画土器について見ておきたい。

1 岡山県上原遺跡

本文P83・84を参照

2 岡山県田益田中遺跡

人面土製品は弥・前・Ⅱに比定され、県下では最古の事例である。器壁には目と口に孔をあけ、鼻が造形されている。目の回りと口の回りにはイレズミが線刻されている。遺物の性格としては土製面とする柴田英樹氏の見解や、人面付土器の可能性を考える設楽博己氏や下澤公明氏の見解がある（註6）。



第128図 各種の人面表現

3 香川県鴨部川田遺跡

鴨部川田遺跡出土の人形土製品は人頭を写実的に造形しており、目、鼻孔、口、両耳朶に2カ所の切り欠きがあり、目の回りと口の回りにはイレズミと見られる線刻、そして、赤色顔料の塗彩が確認できる。また、頭頂部から後頭部にはひれ状の突起があり、鳥の羽根飾りと考えられている。人面、イレズミ、羽根飾りの属性を合わせもつという意味においては、上原遺跡例とモチーフが類似しており、弥生時代前期に比定される（註7）。

4 島根県西川津遺跡

西川津遺跡出土の人面付土器は、人頭よりも頸部下が空洞となるため、壺か蓋の器形が想定されている。人頭が写実的に造形され、目・鼻・鼻孔・口と共に左耳には穿孔が1カ所認められ、頭頂部にはひれ状の突起が表現されている。この突起は額から斜め上方にむけて立ち上がり後頭部へと流れる形狀で、帽子風の被り物と推測されている（註8）。時期は弥生時代前期末から中期初頭に比定される。

5 奈良県清水風遺跡

清水風遺跡の絵画土器（壺）は、鳥装の司祭者を描いた弥生時代中期後葉の絵画資料として著名である。3人の人物が並んで描かれ、その内、両手を上に挙げている人物に着目すれば、大きな袖をもつ衣装を身につけ腹には鹿か鳥が描かれている。頭には下向きの弧線が被り物を表し、そこから上に突き出した突起は鳥の羽根飾りと見られている。

6 岡山県新庄尾上遺跡

新庄尾上遺跡から出土した絵画土器（壺）には、鳥装の司祭者が描かれている。人頭にはとさか状の羽根飾りと、顔にくちばしを付けた仮面を装着し、肩にはマントのような衣装を羽織っている（註9）。

本例は岡山県内において鳥の装束をまとった祭祀が根付き、展開していたことを証左する重要な資料であり、時期は弥生時代中期後葉に比定される。

その他にも人頭に羽根飾りが表現される絵画土器は大阪府星丘西遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、鳥取県稻吉遺跡などがあり、佐賀県川寄吉原遺跡の銅鐸形土製品や、福岡県上罐子遺跡出土の板などにも事例がある（註10）。

以上の状況から復元すれば、人面土製品は人頭や顔全体を全て覆うものではなく、額のあたりで収まる冠帽ではないかと思われる。それはまた人の頭と顔、そして鳥の冠羽が一体化した「仮面」であったと見られる。

弥生時代には銅鐸・土器などの絵画から信仰の対象は鹿・鳥・祖先であったと推定され、このうち仮面の存在を想定できるのは鳥だけである。鳥は豊作を祈念し穀靈を送る使いとして、また靈魂を冥界に運ぶものと考えられており、その背景には弥生人の鳥靈信仰が存在した（註11）。清水風遺跡や新庄尾上遺跡などにみられる絵画土器は、鳥装した司祭者の冠帽、羽根飾り、そして仮面を装着した姿を描いており、これまで布製、木製の被り物が想像されていたが、上原遺跡の人面土製品はこうした被り物が実在したことを証明するものであり、弥生人が鳥に扮装して祭祀を執行した装束の一つと言うことができる。

また、まぶたに施されたイレズミは、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期に関東から中部地方を中心に分布する黥面土偶に起源があり、その影響を受けたとする設楽博己氏の見解がある（註12）。上原遺跡の人面土製品は伝統的な身体表現を写し、鳥靈信仰に伴う鳥装の習俗が融合した冠帽とも評価

されるのである。

水稻農耕文化が定着しつつある弥生時代前期において、鳥の装束をまとった祭祀が上原遺跡において展開しており、人面土製品は当時の習俗や祭祀を知る上で、新たな視点を与えてくれる絶好の資料と言えよう。

- 註1 「神在幼稚園建て替え工事に伴う確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』4 総社市教育委員会 1994年
「校舎増築に伴う立会調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』11 総社市教育委員会 2001年
「自動車車庫（消防防災格納庫）建設に伴う立会調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』13 総社市教育委員会 2004年
「個人住宅建設に伴う立会調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』14 総社市教育委員会 2005年
- 註2 『改訂岡山県遺跡地図 第5分冊倉敷地区』岡山県教育委員会 2003年
- 註3 『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社 1991年
- 註4 『日本国語大辞典第二版』第十一巻 小学館 2002年
『角川古語大辞典第一巻』角川書店 昭和57年
- 註5 春成秀爾「日本の先史仮面」『仮面』里文出版 平成14年
- 註6 柴田英樹「弥生時代の顔一人面文と撥形文からみた祖靈觀についてー」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集』下巻古代吉備研究会 2002年
- 註7 設楽博己「黒面土偶から黒面絵画へ」『国立歴史民俗博物館報告』第80集 国立歴史民俗博物館1999年
- 註8 『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』香川県教育委員会ほか 1998年
- 註9 『西川津遺跡Ⅷ』島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001年
- 註10 『新庄尾上遺跡』岡山市教育委員会 2009年
- 註11 春成秀爾「鳥・鹿・人」「弥生の神々 祭りの源流を探る」大阪府立弥生文化博物館 1992年
『弥生画帖 弥生人が描いた世界』大阪府立弥生文化博物館 2006年
- 註12 金闇 忽「神を招く鳥」『考古学論考』平凡社 昭和57年
- 註13 設楽博己「黒面土偶から黒面絵画へ」『国立歴史民俗博物館報告第80集』国立歴史民俗博物館1999年

参考 『シャマニズムーアルタイ系諸民族の世界像ー』ウノ・ハルヴァ, 訳田中克彦 三省堂 昭和46年
『鳥の考古学』かみつけの里博物館 1999年

引用 第128図 2, 「田益田中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』140 岡山県教育委員会 1999年
3, 設楽博己「黒面土偶から黒面絵画へ」『国立歴史民俗博物館報告』第80集 国立歴史民俗博物館 1999年
4, 『西川津遺跡Ⅷ』島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001年
5, 春成秀爾「日本の先史仮面」『仮面』里文出版 平成14年
6, 『新庄尾上遺跡』岡山市教育委員会 2009年, 一部改変

第11表 土器観察表

※法量の（ ）は復原値を表す。

番号	遺構	器種	器形	法量(cm)			焼成	色調	胎土	備考
				口径	器高	底径				
1	竪穴住居1	土師器	甕	(15)			良好	明褐色	やや粗 長石・石英・角閃石を含む	
2	竪穴住居1	土師器	甕	(15)			良好	褐色	やや粗 長石・石英・角閃石を含む	
3	竪穴住居1	土師器	甕	(17)			不良	灰褐色	やや粗 2mm以下の砂粒多	
4	袋状土壙1	弥生土器	壺	(16)			不良	橙色	粗 3mm以下の砂粒多	
5	〃	弥生土器	壺	(16)			良好	暗褐色	細い 長石・石英・角閃石多い	
6	〃	弥生土器	甕				良好	橙色	細い 角閃石含む	
7	〃	弥生土器	甕			6.6	良好	褐色	やや粗 2mm以下の砂粒多 長石・石英含む	
8	〃	弥生土器	高坏				良好	黄褐色	細い 長石・石英多い	
9	袋状土壙2	弥生土器	壺	(14)			良好	黄褐色	細い 長石・石英・赤色粒含む	
10	〃	弥生土器	壺			10	不良	橙色	粗 3mm以下の砂粒, 長石・石英・角閃石含む	
11	〃	弥生土器	壺			(13)	良好	黄灰色	やや粗 3mm以下の砂粒含, 石英・長石含む	
12	〃	弥生土器	甕				良好	黄橙色	細い	
13	〃	弥生土器	甕				良好	橙色	細い 長石・石英・金雲母含む	
14	〃	弥生土器	甕	(14)			良好	黄橙色	粗 2mm以下の砂粒多い 長石・石英・角閃石含む	
15	〃	弥生土器	甕			7.4	良好	橙褐色	細い 長石・石英含む	
16	〃	弥生土器	甕			5.3	良好	橙褐色	細い	
17	〃	弥生土器	壺			6.9	良好	橙褐色	細い 長石・角閃石多い	
18	〃	弥生土器	高坏			12	良好	橙色	細い 長石含む	
19	〃	弥生土器	高坏				良好	橙褐色	細い	
20	〃	弥生土器	高坏				良好	黄灰色	細い 2mm以下の砂粒,長石多い	
21	〃	弥生土器	高坏	23			良好	黒褐色	細い 長石含む	
22	〃	弥生土器	鉢				良好	橙色	細い	
23	袋状土壙3	弥生土器	甕				良好	褐色	やや粗2mm以下の砂粒多 長石・石英・角閃石含む	
24	〃	弥生土器	壺				良好	黄褐色	細い 長石・石英・角閃石含む	
25	〃	弥生土器	壺			7.7	良好	橙褐色	細い 長石・石英・角閃石含む	
26	〃	弥生土器	甕			11	良好	橙褐色	細い 長石・石英・角閃石含む	
27	〃	弥生土器	甕			6.5	良好	橙褐色	細い 長石・石英多い	
28	〃	弥生土器	甕			8	不良	褐色	やや粗 2mm以下の砂粒多 長石・石英・角閃石含む	
29	〃	弥生土器	高坏				良好	褐色	細い 長石多い	
30	〃	弥生土器	高坏				良好	橙褐色	細い 長石・角閃石含む	
31	袋状土壙4	弥生土器	甕			6	良好	橙色	細い 長石・石英・角閃石含む	
32	〃	弥生土器	鉢				良好	橙色	細い	
33	〃	弥生土器	高坏			5.2	不良	黄灰色	やや粗 2mm以下の砂粒多,長石・石英・角閃石含む	
34	袋状土壙6	弥生土器	台付鉢				良好	黒褐色	細い	
35	〃	弥生土器	壺	12.7			良好	黄褐色	細い 長石・石英多い	
36	〃	弥生土器	壺	14			良好	黄褐色	細い 長石・石英・角閃石多い	
37	〃	弥生土器	甕				不良	橙褐色	やや粗 2mm以下の砂粒多 長石・石英含む	

番号	遺構	器種	器形	法量(cm)			焼成	色調	胎土	備考
				口径	器高	底径				
38	袋状土壙 6	弥生土器	甕				不良	黄褐色	粗 3mm以下の砂粒多,長石・石英多い	
39	〃	弥生土器	甕	18			良好	橙色	細い	
40	〃	弥生土器	甕	10.6			良好	黄褐色	細い 長石・角閃石多い	
41	〃	弥生土器	甕	(13.5)			良好	黄橙色	細い 長石多い	
42	〃	弥生土器	甕	16			良好	黄橙色	細い 長石・石英少い	
43	〃	弥生土器	甕	16			良好	黄褐色	細い 長石・石英・赤色粒多い	
44	〃	弥生土器	甕			7.2	良好	灰褐色	細い 2mm以下の砂粒多 長石・石英含む	
45	〃	弥生土器	甕			6.2	良好	褐色	細い 2mm以下の砂粒わずか	
46	〃	弥生土器	甕			6	良好	褐色	細い 角閃石含む	
47	〃	弥生土器	高坏				良好	明褐色	細い 長石・角閃石わずか	
48	〃	弥生土器	高坏	23			良好	橙色	細い 長石・角閃石含む	
49	〃	弥生土器	鉢	5.6	4.8	2.7	良好	橙褐色	細い 長石多い	
50	土壙 1	弥生土器	蓋	11.4	4		不良	黒褐色	粗い 3mm以下の砂粒,石英多い	
51	方形土壙	弥生土器	壺				良好	灰黄色	やや粗 2mm以下の砂粒多,長石・石英含む	
52	〃	弥生土器	台付鉢				不良	黒褐色	粗 長石・石英多い	
53	〃	弥生土器	甕			5.5	良好	灰褐色	細い 長石・石英含む	
54	〃	弥生土器	甕	16.5	24.7	5.4	良好	灰白色	細い	
55	P 6	弥生土器	甕				不良	赤褐色	粗い 3mm以下の砂粒多,長石・石英・角閃石含む	
56	溝 1	弥生土器	壺	13.4	23.4	7.3	不良	赤褐色	粗い 3mm以下の砂粒多,長石・石英多い	
57	〃	弥生土器	壺	14.3			不良	黄灰色	やや粗 3mm以下の砂粒多,長石多い	
58	〃	弥生土器	甕	(25)			不良	橙褐色	粗い 3mm以下の砂粒多,長石・石英多い	
59	〃	弥生土器	甕	24.8			不良	黄褐色	細い 3mm以下の砂粒多,長石・石英多い	
60	〃	弥生土器	甕	(25.6)			不良	橙褐色	粗い 長石・石英多い	
61	溝 2	弥生土器	壺				不良	赤褐色	粗 3mm以下の砂粒多い	
62	〃	弥生土器	壺				不良	赤褐色	粗い 3mm以下の砂粒多,長石・石英・角閃石多い	
63	〃	弥生土器	壺				不良	橙褐色	粗い 3mm以下の砂粒多,長石・石英・角閃石多い	
64	〃	弥生土器	壺			7.6	不良	黄褐色	粗い 3mm以下の砂粒多,長石・石英含む	
65	〃	土製品	人面				不良	黄橙色	粗い 2mm以下の砂粒多,長石・石英多い	
66	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕				不良	灰褐色	やや粗い 2mm以下の砂粒多,長石・石英多い	
67	〃	弥生土器	甕	(14)			良好	明褐色	細い 長石・石英・角閃石含む	
68	〃	弥生土器	壺			8.5	良好	褐色	粗い 3mm以下の砂粒多,長石・石英含む	
69	〃	弥生土器	高坏				不良	橙褐色	細い 長石多い	
70	〃	須恵器	坏 A?				良好	淡灰色	細い	
71	袋状土壙 4	弥生土器	甕?				良好	橙褐色	細い 角閃石・長石含む	第153図版
72	袋状土壙 2	〃	壺				良好	黄灰色	細い	〃
73	袋状土壙 1	〃	壺				良好	黄灰色	細い 角閃石含む	〃



第129図版 調査地全景（南から）



第130図版 調査地全景（南西から）



第131図版 確認調査（西から）



第132図版 人面土製品出土状況（北西から）



第133図版 竪穴住居1（南から）



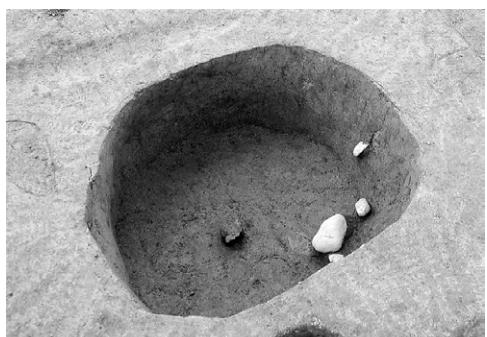
第134図版 建物1（北から）



第135図版 建物2（東から）



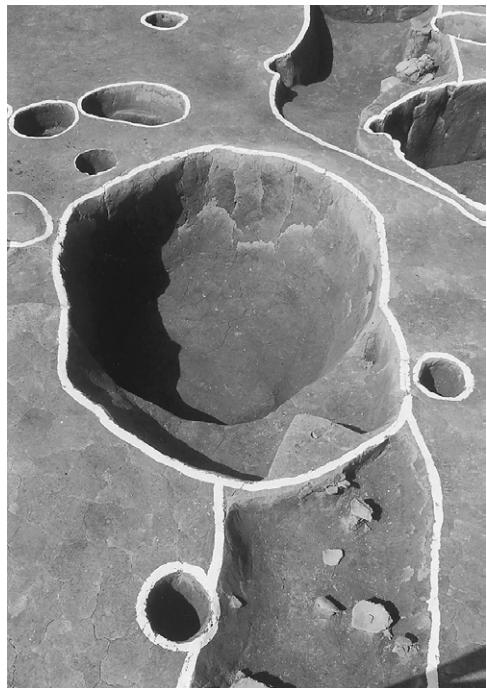
第136図版 袋状土壤1（北から）



第137図版 袋状土壤1 完掘（北から）



第138図版 袋状土壙 2（南から）



第140図版 袋状土壙 3（南から）



第139図版 袋状土壙 2 完掘（南から）



第141図版 袋状土壙 4（南から）



第142図版 土壙 1（東から）



第143図版 方形土壙、溝1、袋状土壙 6（南西から）



第144図版 袋状土壙 6（西から）



第145図版 方形土壙（北から）



第146図版 溝1（北から）



第147図版 溝1 遺物出土状況（東から）



第148図版 溝2（北西から）



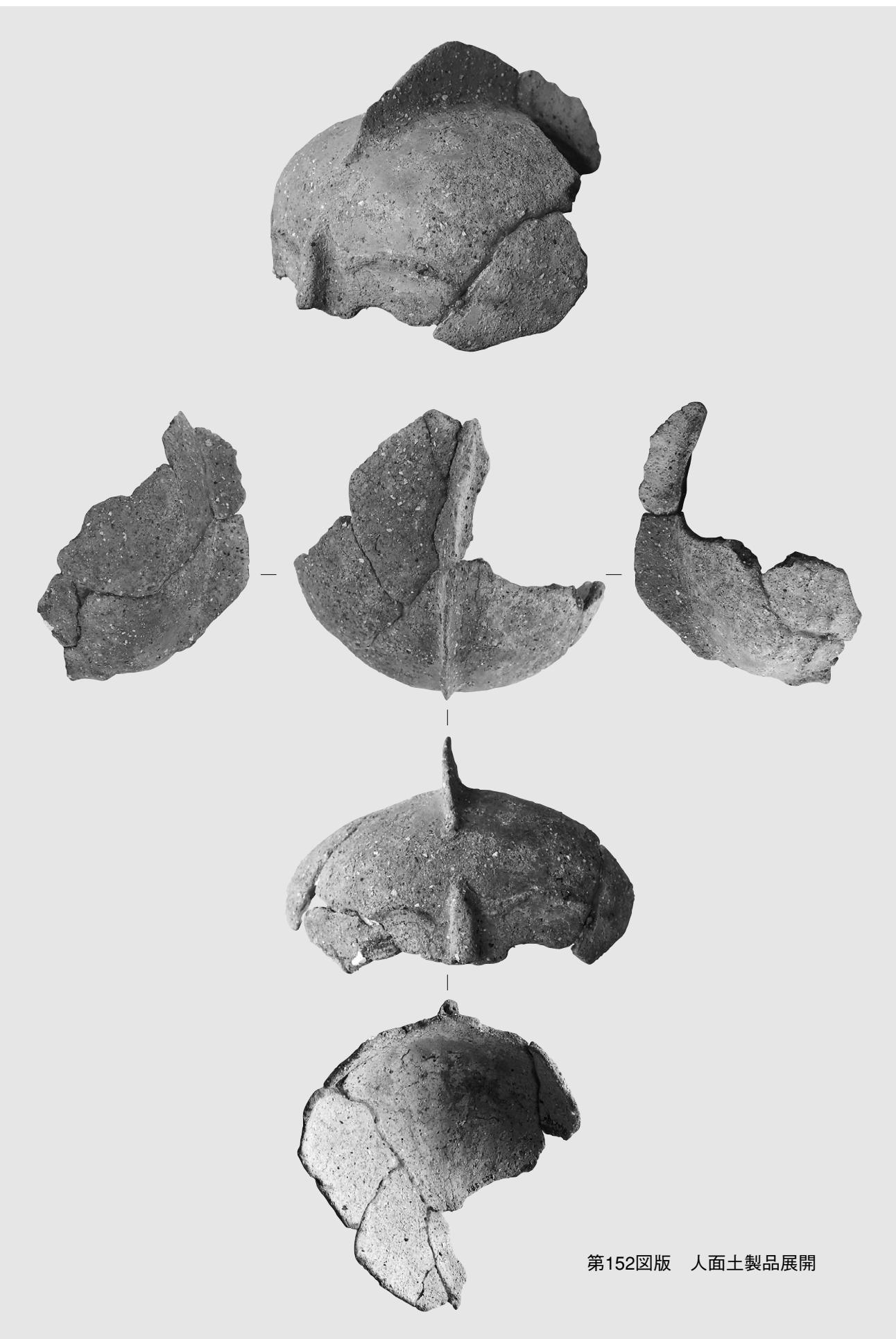
第150図版 調査区2（北から）



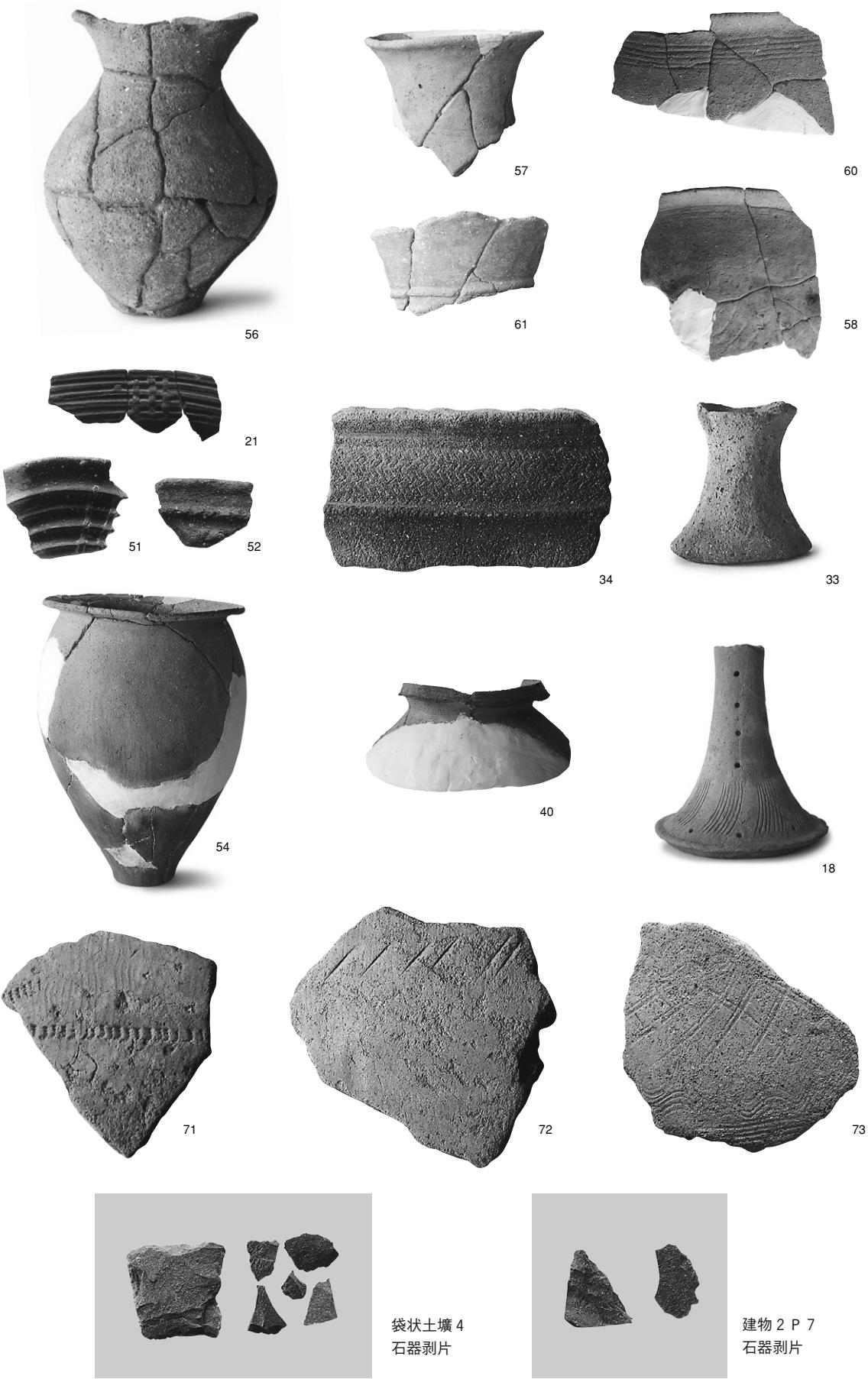
第149図版 P2（南から）



第151図版 竪穴住居2 炉（南から）



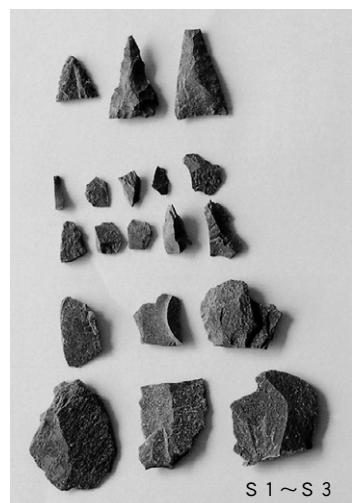
第152図版 人面土製品展開



第153図版 出土遺物



第154図版 溝1 石器剥片



第155図版 袋状土壌2 石鏃と剥片



第156図版 袋状土壌3 石鏃と剥片



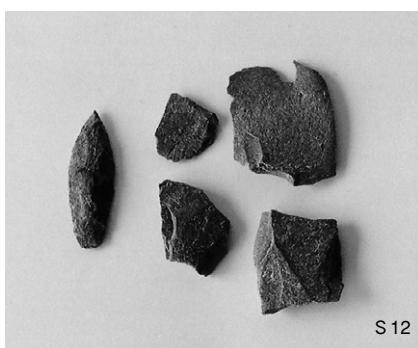
第157図版 袋状土壌3 磨石



第158図版 土壌 石器剥片



第159図版 袋状土壌6 砥石



第160図版 遺構検出面 石鏃と剥片



第161図版 遺構検出面 砥石

5. 史跡整備事業の概要

2008（平成20）年度 鬼城山環境整備事業

1 事業経過

鬼城山環境整備事業は、平成13年3月に策定した「史跡鬼城山環境整備基本計画」に基づいて進めている。事業費は国が1/2、県が1/6、市が2/6の割合で負担している。各年度の事業内容は「国史跡鬼城山整備委員会」の委員・文化庁・岡山県教育庁文化財課と協議しながら指導・助言をいただいている。

現在進めている整備の中心は、西門を中心とした復元地区であり、平成15年度に西門復元、平成18年8月にガイダンス施設を開館した。また、昨年は高石垣から第0水門間の土壘を整備した。

2 平成20年度整備事業概要

(1) 土壘復元

昨年に続き、復元土壘を西門側に延長した。具体的な箇所は高石垣上面である。これにより、高石垣から第0水門間の土壘がほぼ完成した。

(2) 板塀表示

平成19年度で部材調達を行った板塀の設置を行い、平成20年度で整備した土壘部分の板塀も同時に施工を行った。施工区間は17間分で約54mである。柱間の平均は3.01mである。

(3) 敷石・園路整備

西門脇から第0水門までの、外側敷石の目地止めを行い、敷石から一段下がった部分に園路を整備した。また、この園路から城内側に移動できる木製階段を設置した。

(4) 説明板設置

第0水門周辺の整備が完了したのに伴い説明板「敷石」を城内側へ、「城壁」を第0水門東へ設置した。

平成20年度（2008）年度事業経過

平成20年4月1日(火)	補助金交付決定通知（20府財第2号）
	補助対象経費 42,000,000円
平成20年5月20日(金)	第30回 鬼城山整備委員会
7月1日(火)	実施設計並びに監理監督業務契約
10月3日(金)	史跡鬼城山環境整備工事契約 (敷石・園路、説明板)
11月4日(火)	補助金交付決定変更通知書（20府財第263号）
	補助対象経費 47,000,000円
12月10日(水)	史跡鬼城山環境整備その2工事契約 (土壘天端、板塀、仮設道撤去)
平成21年3月31日(火)	竣工検査

(谷山雅彦)



第162図版 敷石・園路整備



第163図版 板塀表示



第164図版 説明板設置

6. 付 載

宮路谷瓦窯の採集遺物について

1. はじめに

宮路谷瓦窯は総社市福井字宮路谷に所在する。総社平野の北側に位置する秋葉山（標高274m）から、南東方向には標高100m以下の小丘陵地が、複雑に支脈を派生させながら裾野を広げている。市街地北部の泉ニュータウン住宅団地もこの低丘陵上に造成されているが、ここから東へ延びる支脈には東西幅約140m、南北幅約50mを測る西山丘陵が総社平野に突き出し、谷を隔てた北側にも途中L字形に屈折しつつ長さ30m、幅10mを測る小さな尾根が延びている。宮路谷瓦窯はこの尾根先端部の東側斜面に築窯された古代の瓦窯である。

かつての敷地造成により、斜面を掘削した際に露出したものらしく、崖面には窯体の断面が観察される。平成15年発行の『改訂 岡山県遺跡地図 第5分冊 倉敷地区』（註1）では2基の瓦窯が収録され、埋蔵文化財包蔵地として周知されていたが、後述の追記のとおり、駐車場の拡幅に際して事前調査が行われ、遺物が回収された。

採取時には現存する瓦窯を「東窯」、崩壊した窯を「西窯」と仮称しており、今回も暫定的にこの名称を用いることにするが、将来的に調査が進展し窯数が増加すれば名称を変更すべきと思われる。

本稿では遺跡の重要性に鑑み西窯の採集遺物を紹介することにしたい。

2. 遺跡の状況

瓦窯は標高約38mを測る低丘陵の東斜面に位置し、斜面の中程に並列していた。本来はこれらの瓦窯よりも下位の斜面に灰原が広がっていたとみられるが、すでに住宅地となり旧状は失われている。地元の方の話によれば住宅地は近代に丘陵の東斜面を削り、その土で宅地の造成が行われたとのことで、宅地や畠地には瓦片が混在していると言われている。



第165図 宮路谷瓦窯位置図 (S=1/10,000)

西窯をふくむ周辺は、崖面の崩落と共に原形を留めていないが観察所見によれば、煙道の一部が残存していたらしい。

一方、東窯は窯体の断面が露出しており、形状は底が平らな橢円形で、『岡山県遺跡地図』の記述によると幅1.7m、深さ1.3mを測る規模である。埋土には窯壁の赤褐色土片がブロック状に混入しているため天井部は崩落し、窯体内へ堆積しているものと見られる。側壁と底部は赤褐色に焼け、底面には平瓦と丸瓦が観察できる。しかし瓦が意図的に設置されているか、単なる堆積であるかは現状では明らかにできない。

窯構造は緩傾斜地に築窯されていることや、地山を掘りくぼめている点からみて窖窯であることは確実で、底部に瓦の集積があることから断面の位置は焼成室であろうか。そうであれば瓦窯の前庭部、焚口、燃焼室は失われ、現地にはまだ焼成室の一部と煙道が残存していることになる。

3. 遺物について

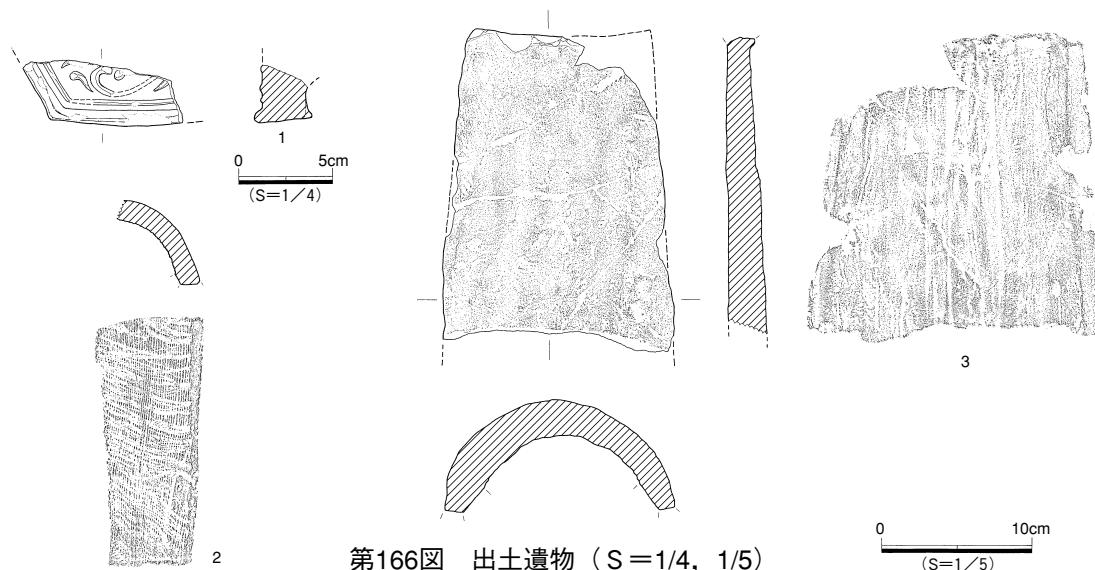
西窯の瓦はコンテナ箱にして約3箱分で、軒平瓦1点と行基式丸瓦、そして平瓦が採集された。瓦は総じて焼成不良であるが堅く焼きしまっており、橙褐色系の明度のある色調で、胎土には赤色粒を多くふくみ流状となる部分も認められる。

唐草文軒平瓦1は内区の唐草文が第2～第3単位を示し、第3単位の支葉は細長で、小さな表現となっている。内外区を画する界線は一重で、周縁は断面が丸みを帯びた傾斜縁となる。顎の形態は長さ2.4cmと短い段顎で、裏面は強いナデにより部分的に反る。

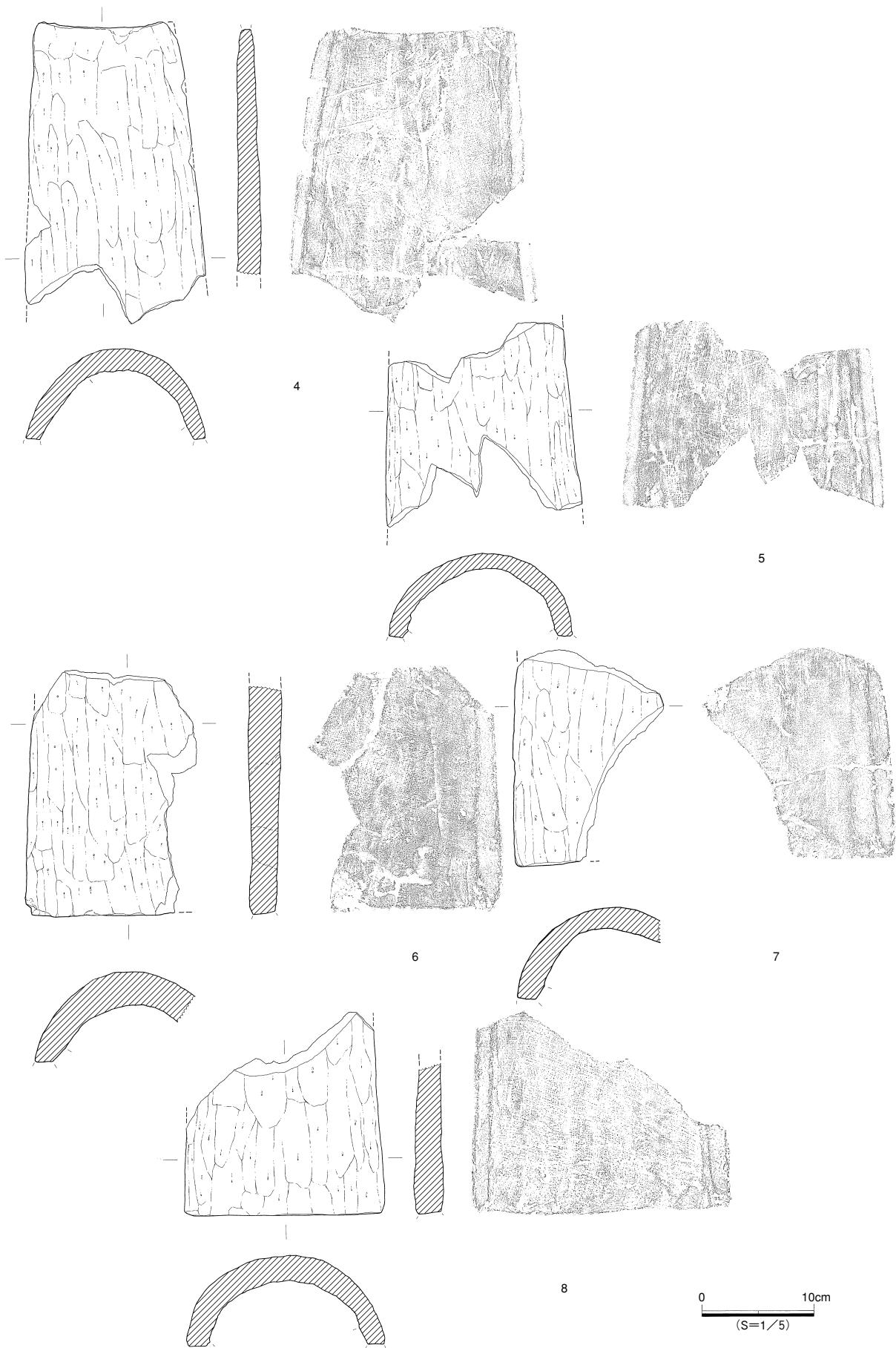
丸瓦2～8は小形の2と、大きくほぼ同規模の3～8があり、丸瓦6の断面で細長い粘土紐の接合痕が観察できるため、帶状の粘土を模骨に巻き上げた可能性がある。凸面の一次調整がわかる丸瓦3は、平行タタキを施した後に、二次調整でタテ方向に削っているが、丸瓦4～8は全てタテケズリで調整しているため、一次調整は完全に消えている。削る方向は広端及び狭端から削り一定していない。また、狭端が残存していた丸瓦4では端を部分的にヨコナデして仕上げていた。

凹面の布目压痕は6～16本/cmとバラツキがあり、側面形状は側縁を浅く削って仕上げている。胎土は細かく、2mm以下の砂粒（長石・赤色粒）を多く含んでいる。

平瓦9～16は全て一枚作りである。平瓦9・10・15・16から計測できる大きさは幅27～28cm、長さ39cmを測り、断面はゆるやかにカーブしている。



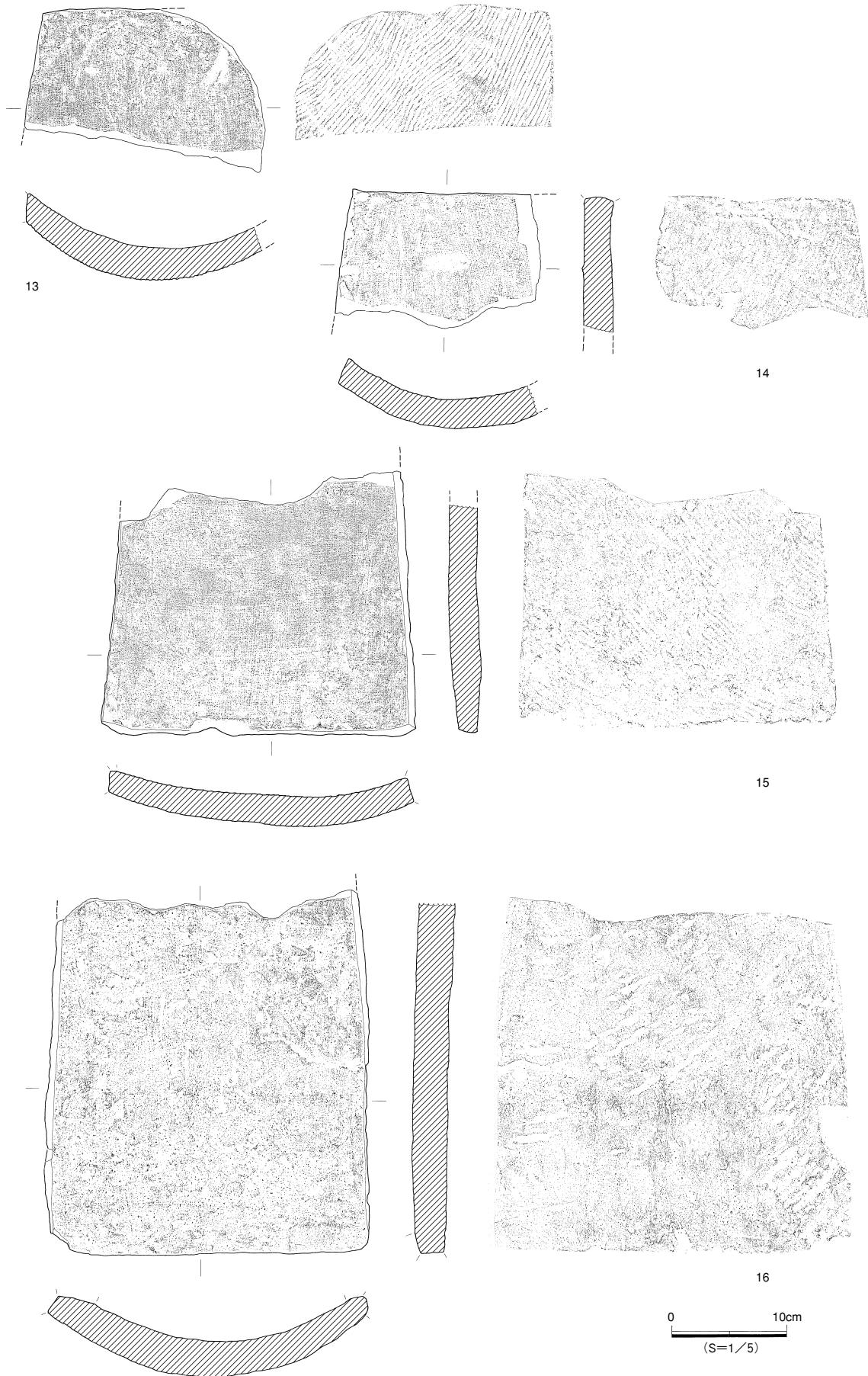
第166図 出土遺物 (S=1/4, 1/5)



第167図 出土遺物 (S = 1/5)



第168図 出土遺物 (S=1/5)



第169図 出土遺物 (S = 1/5)

凸面の一次調整は平行タタキ9・13・14と、太い縄目タタキ11・15・16があり、平瓦13を除いて二次調整はナデて仕上げている。

凹面は布目压痕が6～13本/cmと、丸瓦に比べやや粗い布を使用し、平瓦15には布目压痕の上に離れ砂が付着している。側面は側縁を浅く削り、端面も9・10・12・16の端縁を浅く削り仕上げるのみで、全ての平瓦において明確に面取りを意識しているとはいがたい。面取りといえるものは平瓦16のみであろう。

胎土は丸瓦と同様こまかく、長石と赤色粒を多く含んでいる。

3.まとめ

西窯の出土遺物は消費地から確認された事例は報告されておらず、古代とはいえ明確に年代を絞り込むことはむつかしい。したがって、遺物の属性を下記に挙げ将来の調査研究の進展に委ねたい。

まず、唐草文軒平瓦1は総社市では初見の資料で、唐草文の意匠ならびに一重の界線は平城宮式軒平瓦の退化した形状を示し、短い段頸も類例が少ない（註2）。

次に丸瓦は凸面の二次調整で縦方向に削ることが特徴で、市内の古代寺院から出土する7～8世紀代の丸瓦と比較すればヨコナデするものが多くタテケズリは認めがたい。明確にタテケズリを施す丸瓦は御所遺跡S E 01で出土した平安時代の軒平瓦で認められ、時期的に後出する要素と考えられる（註3）。

さらに、平瓦は全て一枚作りによる製作であり、凸面は平行タタキと太い縄目タタキで、粗い成形となっている。平瓦一枚作りは一般的には国分寺造営を機に普及すると考えられており、かつての備中国分僧寺の発掘調査成果でもこうした見解は追認されている。しかも国分僧寺の瓦と較べると焼成不良ではあるが、胎土が細かく焼きしまっており、瓦窯自体の技術改良を経て良質の瓦生産へ移行している状況が看取できるのである。

西窯の瓦は奈良時代の瓦に較べて後出する属性が多いため、ひとまず平安時代に収まる資料と考えておきたい。

（松尾）

註1 『改訂 岡山県遺跡地図 第5分冊 倉敷地区』岡山県教育委員会 平成15年

註2 「北溝手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』209 岡山県教育委員会 2007年

北溝手遺跡 河道3から出土した軒平瓦は、同じ形状の段頸で胎土に赤色粒を多く含む。筆者実見。

註3 「国府川改修工事に伴う発掘調査(1)」『総社市埋蔵文化財調査年報』15 総社市教育委員会 2006年



第170図版 宮路谷瓦窯全景（北東から）



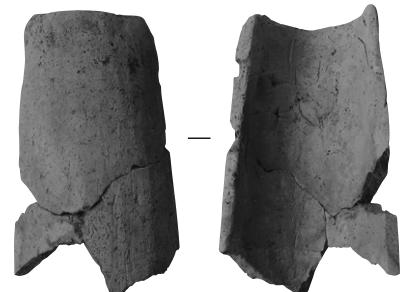
第171図版 東窯（東から）



1



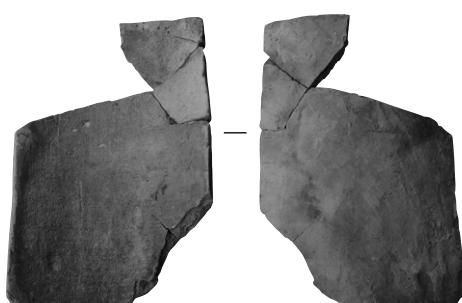
第172図版 東窯 底部の瓦（東から）



4



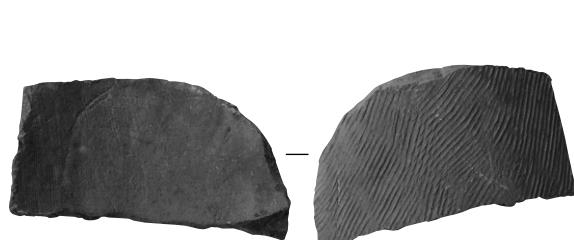
8



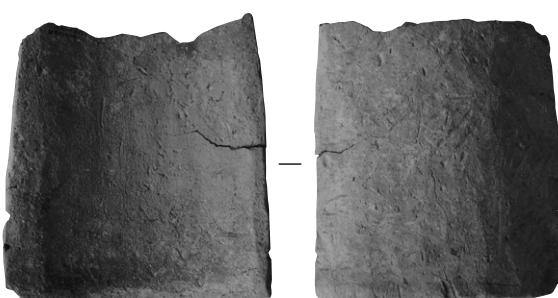
9



15



13



16

第173図 西窯の出土遺物

追記

宮路谷瓦窯は、すでに土地所有者よりその存在について報告を受けていたものであるが、具体的な情報としては岡山県と市町村職員による岡山県内詳細分布調査（平成11年度）の成果に負うもので、『改訂 岡山県遺跡地図 第5分冊』により周知された。

調査は2004年11月8日に行った。駐車場として、さらに敷地を広げる計画にあたり事前調査を行ったものである。東窯については断面に窯の存在を示す赤黒い焼成壁が露出していることを確認し、また西窯については赤く焼成を受けている箇所を認めたものの、その多くが崩落による再堆積との感触を得た。既存の物置小屋を建てる際の敷地造成により露出したであろう西窯が、風雪を経て崩落したものと思われる。このことから東窯は現況での写真撮影、西窯は崩落土を除去して遺物の採集を行うとともに、わずかでも窯が残されている可能性を求めて調査を行った。その結果、西窯は残された窯体部分は検出できず、全壊したものである。

今回の資料報告は、『大文字遺跡（栢寺廃寺）』（総社市埋蔵文化財発掘調査報告書20、2009年3月）において瓦の参考資料として掲載する予定であったが、諸般の事情により、本年報で出土遺物についての報告をすることとなったものである。
(前角)



第174図版 調査地近景



第175図版 東窯断面

報 告 書 抄 錄

ふりがな	そうじやしまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう							
書名	総社市埋蔵文化財調査年報							
副書名								
卷次								
シリーズ名	総社市埋蔵文化財調査年報							
シリーズ番号	19							
編著者名	谷山雅彦・平井典子・武田恭彰・前角和夫・高橋進一・松尾洋平							
編集機関	総社市教育委員会							
所在地	〒719-1192 総社市中央一丁目1番1号 TEL0866-92-8363							
発行年月日	2010(平成22)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かんばら 上原遺跡	岡山県 総社市 上原	33-208	303	34° 67' 37	133° 71' 59	3月2日 ～3月19日	約83m ²	携帯電話 基地局の設置
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上原遺跡	集落	弥生	竪穴住居 掘立柱建物 土坑 溝	弥生土器 石器・石製品	人面土製品の出土			

総社市埋蔵文化財調査年報 19

平成22(2010)年2月26日印刷
平成22(2010)年3月31日発行

編集発行 総社市教育委員会
岡山県総社市中央一丁目1番1号

印 刷 サンコー印刷株式会社
総社市真壁871—2